福井県埋蔵文化財調査報告　第114集

猪谷田畑遺跡
上吉野法善田遺跡
湯谷砂田遺跡

― 松岡吉野地区　県営経営体育成基盤整備事業に伴う調査 ―

２０１０

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県埋蔵文化財調査報告　第114集

猪谷田畑遺跡
上吉野法善田遺跡
湯谷砂田遺跡

― 松岡吉野地区　県営経営体育成基盤整備事業に伴う調査 ―

２０１０

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序　　文

本書は、平成17年度から19年度にかけて、松岡吉野地区県営経営体育成基盤整備事業に伴い、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施した、猪谷田畑遺跡・上吉野法善田遺跡・湯谷砂田遺跡発掘調査の各成果をまとめたものです。

平成17年度の猪谷田畑遺跡の調査では、中世の建物跡や井戸などのほか、土坑と溝を組み合わせた特徴的な遺構が検出されました。平成18年度の上吉野法善田遺跡の調査では、奈良･平安時代の墨書土器など、当時の識字層との関連を示す遺物が検出され、特に上吉野地区の伝承との関連性が注目されます。平成19年度の湯谷砂田遺跡の調査は小規模ながら､溝の覆土や過去の圃場整備に伴う客土の中から多量の遺物が検出され、周辺地域に相当規模の集落遺跡の存在が推測されます。

松岡吉野地区は、越前五山の一つに数えられる吉野ヶ岳が谷の南奥に位置し、山岳修行の場として古くから有名な土地ですが、往時の様子を伝える史料は数少なく、詳しいことはほとんど分かっていません。とりわけ、吉野地区の谷の中で遺跡が発掘されたのは、今回の一連の調査が初めてのことだけに、これらの調査成果は吉野地区の歴史を考察する基礎的資料として、今後重要な意味を持つこととなるでしょう。

本書をはじめとする今回の各調査成果が広く公開・活用され、埋蔵文化財に対するご理解と、郷土の歴史に関する探究心をより一層深める端緒としていただければ、誠に幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、地元の方々など多くの皆様からあたたかいご支援とご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

平成22年３月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所　長　　吉　岡　泰　英

例　　言

1　本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文）が『松岡吉野地区　県営経営体育成基盤整備事業』に伴い、福井県福井農林総合事務所の依頼を受けて、平成17年度に実施した猪谷田畑遺跡（福井県吉田郡永平寺町松岡湯谷所在）、同18年度に実施した上吉野法善田遺跡（同町松岡上吉野所在）、同19年度に実施した湯谷砂田遺跡（同町松岡湯谷所在）の発掘調査報告書である。

2　各遺跡の調査は、主査 中森敏晴（平成17～19年度）、嘱託職員 立壁肇（平成17･18年度）、同 水谷圭吾（平成18･19年度）、同 西端博紀（平成19年度）が担当した（役職はいずれも担当時、以下同様）。

3　各発掘調査は、猪谷田畑遺跡は平成17年11月８日から平成18年３月27日まで、上吉野法善田遺跡は平成18年４月24日から平成19年３月30日まで、湯谷砂田遺跡は平成19年４月12日から同年６月27日までそれぞれ実施した。各出土遺物整理作業は、猪谷田畑遺跡と上吉野法善田遺跡は平成19年４月１日から、湯谷砂田遺跡は平成20年４月１日から、いずれも平成22年３月31日まで県埋文にて実施した。

4　本書の編集は主任 中森があたり、同 赤澤徳明、主査 白川綾、嘱託職員 水谷と分担して執筆した。執筆の分担は以下のとおりである。

中森　第１･２章、第３～５章第１･２･４節、第６章

赤澤　第３章第３節１、第４章第３節１－３）、第５章第３節１　　白川　第４章第３節１－１）･２）

水谷　第３～５章第３節２

5　各遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合には、本書をもって訂正したものと了解されたい。

6　猪谷田畑遺跡と上吉野法善田遺跡の遺構全体図は、ともに中央測量設計株式会社に委託して作成したものを一部改変して使用した。上空からの写真は各航空測量時に撮影したものである。湯谷砂田遺跡の遺構全体図は、開拓航営設計株式会社に基本測量を委託し、県埋文が平板測量で作成した。

7　第１･２章の挿図は中森の指示のもと、主査 野路昌嗣が作成した。遺構デジタル図化および挿図作成は、猪谷田畑遺跡を株式会社太陽測地社に、上吉野法善田遺跡および湯谷砂田遺跡を株式会社アーキジオにそれぞれ委託した。遺物挿図は各執筆者が作成した。検出遺構および出土遺物の写真撮影･写真図版作成は中森がおこなった。

8　遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符合する。写真の縮尺は不同である。

9　本書における水平レベルの表示は海抜高（m）を示し、方位は磁北を用いた。また、X･Y座標軸は、国土方眼座標系第Ⅵ系に基づく。

10　本書中の挿図のうち、第１･３･４図は、国土地理院２万５千分１地形図「永平寺」（平成12年５月１日発行）を一部改変して作成した。

11　本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面･写真は、一括して県埋文に保管してある。

12　発掘調査に際しては、以下の個人および機関のご協力を得た（順不同･敬称略）。

清田正行　長谷川弘美　村上丈夫　山本利勝　児守盈智　清水清　橋本敦　秋田利恵子　永平寺町教育委員会

松岡多目的集会センターざおう荘（吉野公民館）　永平寺町松岡総合運動公園‘you（ゆ） me（め）パーク’

13　発掘調査ならびに本書の作成にあたり、次の方々からご指導･ご教示を頂いた（順不同･敬称略）。

浅野良治（永平寺町教育委員会）　木下哲夫（あわら市教育委員会）　冨井眞（京都大学）

望月精司（小松市教育委員会埋蔵文化財調査室）

14　発掘調査には地元の方々の参加･協力を得た。また、遺物整理作業は県埋文の整理作業員があたった。

目　　次

第１章　調査の経緯
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 2

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境
第１節　地理的環境 …… 5
第２節　歴史的環境 …… 6

第３章　猪谷田畑遺跡
第１節　概要 …… 9
第２節　遺構 …… 13
第３節　遺物 …… 21
第４節　まとめ …… 25

第４章　上吉野法善田遺跡
第１節　概要 …… 27
第２節　遺構 …… 31
第３節　遺物 …… 38
第４節　まとめ …… 63

第５章　湯谷砂田遺跡
第１節　概要 …… 65
第２節　遺構 …… 68
第３節　遺物 …… 70
第４節　まとめ …… 81

第６章　吉野ヶ岳と山岳信仰 …… 83

写真図版目次

図版第１　猪谷田畑遺跡　遺構
（１）　調査区遠景（東より）
（２）　調査区全景（北より）
図版第２　猪谷田畑遺跡　遺構
（１）　井戸１（南東より）
（２）　土坑１（北東より）
（３）　竪穴１（北東より）
図版第３　猪谷田畑遺跡　遺構
（１）　土坑10･溝８（東より）
（２）　土坑11･13･溝４・５・７（北より）
図版第４　猪谷田畑遺跡　遺物
図版第５　猪谷田畑遺跡　遺物
図版第６　上吉野法善田遺跡　遺構
（１）　調査区近景（南東より）
（２）　調査区①・②・③全景（南より）
図版第７　上吉野法善田遺跡　遺構
（１）　溝１・６（北より）
（２）　土器集中出土状況（北より）
図版第８　上吉野法善田遺跡　遺物
図版第９　上吉野法善田遺跡　遺物
図版第10　上吉野法善田遺跡　遺物
図版第11　上吉野法善田遺跡　遺物
図版第12　上吉野法善田遺跡　遺物
図版第13　上吉野法善田遺跡　遺物
図版第14　上吉野法善田遺跡　遺物
図版第15　上吉野法善田遺跡　遺物
図版第16　湯谷砂田遺跡　遺構
（１）　調査区近景（南より）
（２）　調査区近景（東より）
図版第17　湯谷砂田遺跡　遺物
（１）　溝１・３（北西より）
（２）　溝１・３（南東より）
図版第18　湯谷砂田遺跡　遺物
図版第19　湯谷砂田遺跡　遺物
図版第20　湯谷砂田遺跡　遺物

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　各遺跡調査区位置図 …… 3
第３図　吉野地区周辺の地形図 …… 5
第４図　吉野地区の主要遺跡・史跡分布図 …… 7
第５図　猪谷田畑遺跡
調査区南北方向土層断面図 ……10
第６図　猪谷田畑遺跡　遺構全体図 ……11・12
第７図　掘立柱建物実測図（１）……14
第８図　掘立柱建物実測図（２）……15
第９図　井戸１実測図 ……16
第10図　竪穴１実測図 ……17
第11図　溝・土坑実測図（１）……18
第12図　溝・土坑実測図（２）……19
第13図　溝・土坑実測図（３）……20
第14図　土器実測図（１）……22
第15図　土器実測図（２）……23
第16図　砥石実測図 ……24
第17図　上吉野法善田遺跡
調査区土層断面図 ……28
第18図　上吉野法善田遺跡　遺構全体図 …29・30
第19図　掘立柱建物実測図 ……32
第20図　掘立柱建物・ピット列実測図 ……33
第21図　土坑実測図（１）……35
第22図　土坑実測図（２）……36

第23図　土器集中出土状況実測図 …… 37
第24図　縄文土器実測図（1） …… 40
第25図　縄文土器実測図（2） …… 41
第26図　縄文土器実測図（3） …… 42
第27図　縄文土器実測図（4） …… 43
第28図　縄文土器実測図（5） …… 44
第29図　縄文土器実測図（6） …… 45
第30図　縄文土器実測図（7） …… 46
第31図　須恵器実測図（1） …… 48
第32図　須恵器実測図（2） …… 49
第33図　須恵器実測図（3） …… 50
第34図　土師器実測図 …… 51
第35図　バンドコ実測図 …… 52
第36図　石鏃・石匙・
　　石錘・磨製石斧実測図 …… 55
第37図　打製石斧実測図 …… 57
第38図　砥石・不明石器実測図 …… 58
第39図　磨石類実測図（1） …… 60
第40図　磨石類実測図（2） …… 61
第41図　湯谷砂田遺跡　遺構全体図 …… 66
第42図　湯谷砂田遺跡　調査区土層断面図 …… 67
第43図　遺構断面図 …… 69
第44図　須恵器実測図（1） …… 70
第45図　須恵器実測図（2） …… 71
第46図　須恵器実測図（3） …… 72
第47図　須恵器実測図（4） …… 73
第48図　須恵器実測図（5） …… 74
第49図　土師器実測図（1） …… 76
第50図　土師器実測図（2） …… 77
第51図　石鏃・砥石実測図 …… 81

表　目　次

第１表　掘立柱建物一覧表 …… 13
第２表　主要溝・土坑一覧表 …… 16
第３表　土器観察表 …… 23
第４表　砥石観察表 …… 24
第５表　掘立柱建物・ピット列一覧表 …… 31
第６表　主要土坑一覧表 …… 34
第７表　古代・中世土器観察表 …… 50
第８表　石器・石製品観察表 …… 62
第９表　主要溝・土坑一覧表 …… 68
第10表　土器観察表 …… 77
第11表　石器・石製品観察表 …… 81

第１章　調査の経緯

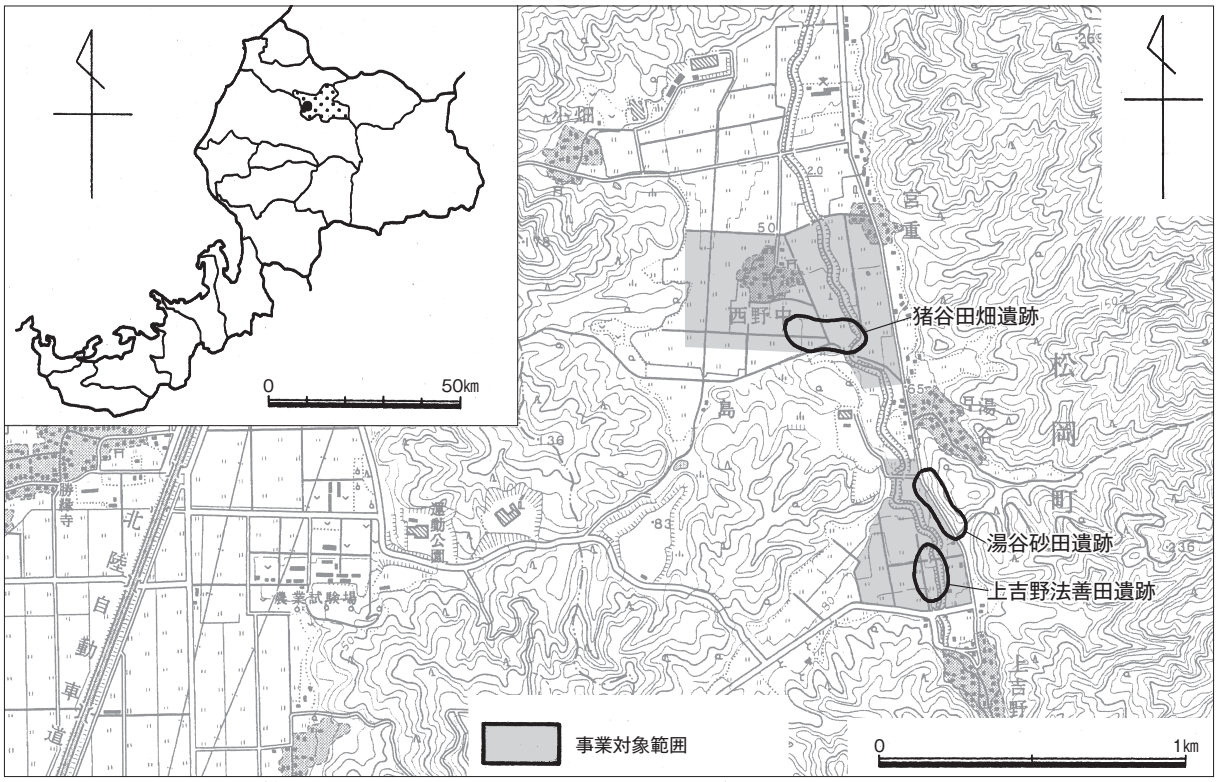
第１節　調査に至る経緯〔第１図〕

平成18年（2006）２月13日、福井県吉田郡の２町１村（松岡町・永平寺町・上志比村）が合併し、新生「永平寺町」が誕生した。その旧松岡町域の南東部に、旧松岡町・旧永平寺町・旧足羽郡美山町（現福井市）境にあたる吉野ヶ岳（標高547ｍ）がある。吉野ヶ岳は別名「蔵王山」とも呼ばれ、その北西麓から南北に細長く伸びる小谷一帯は吉野地区[1]と通称されている。

平成15年（2003）に、福井県福井農林総合事務所（以下、福井農林）は吉野地区において、県営経営体育成基盤整備事業を計画、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文）に試掘調査を依頼した（第１図）。同年11月、県埋文は試掘調査を実施し、事業予定地内において、猪谷田畑遺跡・上吉野法善田遺跡・湯谷砂田遺跡など４遺跡について本格調査を必要とし、調査必要面積は総計57,660㎡におよぶ旨を回答した。

明けて、平成16年（2004）７月に発生した、いわゆる福井豪雨が激甚災害指定を受け、復旧事業に県内各所が慌しい中、この事業が足羽川流出土の一部を受け入れる役割も担うこととなり、間接的にではあったが、復旧事業同様の迅速な進捗が求められた。同年10月、福井農林は事業計画を変更し、主に盛土による調査面積の縮小を図った。県埋文は変更内容を検討した結果、猪谷田畑遺跡・上吉野法善田遺跡・湯谷砂田遺跡の３遺跡を調査対象とし、その調査必要面積は総計6,700㎡になる旨を回答した。

計画変更後の調査内容が確定すると、福井農林は県教育委員会に本格調査を要請し、協議の結果、平成17年度下期に猪谷田畑遺跡、平成18年度に上吉野法善田遺跡、平成19年度に湯谷砂田遺跡にそれぞれ対応することで合意に達し、本事業に伴う３遺跡の調査計画が決定した。



第１図　遺跡位置図（左上：縮尺1/2,000,000　右：縮尺1/25,000）

第２節　調査の経過〔第２図〕

１　猪谷田畑遺跡

発掘作業は平成17年(2005)11月８日より開始した。全般に天候不順な日が続き、作業に困難が伴う中、12月には降雪にも見舞われ、調査中断を余儀なくされた。

年が明けて、平成18年（2006）２月９日より、調査区とその周辺の除雪作業を実施、同月21日より発掘作業を再開した。幸い、その後は天候も徐々に好転に向かい、３月27日に現地調査を終了した。

以下、調査日誌を抄録する。

平成17年11月８日	発掘作業開始。排水用溝切り。
11月11日	包含層掘削開始。
12月７日	遺構精査・掘削開始。
12月13日	降雪のため、調査中断。以後、冬期休止。
平成18年２月９日	現場事務所周辺除雪開始。
２月14日	調査区除雪開始。
２月21日	発掘作業再開。遺構掘削開始。
２月23日	セクション測図開始。
３月20日	井戸１完掘、写真撮影。
３月22日	土坑14完掘。調査区清掃。
３月24日	空中測量。全景・個別遺構写真撮影。
３月27日	一部、平面図補足。現地調査終了。

２　上吉野法善田遺跡

発掘作業は平成18年（2006）４月24日より開始した。調査区は調査完了順に三分（①～③）される。まず、調査区①(700㎡)は翌年度稼動予定のポンプ場建設地で、工期から逆算した引渡し期限が夏期（７～８月頃）までにと決められていたため、優先的に作業を進め、８月４日に調査を完了させた。

それ以外の調査区については、当初は年度末までの完了予定であったが、ポンプ場建設およびパイプライン埋設工事に際して、当初想定していなかった工事用道路等の作業ヤードが必要となる旨、福井農林から申し入れがあった。急遽、県文化課を含め、対応を協議した結果、作業ヤードを含めた調査区②(1,980㎡)を、11月末頃を目途に引き渡すことで合意し、11月22日に調査を完了させた。

残る調査区③（960㎡）については、平成19年（2007）３月27日に調査を完了させ、現地調査のすべてを終了した。

以下、調査日誌を抄録する。

平成18年４月24～27日	作業用具など搬入。
５月15日	発掘作業開始。排水用溝切りの後、包含層掘削開始。
５月25日	調査区①遺構精査・掘削開始。以後、調査区②・③包含層掘削と併行。
５月26日	内壁が被熱・赤化した土坑（土坑１）検出。
６月６日	土坑１写真撮影。
６月７日	土坑１平面図作成。
７月20日	土坑１焼土掘削、完掘。
８月２日	調査区①、清掃。遺物取り上げ。

第２図　各遺跡調査区位置図（縮尺1/5,000）

平成18年８月３日　調査区①空中測量。全景・個別遺構写真撮影。

８月７日　C・D３区で土器集中出土状況を確認。縄文土器が主体。

10月13日　福井農林よりパイプライン埋設工事とその工事用道路確保の申し入れ。協議の結果、調査区②を設定、11月末までに引き渡すことで合意。空中測量も１回追加。

10月19日　C２区土器集中出土状況２ヶ所、写真撮影。

11月21日　調査区②空中測量。

11月22日　調査区②全景写真撮影。

12月13日　調査区③遺構精査・掘削開始。

12月19日　冬期休止。

平成19年２月20日　発掘作業再開。遺構精査・掘削。

３月14日　調査区③清掃。

３月15日　空中測量。全景写真撮影。

３月26日　事務所・作業用具など清掃。

３月27日　遺物、作業用具などセンターへ運搬。現地調査終了。

３　湯谷砂田遺跡

平成19年（2007）４月12日より発掘作業を開始し、同年６月27日に終了した。

以下、調査日誌を抄録する。

平成19年４月12日　発掘作業開始。排水用溝切り。

４月13日　包含層掘削開始。

６月４日　遺構精査開始。溝１検出、掘削開始。

６月７日　溝２掘削開始。

６月12日　溝３掘削開始。

６月18日　遺構完掘。調査区清掃。

６月19日　全景写真撮影。遺構測量開始。

６月27日　遺構測量完了。現地調査終了。

註

１　合併以降は松岡吉野地区と呼ばれる。吉野の谷間一帯と、谷の出口付近に位置する松岡吉野堺集落までを含む。

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境

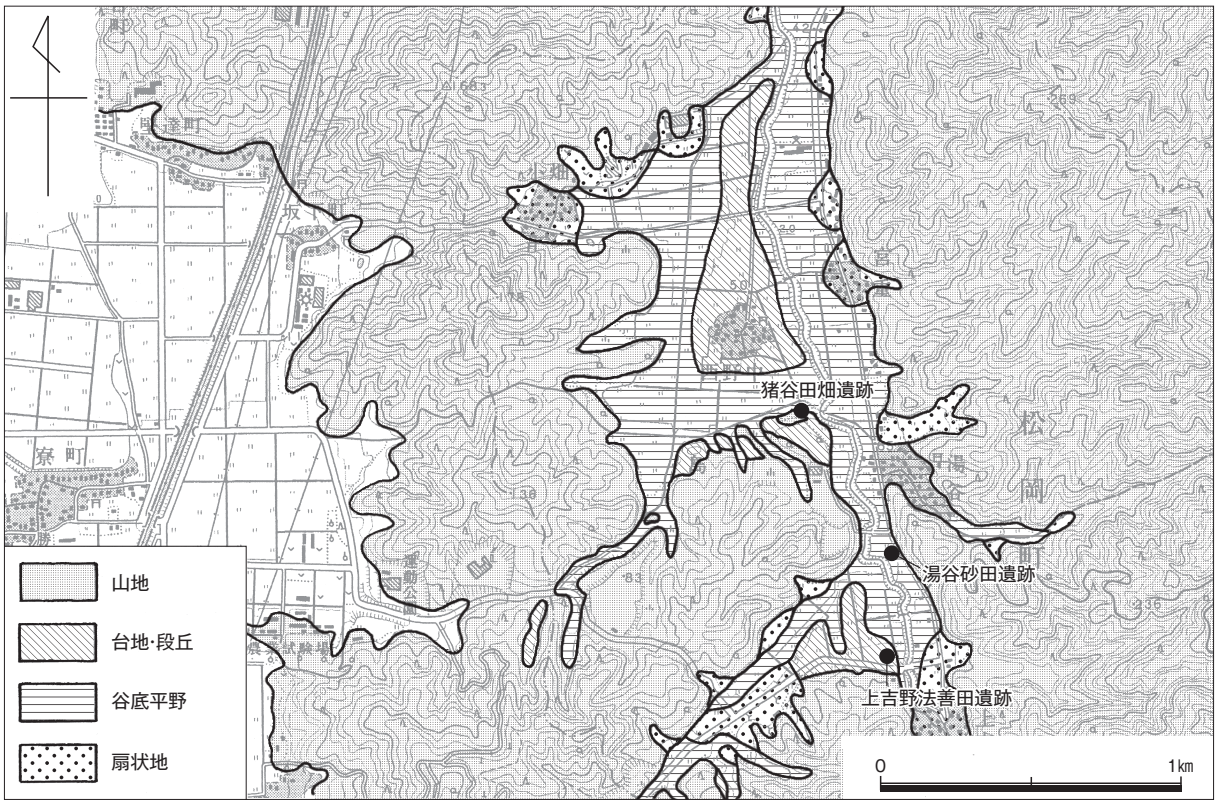
第１節　地理的環境〔第３図〕

福井県は、昔の国名で言う越前（えちぜん）と若狭（わかさ）の両国から構成され、本州日本海沿岸のほぼ中央近く、本州が西から次第に北東へ折れ曲がるあたりに位置する。現在では敦賀（つるが）市の東方、木ノ芽（きのめ）山嶺を境に、以北を嶺北（れいほく）、以南を嶺南（れいなん）と呼び、行政的にも大別される。嶺北地方は古代の越前国にほぼ相当し、嶺南地方は古代の若狭国と現代の敦賀市までを含む。

吉田郡永平寺町は嶺北北部のほぼ中央に位置し、本県最大の河川、九頭竜川（くずりゅうがわ）の中流域にあたる。町域の大半が山地で、南北に標高500m以上の山々がそびえる間を九頭竜川が西流し、山麓に長大な河岸段丘を敷き連ねつつ、福井平野への開口部で広大な九頭竜川扇状地を形成している。この扇状地周辺の山々は、大小の古墳が数多く分布する県内有数の古墳集中地域となっている。

永平寺町松岡吉野地区は、九頭竜川扇状地に南隣する山中にあり、吉野ヶ岳の北西麓から南北に伸びる小谷から、谷の出口周辺の一帯までを指す。谷の中央を吉野ヶ岳山麓に水源を発する荒川（あらかわ）が縦貫し、谷の出口で西に転じて以後、福井平野を大きく蛇行しつつ、足羽川に合流している。

猪谷田畑・上吉野法善田・湯谷砂田の３遺跡は、いずれもこの吉野の谷の南部にある。まず、猪谷田畑遺跡は、谷中に広く開けた谷底平野の中央を塞ぐように、舌状に迫り出した山地北面の小規模な段丘上に立地する。次いで、その山地の外周に沿って川を遡り、谷幅が急に狭まる付近の山が間近に迫った荒川右岸の狭長な段丘上に、湯谷砂田遺跡が立地する。そして、さらに川を遡った平野の南奥部、山際から荒川左岸に広がる段丘上に、上吉野法善田遺跡が立地している。



第３図　吉野地区周辺の地形図（縮尺1/25,000）

第２節　歴史的環境〔第４図〕

前節で記したように、吉野地区周辺の山地には県内屈指の古墳群が複数分布しており、それらの調査例は数多いものの、今回調査された３遺跡のように、谷の中での遺跡調査事例は稀である。本節では吉野地区およびその周辺に分布する、古代～中世期の主要な遺跡・史跡について記述する。

猪谷田畑遺跡（第４図１）　吉田郡永平寺町松岡湯谷に所在する。本書で報告する平成17年度調査に併行して、町道吉野74号建設事業に伴い、永平寺町教育委員会が平成17・18年度にかけて調査を実施、平安時代（９・10世紀）および中世（13～15世紀）の集落遺跡であることを確認した。

吉野堺大明地遺跡[1]（第４図16）　同町松岡吉野堺に所在する。平成15～17・20年度に、中部縦貫自動車道建設事業ならびに国道416号道路改良工事に伴い、県埋文が調査を実施し、律令期を主体とする集落遺跡であることを確認した。中でも10数棟の掘立柱建物により構成される建物群は、すべての建物の長軸が南北方向に向き、規模や相対的配置に一定の規則性が見られるなど、計画性を持った建物群であると判断できる。遺物は須恵器･土師器が主だが、須恵質の円面硯や土師質の土馬、畿内産（畿内系）暗文土師器と見られる坏なども、少数ながら出土した。

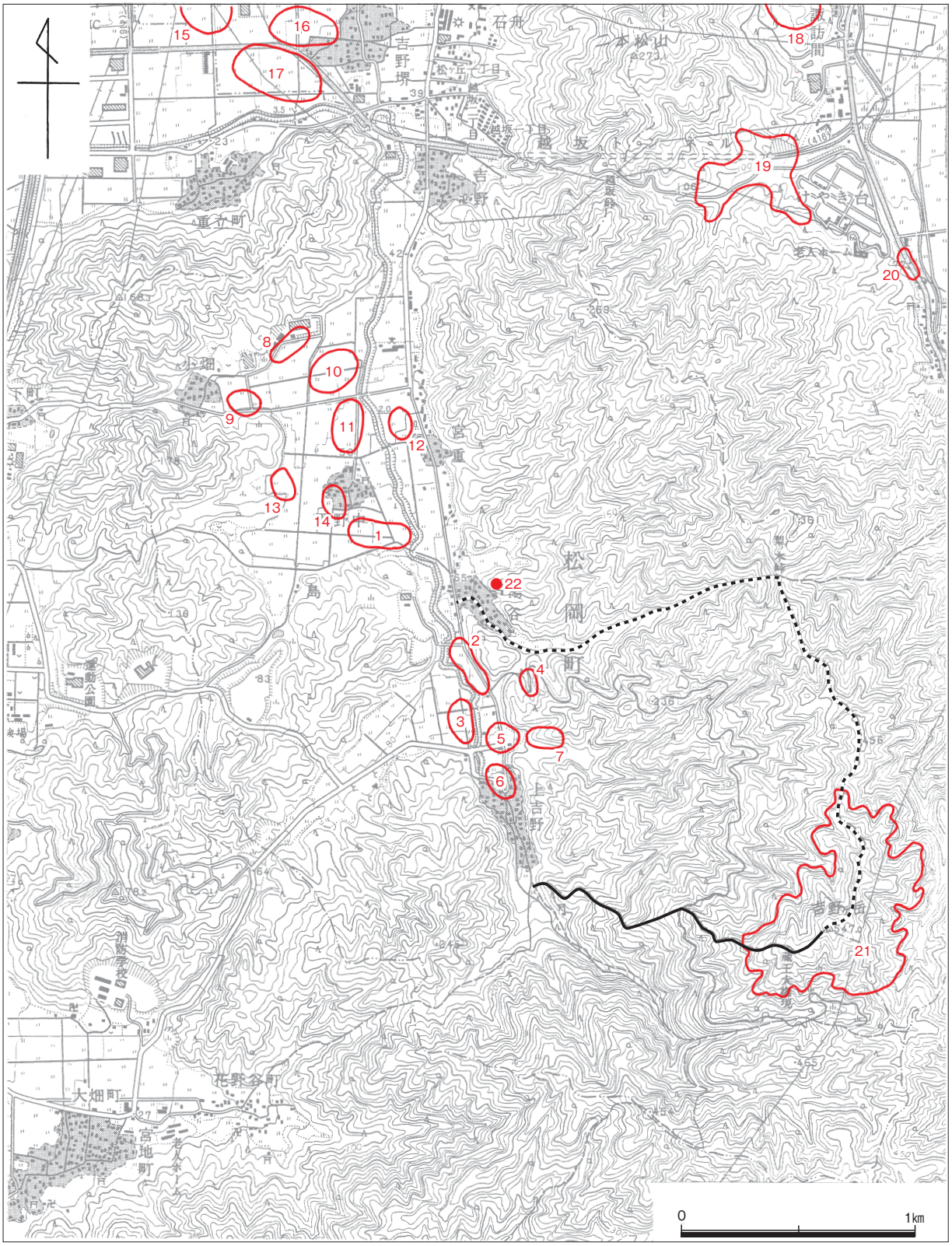
諏訪間興行寺遺跡（第４図19）　同町諏訪間に所在する。遺跡名は荒川興行寺（浄土真宗寺院。現同町市荒川所在）の前身寺院が、15世紀初頭に当地に創建されたという伝承にちなむ。平成元～３年度に国道416号改良工事に伴い、平成14～18年度に中部縦貫自動車道建設事業に伴い、いずれも県埋文が調査を実施し、13～16世紀にかけて展開した集落遺跡であることを確認した。複数の遺構面において、掘立柱建物や井戸・溝・柵列などを伴う屋敷地跡を多数検出し、興行寺は無論のこと、当地を含む旧永平寺町域・旧上志比村域一帯に展開したとされる、中世荘園志比庄との関連性も注目される。

京善藤谷口遺跡（第４図20）　同町京善に所在する。国道346号改良工事に伴い、平成12年度に県埋文が調査を実施し、平安時代を主体とする集落遺跡であることを確認した。遺構は柱穴を多く検出したものの、建物の復元には至らず、不明な点は多いが、遺物は当該期の須恵器・土師器を多く得たほか、陶磁器や土師質皿（かわらけ）などの中世遺物も得た。

蔵王大権現遺跡（第４図21）　同町吉野ヶ岳山上一帯に所在する。吉野ヶ岳は泰澄[2]の開山と伝えられる越前五山[3]の一つで、古くから修験道[4]の修行場として知られていた。山頂付近に蔵王堂があるところから「蔵王山」とも呼ばれ､堂内には蔵王権現[5]立像と十一面観音[6]立像（いずれも木造）が安置される。分布調査により、蔵王堂周辺で９世紀代の須恵器片が採集されていることから、開山は少なくとも平安時代まで遡れるものと推測される。なお、現在の山頂への参道（第４図実線）の入口にあたる上吉野集落は、古くは「印内」と呼ばれていた。『越前国名蹟考』によれば、印内とは「院内」であり、かつては僧坊が七坊あったが、天正三年（1575）八月の一向一揆掃討戦の際にすべて焼失したと記される。

湯谷神明神社（第４図22）　同町松岡湯谷に所在する。中世初期頃の作と推定される薬師如来坐像と不動明王立像（いずれも木造）が社殿に安置される[7]。なお、現在は廃道となったが、湯谷集落からも吉野ヶ岳山頂への参道（第４図破線）があった。その参道から上って七合目付近にある松岡上吉野78字板室地籍には、修験者が山中で起居したという室堂の跡があり、石塔や石仏の残欠も残る。神明神社の両尊はこの室堂に祀られていたが、天正の戦火を奇跡的に免れ、麓の社殿に移されたと伝えられる[8]。

越前五山周辺には山岳信仰に関わる寺社・史跡が今も数多く残るが、湯谷神明神社と仏像、吉野ヶ岳山頂の蔵王堂、上吉野の旧名「印内」や遺跡の字名「法善田」なども、吉野ヶ岳信仰に強く影響を受けているものと推測される。



1 猪谷田畑遺跡　2 湯谷砂田遺跡　3 上吉野法善田遺跡　4 藤谷窯跡　5 上吉野下澤遺跡　6 上吉野上澤遺跡
7 上吉野窯跡　8 小畑地堂遺跡　9 小畑遺跡　10 中々田遺跡　11 杉ノ木遺跡　12 宮重遺跡
13 西野中谷口遺跡　14 西野中遺跡　15 吉野堺桑下遺跡　16 吉野堺大明地遺跡　17 吉野堺板見遺跡　18 諏訪間窯跡群
19 諏訪間興行寺遺跡　20 京善藤谷口遺跡　21 蔵王大権現遺跡　22 湯谷神明神社

第４図　吉野地区の主要遺跡・史跡分布図（縮尺1/25,000）

註

1　吉野堺桑下遺跡とほぼ並行して調査が実施されたが、調査報告書中では両者を同一の遺跡と判断、遺跡名を「吉野堺遺跡」とし、それぞれに地区名を付している。

2　奈良時代の修験僧（682～767）。山岳を修行の場とし、白山をはじめ、北陸地方一帯の山々を数多く開いたとされる。

3　泰澄によって開かれたとされる白山（福井･石川･岐阜県境）、越知山（丹生郡越前町）、文殊山（福井市）、日野山（越前市）、吉野ヶ岳の五山を指す。白山を別として部子山（今立郡池田町）を加える意見もあるが、白山を含む方が一般的である。

4　日本古来の山岳信仰に、仏教（特に密教）・道教などの外来宗教の影響が加わり、体系付けられた宗教。山岳修行を積み、超自然的な験力を体得した修験者（山伏）による呪術宗教的活動が特徴。現在では仏教の一派とされる。

5　修験道独特の仏尊。修験道の開祖と伝えられる伝説的人物、役小角（634?～706?）が奈良吉野で修行中に感得したとされる。

6　泰澄が信仰した仏尊で、白山の主神白山比咩大神と同一視される。なお、これら現存する２体の仏尊は、いずれも「近世の素朴な素人の彫出した像」（野村2002　28頁）であり、後述する天正の戦火で蔵王堂とともに焼失した後、再造されたものと推測される。

7「両仏共に地方仏師の作であるが、刀法のさばきと云い、像容の整えと云い、中世初期頃の本格的な像である点が註目される」（野村2002　28頁）。

8　室堂は１棟でなく、薬師堂と不動堂の２棟であったとも言われる。いずれにせよ、この由来が事実とすれば、両尊とも加持祈禱の修法に関わる重要な仏尊であることから察するに、この室堂は修行場と言うよりも、病気平癒などを祈願する加持祈禱所であった可能性が高い。

参考文献

小葉田淳 監修　1981 『福井県の地名』 日本歴史地名体系第18巻　平凡社
河原純之･島田正彦･隼田嘉彦･松浦義則 責任編集　1989 『角川日本地名大辞典　18　福井県』 角川書店
国土地理院　2004 『１:25,000　土地条件図　福井』
福井県教育委員会　1993 『福井県遺跡地図』
福井県 編　1993 『福井県史　通史編１　原始・古代』
福井県 編　1994 『福井県史　通史編２　中世』
永平寺町 編　1984 『永平寺町史　通史編』
吉田森　1975 『松岡町史　上巻　－風土編－』
野村英一　1978 『松岡町史　上巻』
浅野良治　2006 「猪谷田畑遺跡」『第21回福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　66～67頁
浅野良治　2007 「猪谷田畑遺跡」『第22回福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　10～11頁
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2006 『吉野堺遺跡（桑下地区･大明地地区）』 福井県埋蔵文化財調査報告第93集
青木隆佳　2006 「吉野堺大明地遺跡（中部縦貫自動車道建設事業）」『年報20　平成16年度』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　12～13頁
中川佳三　2007 「吉野堺大明地遺跡」『年報21　平成17年度』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　12～13頁
青木隆佳　2009 「吉野堺大明地遺跡」『第23回福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　12～13頁
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2008 『諏訪間興行寺遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第20集
田中勝之　2004 「諏訪間興行寺遺跡」『年報18　平成14年度』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　11頁
田中勝之　2005 「諏訪間興行寺遺跡」『年報19　平成15年度』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　14～15頁
田中勝之　2006 「諏訪間興行寺遺跡」『年報20　平成16年度』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　16～17頁
田中勝之　2007 「諏訪間興行寺遺跡」『年報21　平成17年度』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　14～15頁
田中勝之　2008 「諏訪間興行寺遺跡」『年報22　平成18年度』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　18～19頁
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2003 『京善藤谷口遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第69集
堀大介　2005 「泰澄がみた風景」『第20回国民文化祭･ふくい2005　シンポジウム（山と地域文化を考える）資料集』 第20回国民文化祭越前町実行委員会　260～277頁
修験道修行大系編纂委員会編　1994 『修験道修行大系』 国書刊行会
野村英一　2002 「Ⅱ－５．越前五山の尊像」『地方作仏教尊像の研究　若狭・越前の秘仏』 25～38頁
上杉喜寿　1980 『越前若狭　山々のルーツ』 福井新聞社

第３章　猪谷田畑遺跡

第１節　概要〔図版第１、第５・６図〕

１　地形と層序

猪谷田畑遺跡は、吉野谷中央部に位置する台地の北側緩斜面、および外周部にかけて展開する。調査区は過去の圃場整備事業により、緩斜面を段切りにして水田に整備した箇所であり、広範囲に削平を受けている。全体の規模は東西約80m、南北約28m、総面積1,563㎡を測る。

調査区は４区画に分かれるが、各区画間にかなりの高低差があるため、それぞれの境界となる畦部は安全面を考慮して撤去しなかった。また、調査区中央を南北に縦断する空白部は、農道と用水路であるが、調査区南方の田畑地への出入りに支障をきたすおそれがあったため、これも撤去しなかった。

遺構検出面のうち、削平された平坦面の標高はおおむね60.20m前後で、段差が一段高い東端の小さな区画のみ、標高は62.00m前後である。本来の自然地形である傾斜面を残すのは、主に調査区の北西部で、全体に北西方向に下降しており、最も低い部分の標高は59.00mほどである。

標準層序は以下の３層に大別される（第５図）。土質は３層とも粘性が特に強く、作業員として調査に参加された地元の方々からの聞き取りによれば、これは吉野地区の土に共通する特徴とのことである。

Ⅰ層：表土および耕作土。水田に段差があるため、堆積の厚さはいずれも一定しない。過去の圃場整備の際に搬入した客土の類と見られる。

Ⅱ層：黒褐色土で構成される遺物包含層。堆積の厚さは10～40㎝ほどで、自然地形が傾斜している分、標高が低くなるほど、堆積は厚くなる傾向にある。ただし、調査区のほぼ南半分では地山層まで削平を被っているため、Ⅱ層は完全に失われている。

Ⅲ層：黄褐色土で構成される地山層。小礫が若干混入する。

遺構検出にあたっては、Ⅱ層中に生活面が存在することが予測されたが、前述のとおり、広範囲にわたってⅢ層まで削平を被っていることに加え、Ⅱ層中の分層も困難であったため、便宜的にⅢ層上面を遺構検出面と定めて、遺構調査を実施した。

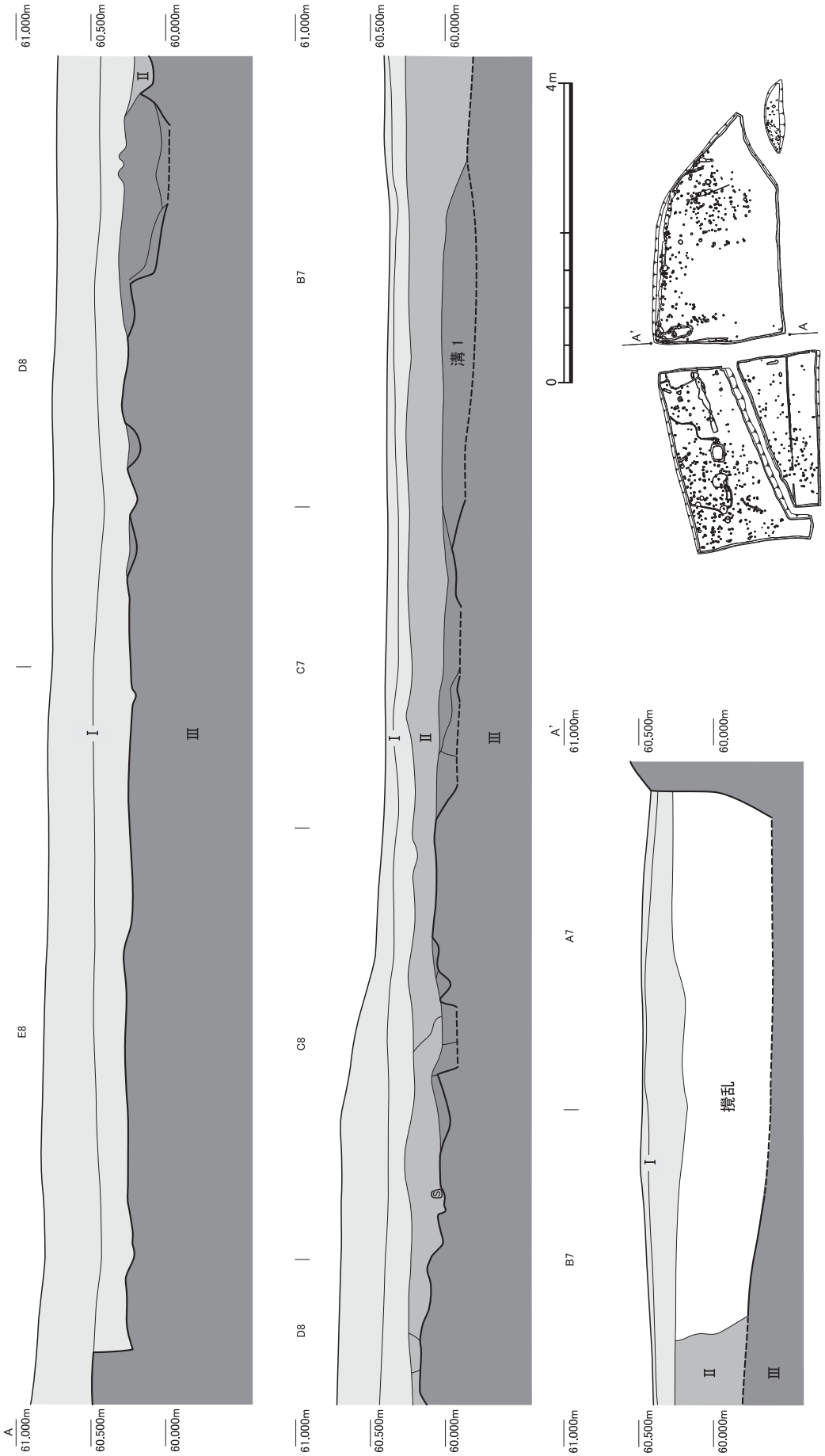
２　遺構検出状況

検出した遺構は、掘立柱建物６棟、井戸１基、竪穴１基、溝８条、土坑･ピットなどである（第６図）。全体にピットが主体で遺構密度もさほど高くはない。なお、土坑・ピットは基本的に遺物が得られたもののみ遺構ごとの通し番号を付し、総数で土坑13基、ピット50基を数える。

調査区は斜面を段切りに削平しているため、段差の蹴込み付近（調査区山寄り）は必然的に遺構が少なくなっている。主要遺構が集中している地区は、遺構密度が特に希薄な９・10列付近を境に、西（B～Ｄ１～６・Ｂ８区）と東（B～ D11～13区）の２地区に大別される。なお、Ｃ９・10区以南の遺構の空白部は、南方から突出していた尾根地形を削平したためと推測され、すなわち東・西の２地区は、本来この尾根地形によって隔てられていたものと考えられる。

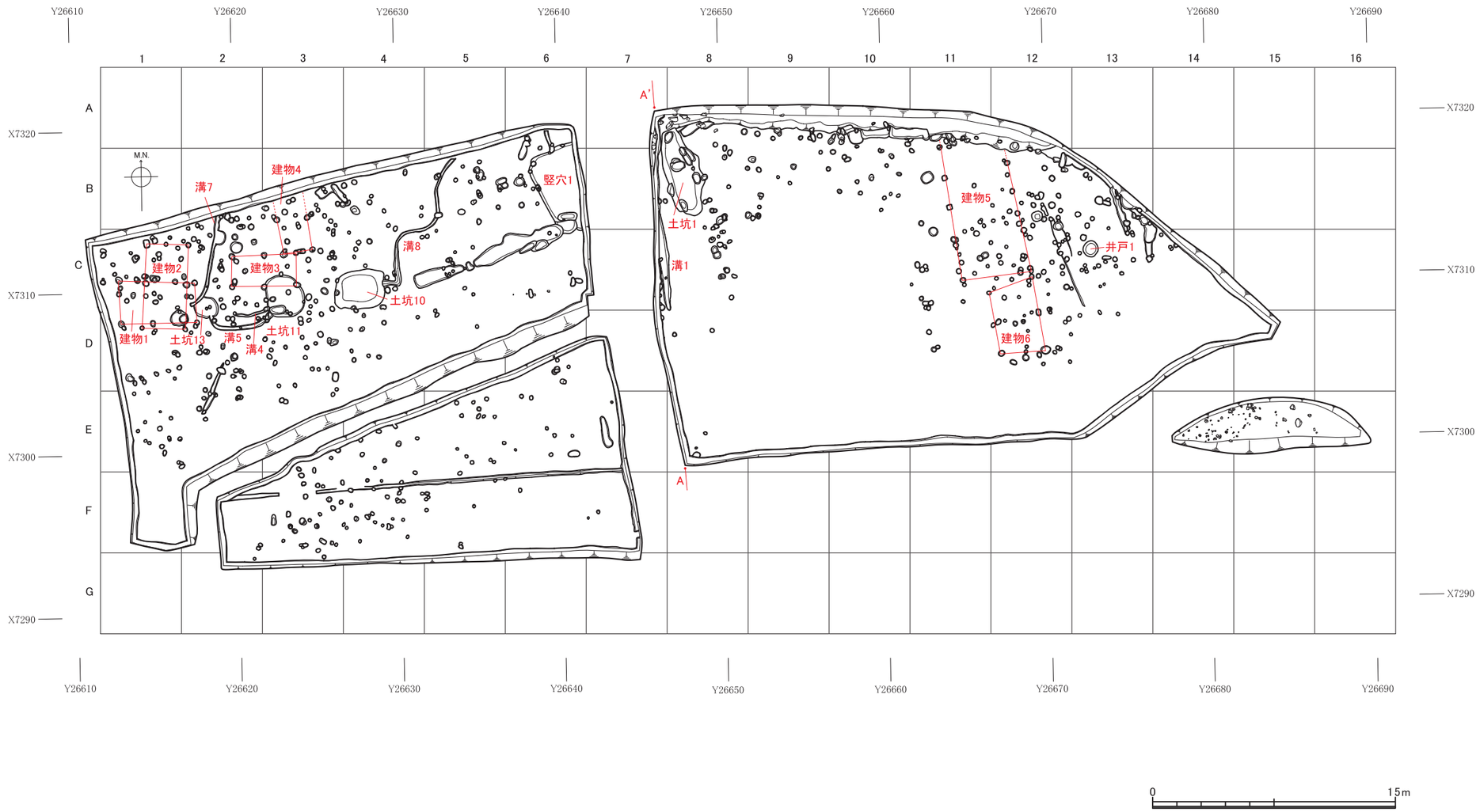
３　遺物出土状況

出土遺物は大型コンテナで５箱分を得た。調査面積に比して、遺物量はかなり少ない。内訳のほぼすべてが土器で、中世の土師器が主体だが、越前焼などもわずかに含まれる。全体に細片が多く、完形もしくは全体形状が復元できた資料は、土師質皿が数点程度であった。



Ⅰ　表土・耕作土
Ⅱ　黒褐色土
Ⅲ　地山・遺構覆土
撹乱

第５図　猪谷田畑遺跡　調査区南北方向土層断面図（縮尺1/40）



第６図　猪谷田畑遺跡　遺構全体図（縮尺1/300）

第２節　遺構〔図版第２・３、第７～13図、第１・２表〕

検出した遺構は、掘立柱建物、竪穴、井戸、溝、土坑・ピットなどである。なお、各遺構の規模（長さ・幅・深さなど）や方位（角度）についての数値は、すべて遺構検出面を基準として、測量図上で測定・算出した概測値である。また、掘立柱建物については、現地調査終了後に測量図上で抽出・設定し、検証の結果、建物と判断したものを挙げた。

１　掘立柱建物

総数で６棟を検出した。すべて側柱（がわばしら）建物で、全体を検出し得たものが４棟（建物１～３・６）、部分的検出と見られるものが２棟（建物４・５）である。平面形はおおむね略長方形で、２×１間建物が多いが、柱間（はしらま）はかなり不規則である。柱穴は直径0.3～0.5m、深さ0.3～0.4m前後の不整円形を呈するものが主だが、少数ながら方形のものも見られる。

以下に概略を記すが、一部の柱穴に付されるピット番号は、遺跡全体で遺物が得られたピットに付した通し番号であり、各建物内での固有のピット番号ではない。各建物の詳細については一覧表（第１表）を参照されたい。

建物１・２（第７図）　ともに２×１間建物で、柱間が桁行（けたゆき）・梁行（はりゆき）とも2.5～2.7m前後と、構造と規模が酷似する。相互に位置が重複するが、柱穴同士が切り合う箇所はない。なお、建物１は後述する土坑13・溝７とも位置が重複する。

建物３・４（第７図）　柱間が桁行・梁行とも2.0m前後で、隣接する建物１・２より、規模が一回り小さい。建物４は１×１間建物にも見えるが、周辺の状況から調査区外（北方）へ伸長する可能性が高いと考えられ、部分的検出と判断した。仮に建物４を建物３同様に２×１間建物と見なすと、その構造と規模は建物３と酷似する。やはり相互に位置が重複するが、柱穴同士が切り合う箇所はない。なお、建物３は後述する土坑11とも位置が重複する。

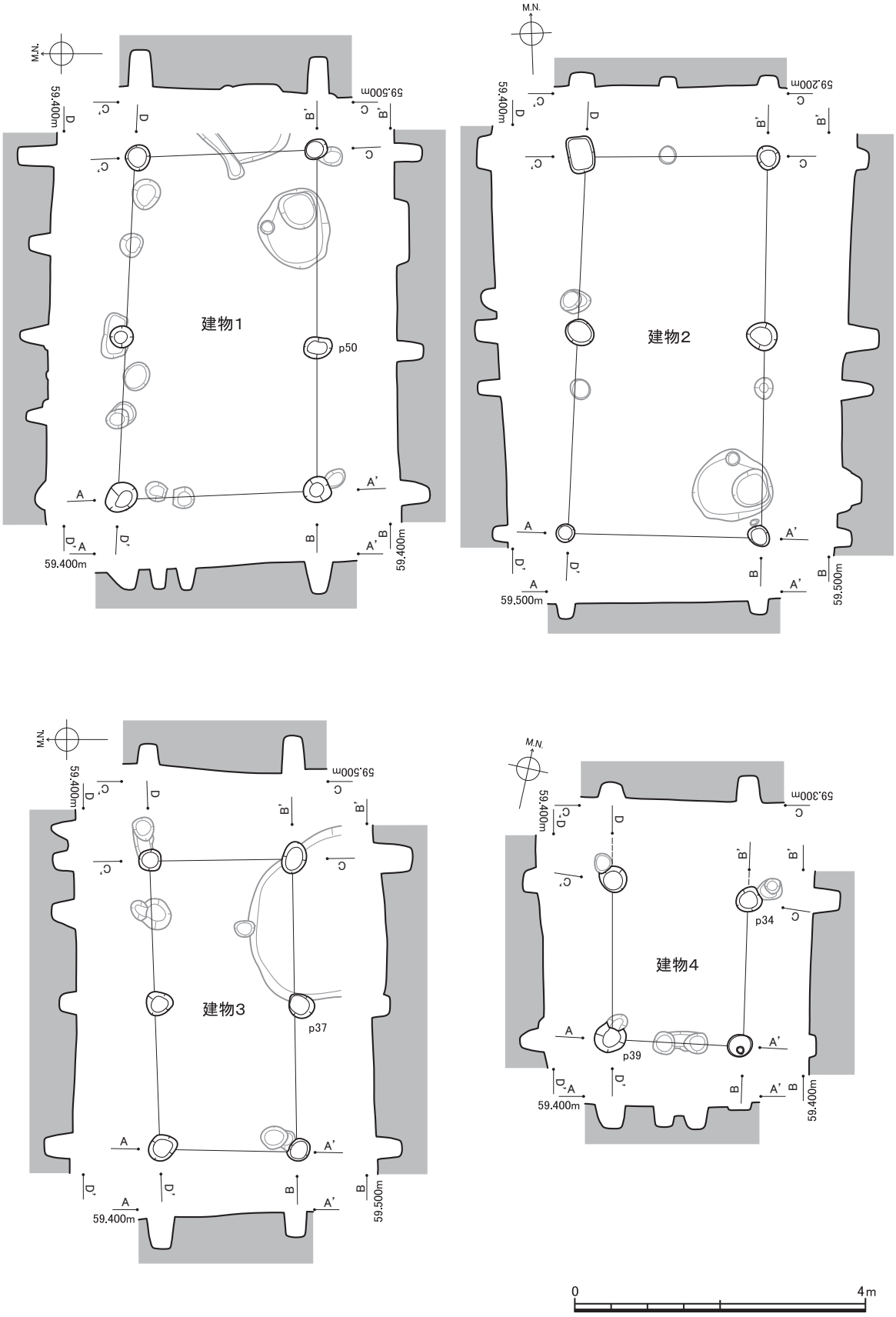
建物５（第８図）　本遺跡最大の建物で、ほかの建物に比べて、規模・構造とも突出している。北端の一部で途切れているが、自然地形はこの付近から北方へ急激に下降しており、これ以上の伸展は想定しがたいため、４×１間建物と判断した。桁行の柱間はおおむね2.0m前後だが、南端部のみ2.5～3.0mとやや広い。一方、梁行は4.2mで、桁行のおよそ２倍となっている。

建物６（第８図）　２×１間建物だが、桁行の柱間が東桁で2.3m前後、西桁で1.9m前後と、東西で大きく異なるため、平面形状が台形を呈している。梁行の柱間は2.7m前後と、東西の桁行いずれとも異なるなど、粗略な構造が目立つ。建物５と非常に近接するが、柱穴同士が切り合うなど、位置が重複するような状況は見られない。

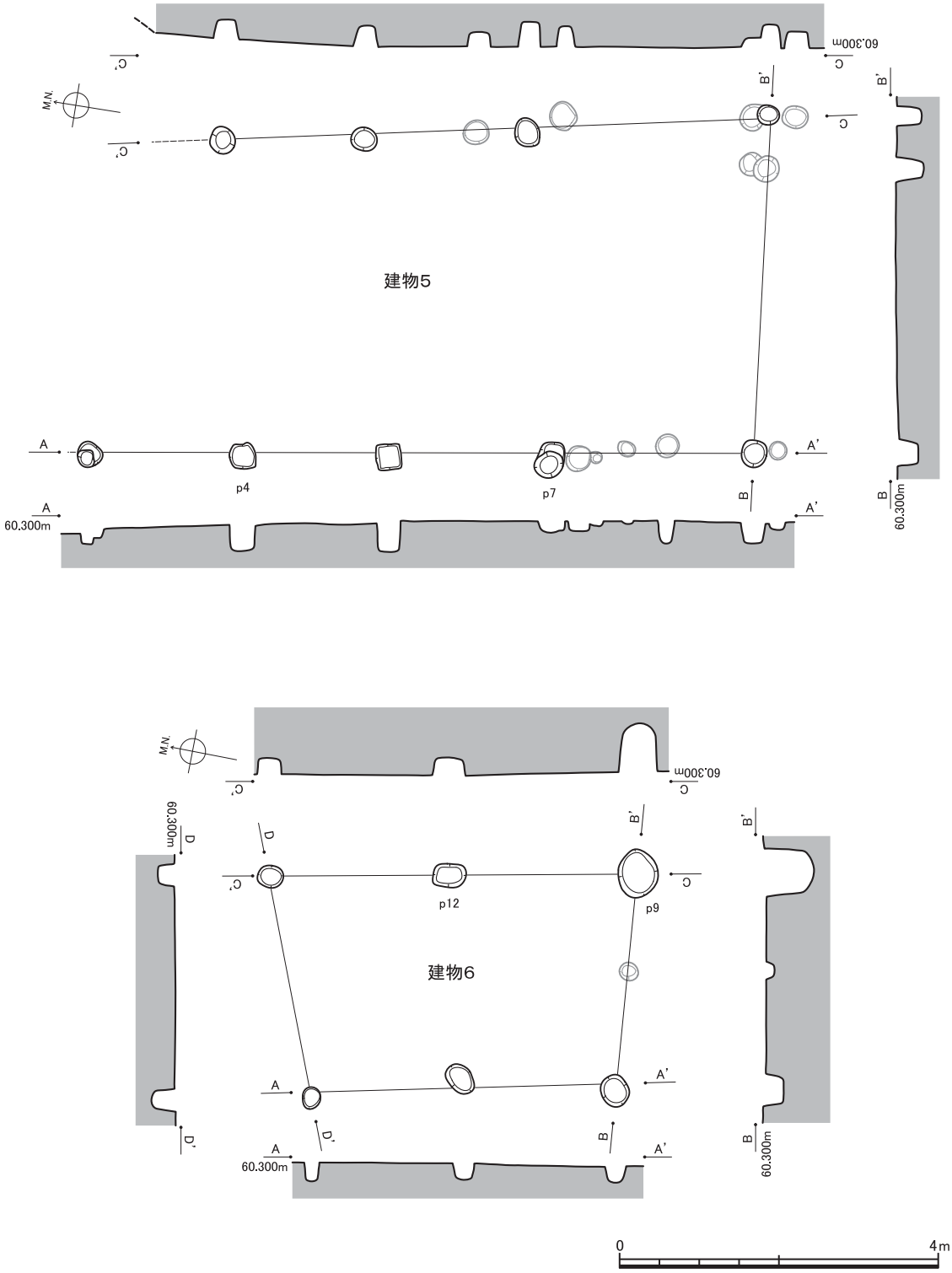
第１表　掘立柱建物一覧表

遺構名	地区	構造	柱穴掘り方	桁×梁（間）	桁行×梁行（m）	方位（桁行）	出土遺物	備考	挿図№
建物１	C·D1～2	側柱	円形ピット	2×1	4.70×2.74	EW		建物２に重複	第７図
建物２	C·D1～2	側柱	円形・方形ピット	2×1	5.26×2.68	N8° E		建物１に重複	第７図
建物３	C2～3	側柱	円形・方形ピット	2×1	4.04×2.00	N89° E		建物１に重複	第７図
建物４	B·C3	側柱	円形ピット	2?×1	2.16×1.84	N12.5° W		建物３に重複	第７図
建物５	B·C11～12	側柱	円形・方形ピット	4?×1	8.38×4.20	N9° W		建物６に近接	第８図
建物６	C·D12	側柱	円形・方形ピット	2×1	4.66×2.66	N10.5° W		建物５に近接	第８図

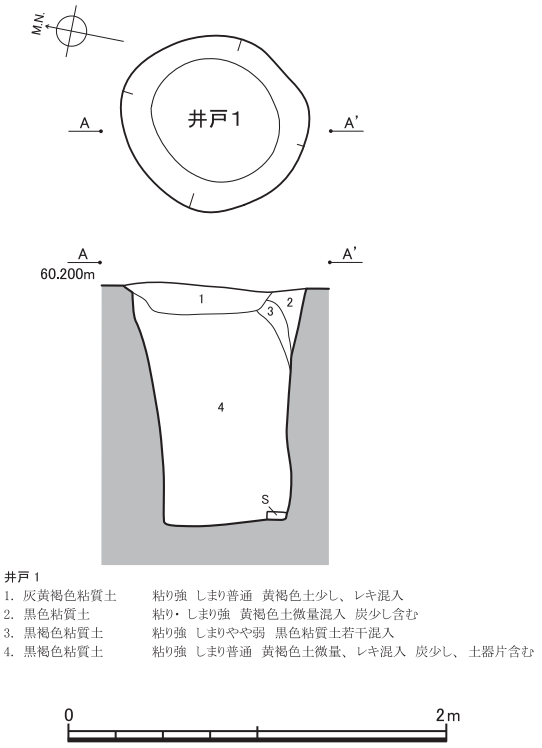
※桁行・梁行の長さ、方位の数値はすべて概算値もしくは推定値。



第７図　掘立柱建物実測図（１）（縮尺1/80）



第８図　掘立柱建物実測図（２）（縮尺1/80）



第９図　井戸１実測図（縮尺1/40）

２　井戸

C13区で１基のみ検出した（第９図）。平面形はやや歪んだ楕円形を呈し、長径1.00m、短径0.94m、深さ1.28mをそれぞれ測る。井戸枠およびその部材などは検出されなかった。

３　竪穴

B６区で西半部のみ１基検出した（第10図）。一辺5.00m前後、深さ0.05～0.15m前後の隅丸方形を呈すると推定される。仮に西辺を主軸と見ると、方位はN25° Wを向く。竪穴住居跡である可能性が高いと考えられるが、周囲や床面に柱穴などは検出されなかった。一方、南隅には長楕円形のやや深めの土坑や、壁際に溝や小ピットも点在しているが、その性格や竪穴との関連性などは不明である。

４　溝・土坑

本項では主要な溝や土坑のほか、溝や土坑が複合する状況についても記述する。各遺構の詳細については一覧表（第２表）を参照されたい。

溝１（第11図）　方位は自然地形の傾斜方向にほぼ合致する。南端部で途切れているのは削平されたためで、本来は斜面のさらに上方から溝が伸長していたものと推測される。

土坑１（第11図）　単独の遺構としては、本遺跡で最大の規模を有する。長軸の方位は溝１と同様、自然地形の傾斜方向にほぼ合致する。

土坑10・溝８（第12図）　標高の高い方から見ると、土坑10東部より、溝８がジグザグに屈曲しつつ、北東方向に伸長する。溝８の屈曲も規則的で、直角を意識しているように見受けられる。

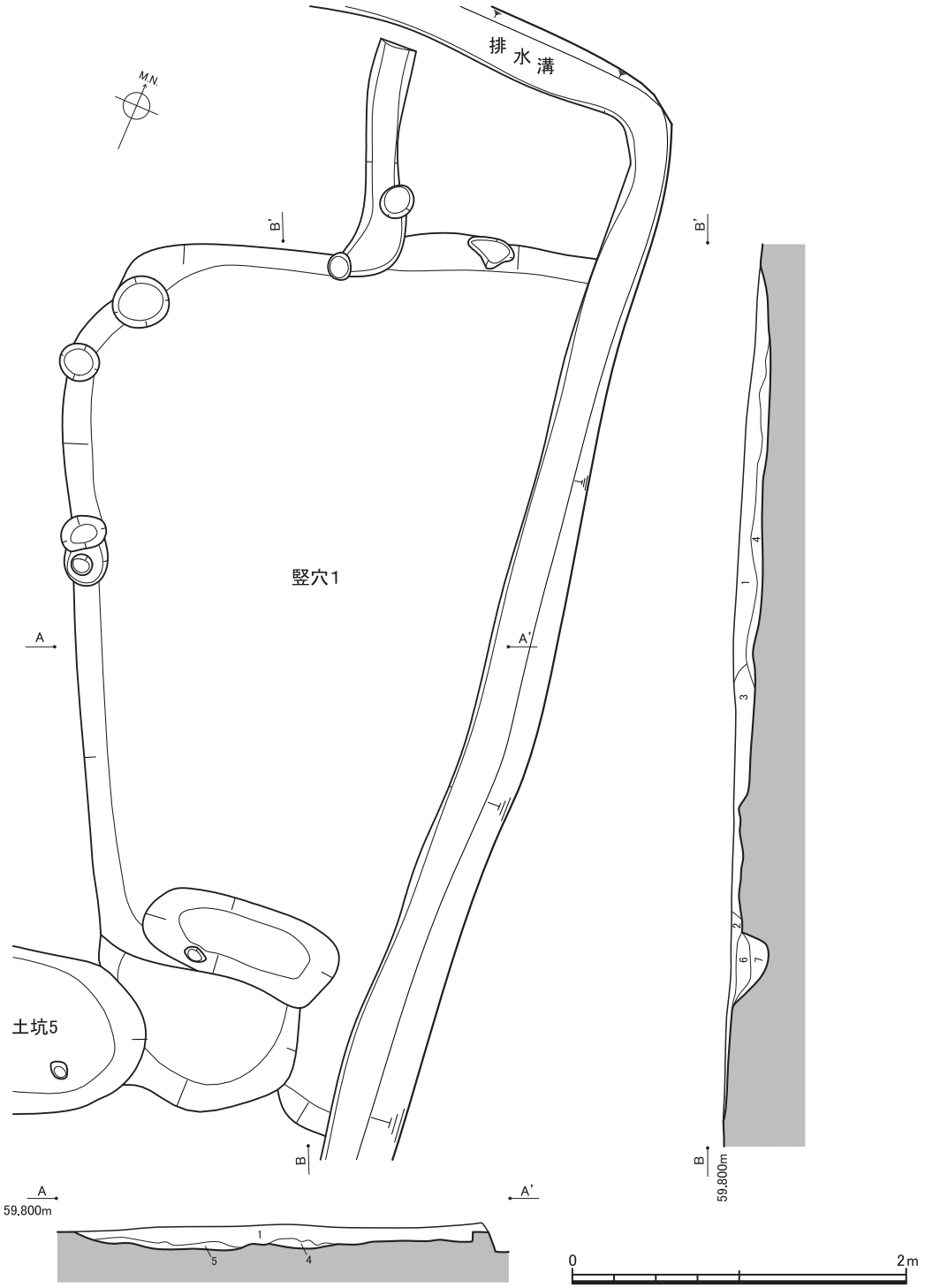
土坑11・13・溝４・５・７（第13図）　標高の高い方から見ると、土坑11から溝４と溝５がほぼ並行しながら西方へ弧を描くように伸びる。溝４は途切れるが、溝５は土坑13につながり、土坑13からは溝７が北向きに伸びる。なお、前述のように、建物１・３と位置が重複している。

以上、２例の溝･土坑の複合状況には、溝と土坑との間に明確な切り合い関係が見出せないことから、同時に存在していたと考えられる。また、溝４が特に浅く途切れているのは、当時の生活面は遺構検出面（地山層上面）よりも上方にあり、すなわち遺物包含層中に生活面があったものと推測される。

第２表　主要溝・土坑一覧表

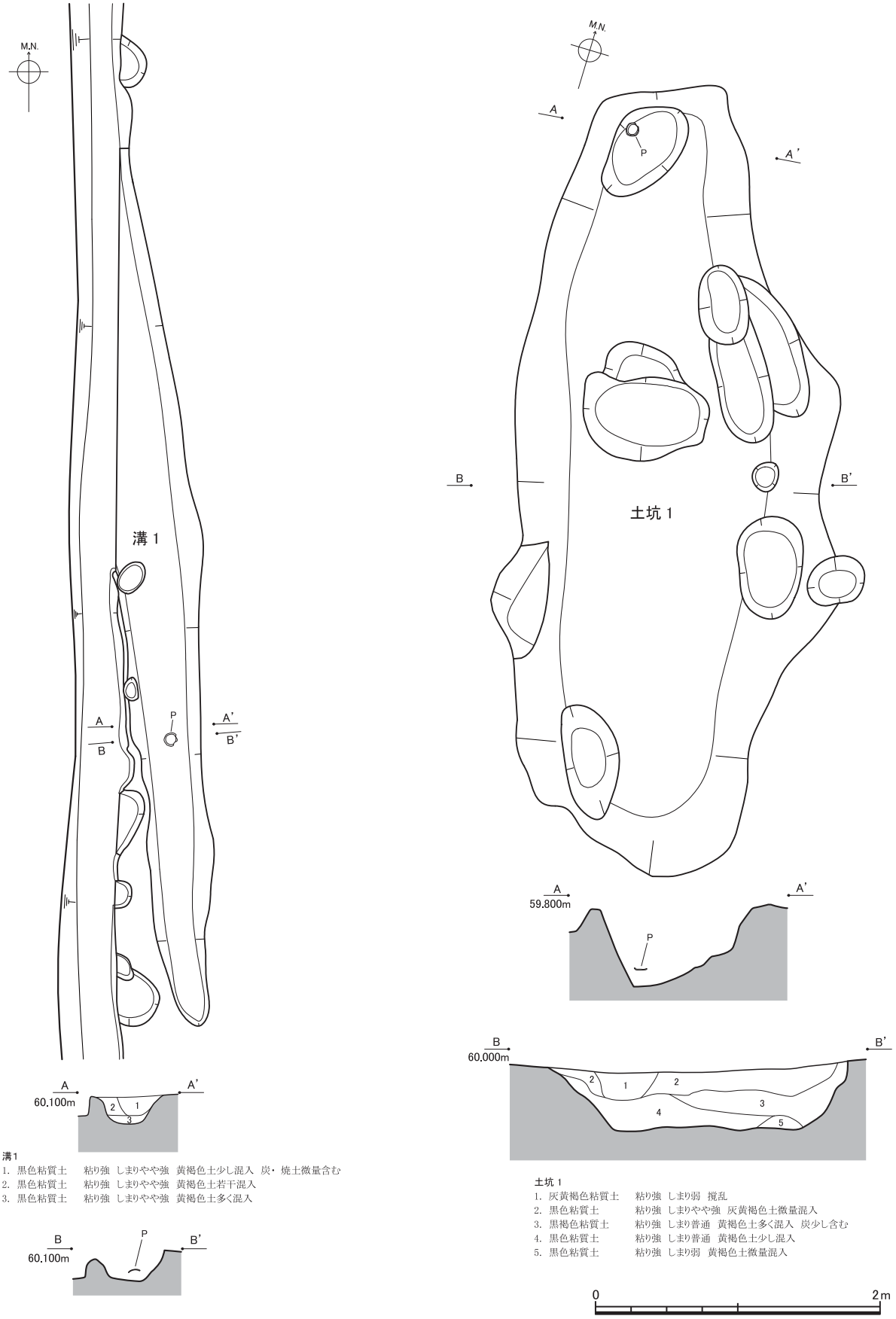
遺構名	地区	平面形	方位	平面規模（m） 長さ×幅（最大値）	深さ （m）	出土遺物	備考	挿図№
溝１	B･C7～8	直線形	N6° W	5.76×0.50	0.2	土師質皿	南端部は削平	第11図
溝４	D2～3	円弧形	N71° E～ N82° W	1.72×0.20	0.03		土坑11と連結	第13図
溝５	D2～3	円弧形	N45° E～ N87° E～ N19° W	4.48×0.30	0.12		土坑11･13と連結	第13図
溝７	B･C2	直線形	N52° E～ N11° E	6.08×0.30	0.07		土坑13と重複	第13図
溝８	B･C4～5	ジグザグ形	EW～ NS～ N37° E	10.56×0.40	0.16		土坑10と連結	第12図
土坑１	A･B7～8	長楕円形	N15° W	5.52×2.28	0.6	土師質皿		第11図
土坑10	C3～4	隅丸長方形	N87° E	3.04×2.35	0.5		溝８と連結	第12図
土坑11	C･D3	隅丸方形	N1° W	2.58×2.36	0.2		溝４・５と連結	第13図
土坑13	C･D2	歪楕円形	N79° W	1.56×1.32	0.1		溝５・７と連結	第13図

※方位・平面規模・深さはすべて概算値。

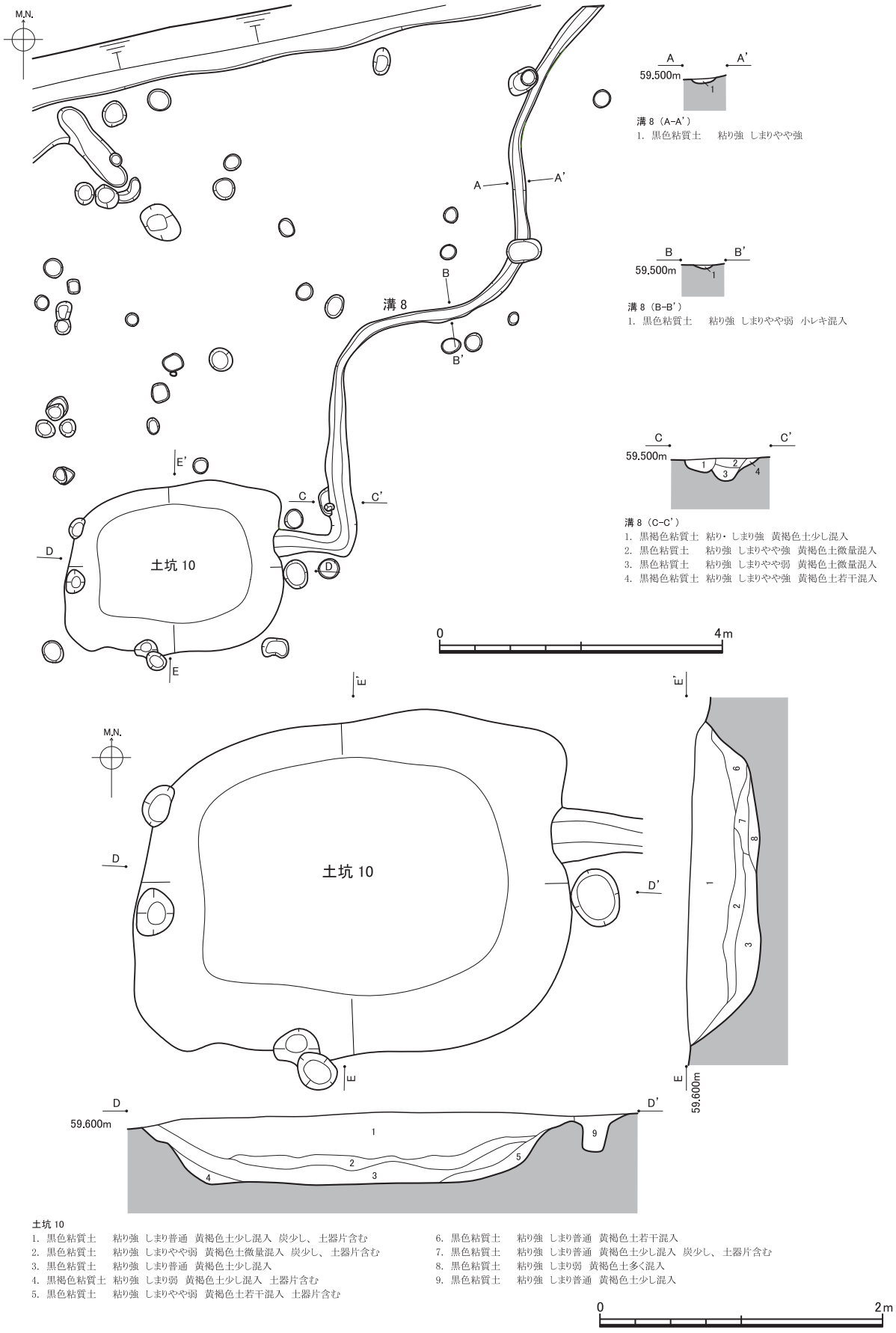


竪穴１
1. 黒褐色粘質土　粘り・しまり強　黄褐色土少し、レキ混入　土器片含む
2. 黒色粘質土　　粘り・しまり強　黄褐色土少し混入
3. 黒褐色粘質土　粘り・しまり強　黄褐色土多く混入
4. 黒褐色粘質土　粘り強　しまりやや弱　黄褐色土微量混入
5. 黒褐色粘質土　粘り強　しまりやや強　黄褐色土微量混入
6. 黒褐色粘質土　粘り・しまり強　黄褐色土若干混入
7. 褐灰色粘質土　粘り強　しまりやや強　黄褐色土若干混入

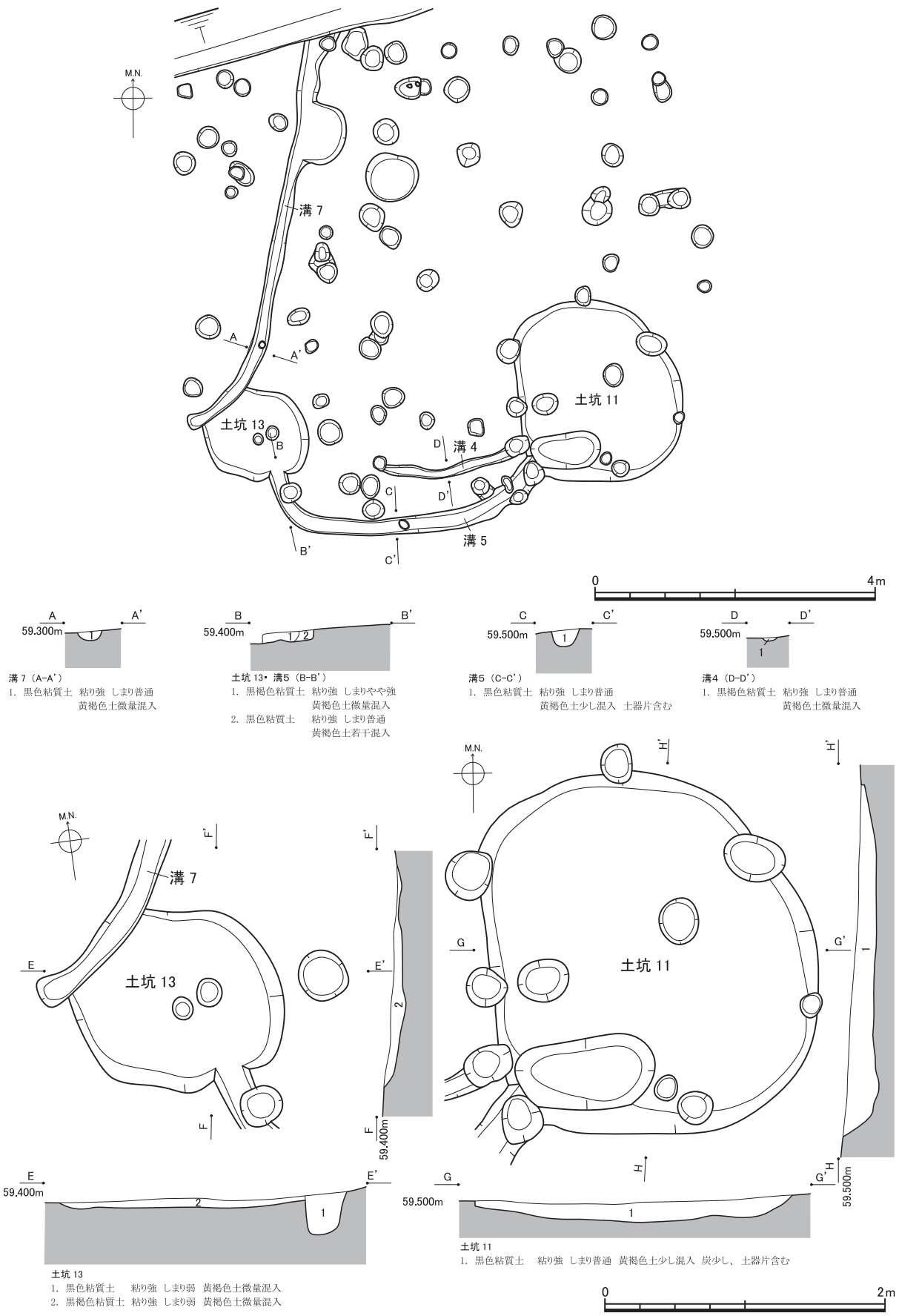
第10図　竪穴１実測図（縮尺1/40）



第11図　溝・土坑実測図（１）（縮尺1/40）



第12図　溝・土坑実測図（２）（上：縮尺1/80　下：縮尺1/40）



第13図　溝・土坑実測図（３）（上：縮尺1/80　下：縮尺1/40）

第３節　遺物〔図版第４・５、第14～16図、第３・４表〕

１　土器

出土した土器で図化し得たのはいずれも中世の土器で、鍋や羽釜とその脚、土師質皿などの27点と中世陶器４点である（第14・15図）。

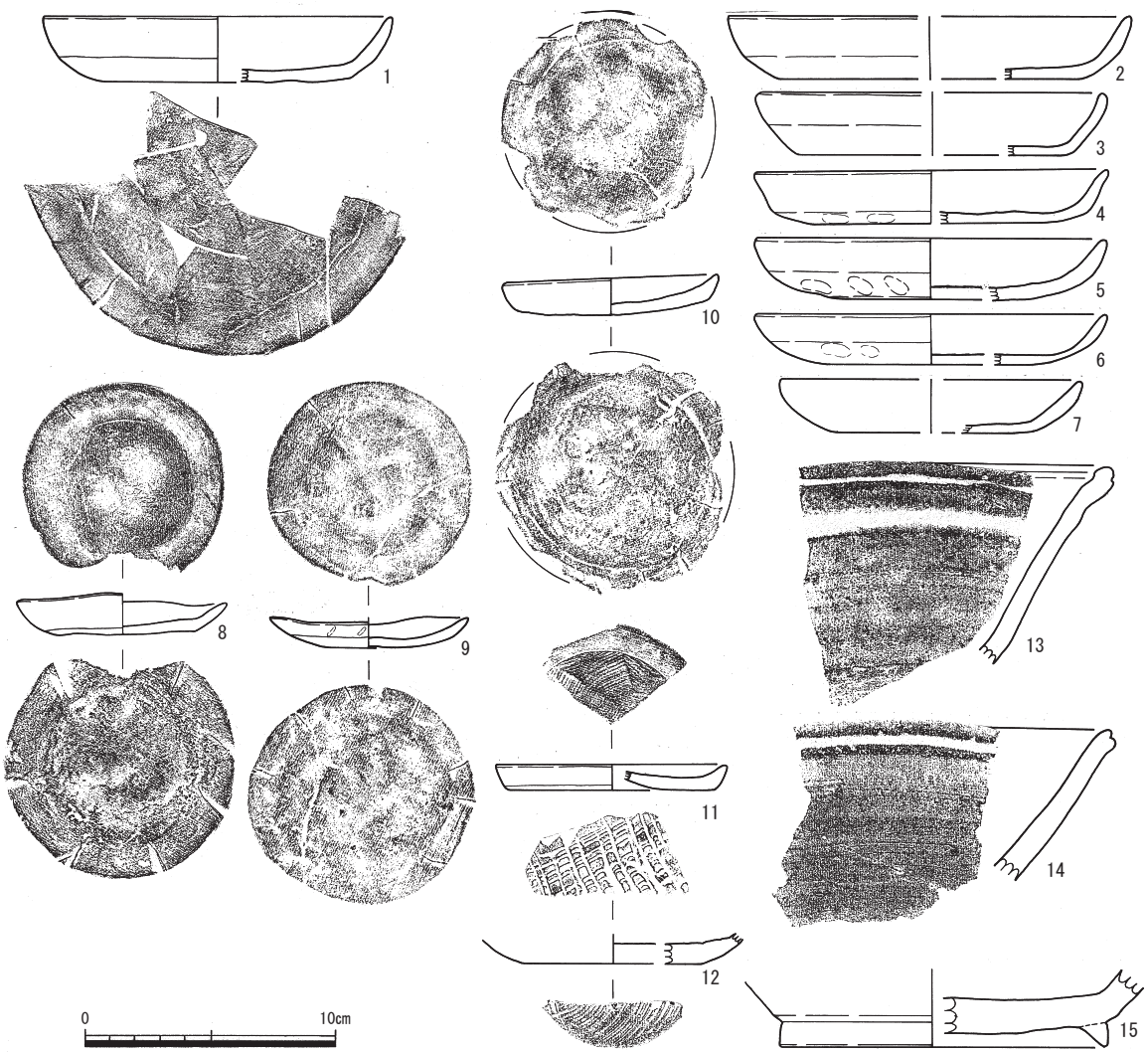
鍋はやや丸みのある胴部から口縁が屈曲する６点（第14図１～６）である。外面は屈曲部に指押さえを残し、胴部はヨコ、またはタテハケ、内面は口縁・胴部ともにヨコハケとする。口縁部には接合しなかったが、この鍋の底部と考えられるものが１点（第14図15）あり、わずかに小さな平坦面がある。不定方向にハケ調整をする。鍋と同じような調整で、口縁が屈曲しないものが１点（第14図７）あり、先の鍋に類似する色調・胎土のものである。口縁の形状が中世の擂鉢に近い。器壁も鍋と比べると倍近く厚手である。羽釜は丸い胴部から口縁が内弯するもの（第14図８・９）で、端部に面を作る。内外面ともにヨコハケとし、鍔の上に円孔があるもの（第14図８）もある。一般的には羽釜の脚となるもの（第14図10～14）がいくつかある。脚は棒状に伸びて、接地する端部がわずかに外反する。胴部に付いたものがなく、ここでは羽釜に付く可能性が高いものと考えているが、西日本の一部（例えば山口市内の大内氏関連遺跡など）では、最初に述べた鍋に付くものもあり、羽釜だけに付くとは断定できない。北陸では、このような鍋や羽釜などの類例自体が乏しく、不明な点が多い。土師質皿（かわらけ）は復元口径が15㎝前後の中型のもの（第15図１～７）と、９㎝前後の小型のもの（第15図８～11）の２種類がある。中型・小型の両者とも、底部から口縁の立ち上がりをユビオサエして、口縁部をヨコナデするのを基本とする。しかし、中型のものには成型や調整にあまり個体差はないが、小型のものには底部から口縁への立ち上がりが不明瞭なもの（第15図９）から、立ち上がりが明瞭なもの（第15図８･10）や、平底から短いが明瞭に角を持って立ち上がるもの（第15図11）のように、個体差が大きい。

陶器は、越前焼の捏鉢の口縁２点（第15図13・14）と底部１点（第15図15）、さらに灰釉の卸皿（第15図12）がある。捏鉢の口縁には一条の沈線が巡る。その底部と考えられる破片の高台は断面が三角形を呈する。卸皿は小さな底部片であるが、その内面にはヘラによる格子目の卸目があり、底部は糸切りである。

以上、本節に図示したのはいずれも中世の遺物で、土師質皿（かわらけ）や越前焼とともに13世紀前後に属すると考えられる。土師器の鍋は、福井市今市岩畑遺跡（いまいちいわはたいせき）SE535や同市福井城跡（ふくいじょうあと）（４号線地点）の井戸（遺構362）の事例から、ほぼ同時期と見られ、少なくとも図化したものもほぼ13世紀代に収まるものと見なされる。つまり、本遺跡では13世紀代の土器のみが確認されたと言える。ハケ調整の土師器鍋については、本県での出土例が少ない。細片は表採・表土資料などにいくつか散見されるが、時期の特定できる遺構からの出土で、器形が分かるものは、先の今市岩畑遺跡と福井城跡、丹生郡越前町小倉石町遺跡（にゅうぐんえちぜんちょうおぐらいしまちいせき）などの出土例しかない。現段階では福井県でも出土例は少なく、北陸の他県では見ることの少ない（またはない）ものである。いくつかの遺跡から出土しているこの土師器の鍋は、調製や色調・胎土などがいずれも非常に類似する。

遺構から出土した一括の土器群ではないが、所属時期がほぼ13世紀に限定される状況は、まとまった資料が少ない時期だけに、大きく注目される。同時に、鉄製品がかなりの商品にまで普及したであろう中世前期に、鉄鍋でなく、土師器の鍋が多く出土しているという事実をどのように解釈するのかも、今後の大きな課題であろう。

第14図　土器実測図（１）（縮尺1/3）



第15図　土器実測図（２）（縮尺1/3）

第３表　土器観察表

図版No.	地区	遺構	種別	器種	部位	残存率	調整・技法・文様など	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	残存高	焼成	色調	胎土	備考	写真図版
第14図1	C1	包含層	土師器	鍋	口縁～胴部	1/10	外）口縁部：ナデ　頸部：指押さえ？　胴部：強いハケ　内）横ハケ	（32前後）		（6.4）	残	良好	橙色	③赤茶色の砂粒を含む		図版第８
第14図2	A11	攪乱	土師器	鍋	口縁～胴部	1/12	外）口縁部：ナデ　胴部：タテハケ　内）横ハケ			（6.7）	残	良好	にぶい黄橙色	③		
第14図3	B8	包含層	土師器	鍋	口縁～胴部	1/10	外）口縁部：ナデ　頸部：指押さえ？　胴部：強いハケ　内）横ハケ	（30前後）		（6.0）	残	良好	にぶい黄橙色	②		図版第８
第14図4	C2	包含層	土師器	鍋	口縁～胴部	1/12	外）口縁端部：ナデ　口縁部：横ハケ一部ナナメハケ　頸部：ナデ　胴部：ハケ　内）横ハケ			（7.0）	残	良好	灰黄褐色	②		図版第８
第14図5	A11	攪乱	土師器	鍋	口縁～胴部	1/12	外）口縁部：ナデ　頸部：タテハケ　胴部：強いハケ　内）横ハケ			（9.5）	残	良好	にぶい黄橙色	④	外）煤付着	図版第８
第14図6		井戸1	土師器	鍋	口縁～胴部	1/12	内外面とも口縁部は指押さえ　胴部はハケ			（7.7）	残	良好	浅黄橙色	⑤		図版第８
第14図7		p28	土師器	鉢	口縁～胴部	1/12	外）口縁端部：ナデ　口縁部：横ハケ　頸部：タテハケ　胴部：ナデ　内）横ハケ			（8.4）	残	良好	灰白色	③		図版第８
第14図8	B8	包含層	土師器	羽釜	口縁	1/12	外）横ナデ　内）ハケ			（5.7）	残	良好	灰白色	②		図版第８
第14図9	D10	包含層	土師器	羽釜	口縁	1/12	内外面ともハケ			（6.5）	残	良好	にぶい黄橙色	②		図版第８
第14図10	C1	包含層	土師器	脚		1/3	摩滅のため調整不明			（8.6）	残	やや不良	灰白色	①		図版第８
第14図11	B3	包含層	土師器	脚		1/4	摩滅のため調整不明			（8.0）	残	良好	灰白色	③・④	外）煤付着	図版第８
第14図12	C6	包含層	土師器	脚		1/3	外）ナデ　内）ナデ			（8.7）	残	良好	にぶい橙	②		図版第８
第14図13	C3	包含層	土師器	脚		1/4	外）ナデ　内）ナデ			（4.4）	残	良好	にぶい黄橙色	②		図版第８
第14図14	C3	包含層	土師器	脚		1/3	摩滅のため調整不明			（8.3）	残	やや不良	橙色	②		図版第８
第14図15	A11	包含層	土師器	甕	胴部	1/12	内外面ともハケ　煤付着			（18.4）	残	良好	にぶい褐色	②	煤付着	

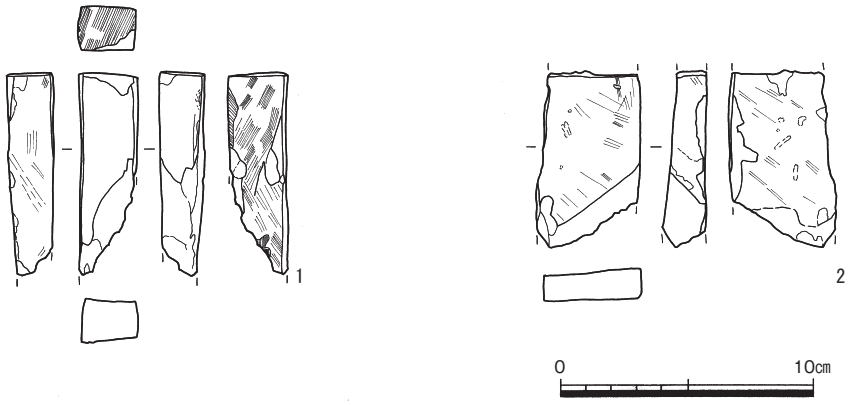
図版No.	地区	遺構	種別	器種	部位	残存率	調整・技法・文様など	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	残存高	焼成	色調	胎土	備考	写真図版
第15図１	A11	攪乱	土師器	皿		1/2	内外面ともナデ	（13.8）		2.1		良好	にぶい黄橙色	①		図版第９
第15図２	A11	攪乱	土師器	皿		1/4	外）底部：指押さえ　他は内外面ともナデ	（17前後）		2.5		良好	にぶい黄橙色	②		
第15図３	D1	包含層	土師器	皿		1/4	外）底部：指押さえ　他は内外面ともナデ	（13前後）		2.5		良好	にぶい黄橙色	②		
第15図４		ｐ32	土師器	皿		5/12	外）底部：指頭圧痕　他は内外面ともナデ	（13.8）		2.1		良好	橙色	②		
第15図５	D3	包含層	土師器	皿		1/6	外）底部：指頭圧痕　他は内外面ともナデ	（13.8）		2.5		良好	灰黄褐色	③		
第15図６	A9	攪乱	土師器	皿		1/6	外）底部：指頭圧痕　他は内外面ともナデ	（13.8）		2.0		良好	灰黄褐色	③赤褐色の砂粒を含む		
第15図７	C2	包含層	土師器	皿		1/4	外）底部：指押さえ　他は内外面ともナデ	（11前後）		2.6		良好	橙色	②		
第15図８	A7	包含層	土師器	皿		5/6	内外面ともナデ　タール痕付着	8.4		1.8		良好	浅黄橙色	②	タール痕付着	図版第９
第15図９		井戸１	土師器	皿		1	外）底部：指頭圧痕　口縁部：指押さえ　他は内外面ともナデ	7.9		1.2		良好	浅黄橙色	①		図版第９
第15図10	C7	溝１	土師器	皿		5/6	外）底部：指押さえ　他は内外面ともナデ	（8.4）		1.6		良好	にぶい橙色	②		図版第９
第15図11	A11	包含層	土師器	皿		1/10	外）体部：ナデ　底部：ハケ　内）ナデ	9.0		1.0		良好	橙色	①		
第15図12	B13	包含層	瀬戸	卸皿	底部	1/3	外）糸切り後ナデ			（1.2）	残	良好	にぶい黄橙色	③		図版第９
第15図13	A12	攪乱	越前焼	鉢	口縁～胴部	1/12	施釉　内外面ともナデ			（7.9）	残	良好	明褐色	⑤	外）自然釉付着	図版第９
第15図14	C13·D14	包含層	越前焼	鉢	口縁～胴部	1/12	内外面ともナデ			（6.0）	残	良好	にぶい褐色	⑤		図版第９
第15図15	C14·A10	包含層・攪乱	越前焼	擂鉢	底部	11/12	外）高台：ナデ　底面：ヘラケズリ　内）ナデ			（3.2）	残	良好	にぶい黄橙色	②	内面底部に自然釉付着	

残存率は部位に対する割合とする。口径、底径の復元値を（　）、器高の残存高を（　）で記述する。
胎土は①微砂粒（直径１㎜以下）を少量含む、②微砂粒を多量に含む、③砂粒（直径１～２㎜）を含む、④小石（直径２㎜以上）を含む、で分けている。

２　石製品

本遺跡で出土した石製品は、総数２点を数える砥石のみである。いずれも遺構外出土で、所属時期の判断は難しいが、切断痕を残す資料は中世以降の所産と見られる。

砥石（第16図）　１は石質から仕上砥と判断される。下端面を折損し、表面・左右側面に滑らかな砥面を有する。表面はやや内弯し、左側面に使用痕と見られる擦痕、裏面と上端面に鋸による切断痕を残す。切断痕から切断工程を復元すると、まず裏面左下隅から右上へ斜めに切り始め、右側面中央付近まで切り進めたところで一旦止め、次に左上から右下へ切り進み、やや進んだところで再度止め、最後に中央右側に残った三角形の部分を折り取る、という工程が想定される。２は石質から仕上砥に近い中砥と判断される。扁平な板状を呈し、上下端面を折損する。表裏面と右側面を使用し、表面はやや内弯する。砥面には主に斜め方向の擦痕が残る。



第16図　砥石実測図（縮尺1/3）

第４表　砥石観察表

遺物No.	器種	出土地区	出土遺構	遺存状態	最大長（㎜）	最大幅（㎜）	最大厚（㎜）	重量（ｇ）	石材	備考	挿図No.
1	砥石	A9	攪乱	破損	（70.5）	40.0	17.5	（42）	鳴滝岩	仕上砥	第16図1
2	砥石	C1	包含層	破損	（81.5）	22.5	17.5	（61）	凝灰岩	中砥	第16図2

第４節　まとめ

今回の調査成果から、本遺跡は13世紀代の集落跡と判断される。以下、遺構・遺物の内容を総括し、遺跡の性格を考察する。

１　遺構

主要遺構の集中する東・西各区について、それぞれの内容を検証する。

東地区（B～ D11～13区：建物５・６、井戸１など）　範囲が狭いが、掘立柱建物や井戸といった生活遺構が検出されており、一般的な居住域と推測される。特に、建物５は規模が突出して大きく、当地区の中心的建物と考えられる。また、建物５・６の方位がほぼ一致することから、２棟は同時期の築造である可能性も指摘できる。

西地区（B～ D１～６・B８区：建物１～４、竪穴１など）　建物１・２および建物３・４はそれぞれ重複するが、構造や規模が酷似しており、同様の建物の改築もしくは移築が想定される。また、建物１・３の方位がほぼ一致することから、２棟が同時期の築造である可能性も指摘できる。以上の状況から、当地区には建物１・３および建物２・４という２つの建物群が存在し、両者は比較的短期間のうちに改築、もしくは移築されたものと推測される。これらはいずれも小規模で、少し離れた場所には竪穴住居と見られる遺構（竪穴１）も存在することから、居住以外の目的で築造された、小屋のような建物であったと考えられる。土坑と溝の複合遺構２例については、いずれも土坑を起点として、標高の低い北方へ溝を延長しており、水を媒介とする何がしかの工程を構築していたものと推測される。また、それぞれ重複せず独立しているため、時期差あるいは同時性を論ずることはできないが、１例（土坑11・13・溝４・５・７）は建物１・３と重複していることから、建物群の変遷と連動している可能性もある。

２　遺物

本遺跡で出土した土器は、いずれも13世紀代に属するものと考えられる。特にハケ調整の土師器鍋については、細片資料が表採・表土資料などに散見される程度で、所属時期の確定したもの、それも器形の分かるものとなると県内でも数例ほどで、北陸の他県でもあまり見ることができない。にもかかわらず、これらは調整や色調・胎土などが酷似しており、その関係が注目される。

今回得られた土器は一括資料ではないが、おおむね13世紀代に所属時期が限定されるという点は、遺物のみならず遺跡自体の特性として注目すべきである。また、13世紀代は本県ではまとまった資料が得られていない時期でもあり、その意味でも資料的価値が高いと言える。

３　遺跡

現在、吉野の谷底平野の大半は水田地帯だが、かつては中央を流れる荒川の氾濫湿地や沼が一帯に広がり、土地の人々が長い年月をかけて水田に改良してきたものと言われ、集落の多くが山際の小規模な扇状地や段丘上に立地している。当調査区の遺構の内容は、大筋では集落内の居住域としての性格が見て取れるが、当調査区の立地する山地は平野のほぼ中央部に突出しており、周辺の集落ともほとんど連絡のない孤立した地形[(1)]であるため、およそ居住に適しているとは言いがたい。したがって、当調査区については、単なる居住以外の目的も想定すべきと考えられる。

西地区で検出された建物および複合遺構の性格、それらすべてが比較的狭い範囲に集中していることなどを総合すると、西地区の一角に何らかの作業場を設定していた状況が推察される。そして、その点において、土師器鍋や羽釜およびその脚部など、特徴的かつ希少な遺物が多く確認されている事実[(2)]は重要な意味を持つ。すなわち、人が常時定住するのではなく、前記のような作業区域、具体的には土師

器鍋や羽釜など土師器製品の生産工房が、当調査区を含めたこの山地一帯に展開していた状況が想定される。その場合、今回の調査では検出されなかった窯跡が調査区近辺に存在している可能性も同時に指摘できるが、現状で確認はできていない[(3)]。

註

１　台地の西側外周沿いに、島（しま）という小さな集落があった（第１図など参照）が、交通の不便や耕地の少なさなどから、近代以降徐々に戸数が減少し、現在では廃絶している。

２　同様の状況は、永平寺町教育委員会による同遺跡発掘調査でも確認された。同町の調査区は当調査区の北側10数ｍに近接し、当調査区の位置する段丘面の裾部に相当すると推測される。

３　当調査区南方の段丘面（高位面）には竹林が広がっており、窯跡などの視認は事実上不可能である。

第４章　上吉野法善田遺跡

第１節　概要〔図版第６、第17・18図〕

１　地形と層序

上吉野法善田遺跡は谷底平野の南奥部、山裾から荒川左岸に広がる段丘上に立地する。今回の調査区は過去の圃場整備事業により、段丘の緩斜面を段切りにして水田に整備した箇所で、広範囲に削平を受けている。全体の規模は、東西約100m、南北20～60m、総面積3,640㎡を測る。

調査区は東側の水田３面、西側の水田１面の計４面、段差は南北３段にまたがる。調査区中央を南北に縦断する空白部は排水路部分である。遺構検出面のうち、削平された平坦面の標高は段ごとに異なり、低い方から順におよそ85.20m、85.90m、86.30m前後である。

調査の結果、地山層まで掘削が及んでいた部分と、くぼんだ地形に遺物包含層が比較的良好に堆積していた部分が見られたことから、旧地形は起伏の緩やかな尾根や谷が複数入り組んでいたものと推測され、尾根を削り、谷を埋めるなどして、より広大な水田に整備した様子がうかがえる。

標準層序は以下の３層に大別される（第17図）。なお、前章でも記したように、吉野地区の土に共通する性質として、３層とも非常に粘性が強い。

Ⅰ層：褐色～褐灰色土で構成される客土。ごくわずかに遺物を含む。耕作土直下に平均30～40㎝堆積するが、調査区中段途中から削平を受け、下段では谷地形以外の部分で掘削が地山層にまで及び、完全に欠失している。逆に、上段ではさらに地山層混じりの客土が多量に盛られる。

Ⅱ層：黒褐色～黒色土で構成される遺物包含層。堆積の厚さは平均40㎝前後だが、下段の谷地形部分などでは最大60㎝ほどもある。遺物量は少ない。

Ⅲ層：黄褐色土で構成される地山層。いわゆる山土と見られ、礫が多く混入する。

Ⅱ・Ⅲ層については、猪谷田畑遺跡のそれと同質の土と判断されたため、猪谷田畑遺跡と同様、Ⅲ層上面を便宜的に遺構検出面と定めて、遺構調査を実施した。なお、吉野地区では少なくとも昭和初年代と昭和30年代末の二度にわたって、大規模な圃場整備事業がおこなわれていることが、地元の方々の聞き取りから判明しており、前述のⅠ層の上に盛られた地山層混じりの客土は昭和30年代末に施された客土、Ⅰ層は昭和初年代に施された客土とそれぞれ推定される。

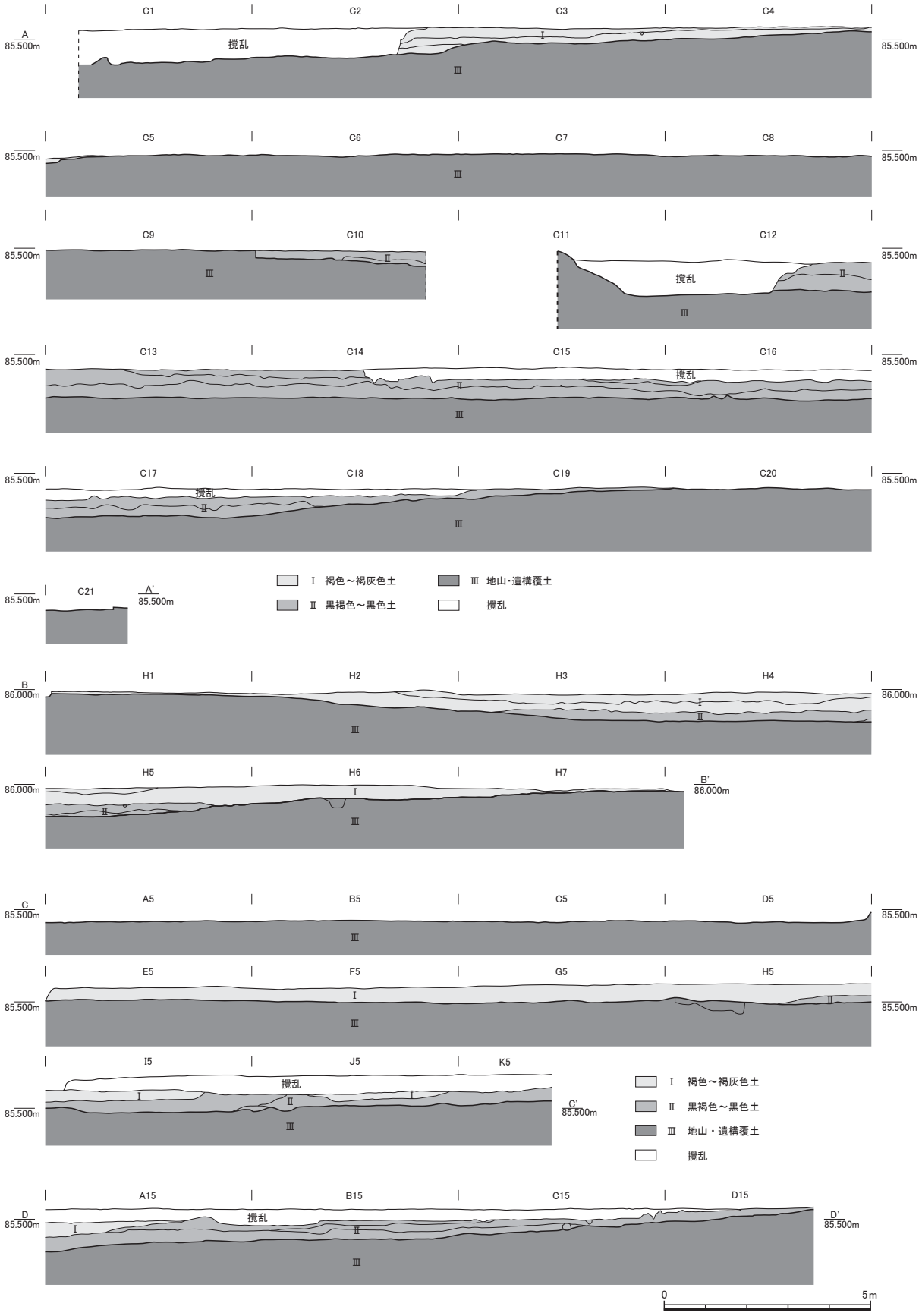
２　遺構検出状況

検出した遺構は、掘立柱建物５棟、ピット列２列、土坑・ピットなどである（第18図）。基本的には遺物が得られた遺構にのみ通し番号を付したが、その総数は土坑46基、ピット150基を数える（掘立柱建物・ピット列の柱穴を含む）。遺構密度はあまり高くなく、小型遺構が主で、大型遺構は少ない。

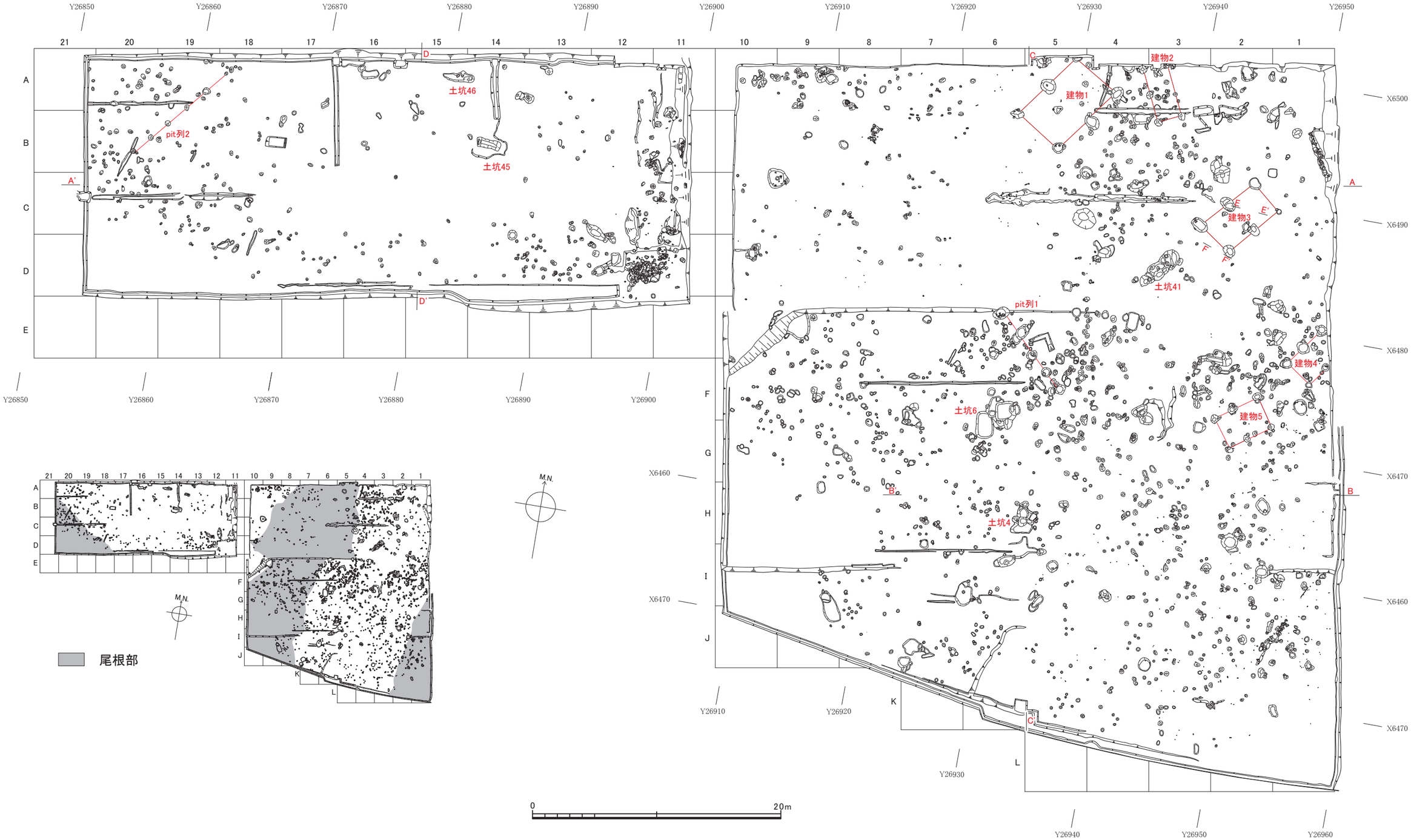
谷部で遺構が比較的良好に遺存する傾向が見られるが、削平を受けた尾根部にも遺構を残す箇所は散見され、旧地形の起伏が緩やかであった様子が推察される（第18図左下）。

３　遺物出土状況

出土遺物は大型コンテナで50箱分を得た。内訳の大半は土器で、古代の土師器・須恵器が主体だが、縄文土器や中世の土器（越前焼）、石器も含む。なお、当地には、傾斜地形による遺物包含層の自然流入や過去の開発行為に伴う客土の搬入などのため、他所の遺物が若干混入しており、縄文土器や大半の石器などはその典型例である。



第17図　上吉野法善田遺跡　調査区土層断面図（縮尺1/150）



第18図　上吉野法善田遺跡　遺構全体図（縮尺1/300）

第２節　遺構　〔図版第７、第18～23図、第５・６表〕

検出した遺構は、掘立柱建物、ピット列、土坑・ピットなどである。なお、各遺構の規模（長さ・幅・深さなど）や方位（角度）についての数値は、すべて遺構検出面を基準として、測量図上で測定・算出した概測値である。また、掘立柱建物およびピット列については、現地調査終了後に測量図上で抽出・設定し、検証の結果、それと判断したものを挙げた。

１　掘立柱建物

総数で５棟を検出した。全体を検出し得たものが３棟（建物１・３・５）、部分的に検出したものが２棟（建物２・４）で、すべて２×１間の側柱建物か、それと推測される。位置の重複する建物はなく、平面形状は長方形が主であるが、柱間は建物ごとに微妙に異なり、統一性はあまり見られない。柱穴の掘り方は歪な方形が主だが、大きさは一辺0.6m前後、または一辺1.0m前後の２種類に大別される。

以下に概略を記すが、挿図に示す建物の柱穴のうち、遺物が得られた遺構のみ、遺構別の通し番号を付している。各建物の詳細は一覧表（第５表）を参照されたい。

建物１（第19図）　本遺跡最大の規模を有する遺構で、他の建物と比べてもその規模は特に突出している。両桁行の位置がややずれており、平面形状が平行四辺形を呈する。柱穴が浅いのは、尾根上に位置しているため、大半が削平されたものと考えられる。

建物２（第19図）　他の建物と異なり、梁行の柱間が桁行のそれよりも短くなっているため、平面形状がほかの建物よりも細長い。

建物３（第19図）　周辺は谷底でも一際低く、包含層も特に厚く堆積していた箇所であるが、柱穴がいずれも浅い。これは包含層掘削時に柱穴の大半を掘削してしまったためと推測され、当時の生活面は遺構確認面（地山層直上）より上、つまり包含層中に存在したものと考えられる。

建物４・５（第20図）　この両者については、柱穴の掘り方の傾向が異なる（建物４の柱穴の方が全体に大きめ）ものの、柱間など建物の構造や規模が酷似している。

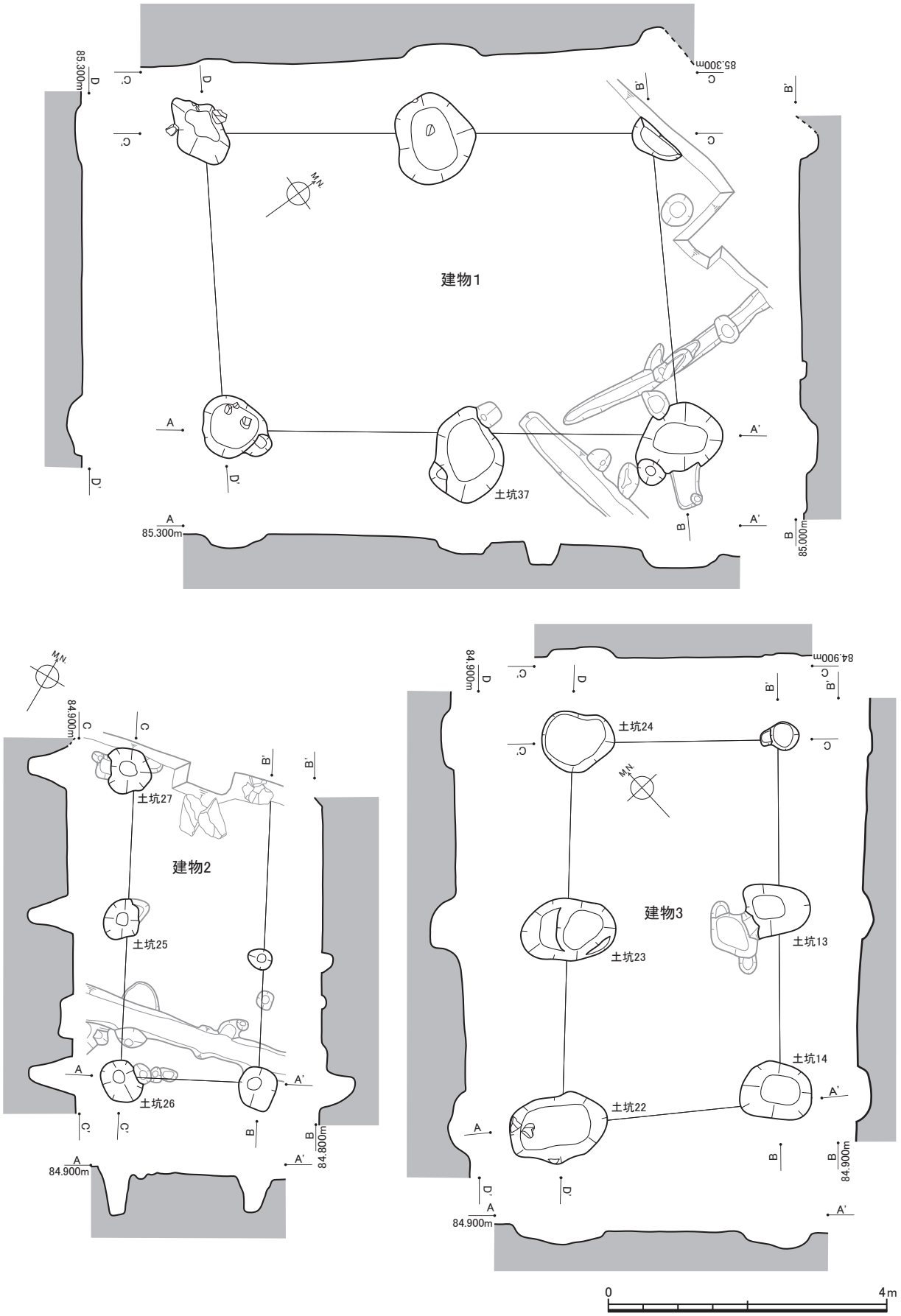
２　ピット列

総数で２列を検出した（第20図）。並列するピット列が見当たらないことから、いわゆる柵列と考えられる。ピット列１の柱穴の形状は、掘立柱建物と同様、いずれも不整方形で掘り方も大きいが、ピット列２では円形で掘り方も小さく、両者の様相は対照的である。しかし、両者とも削平された旧尾根部にほぼ直行する形態をとっている点（第18図）で共通している。

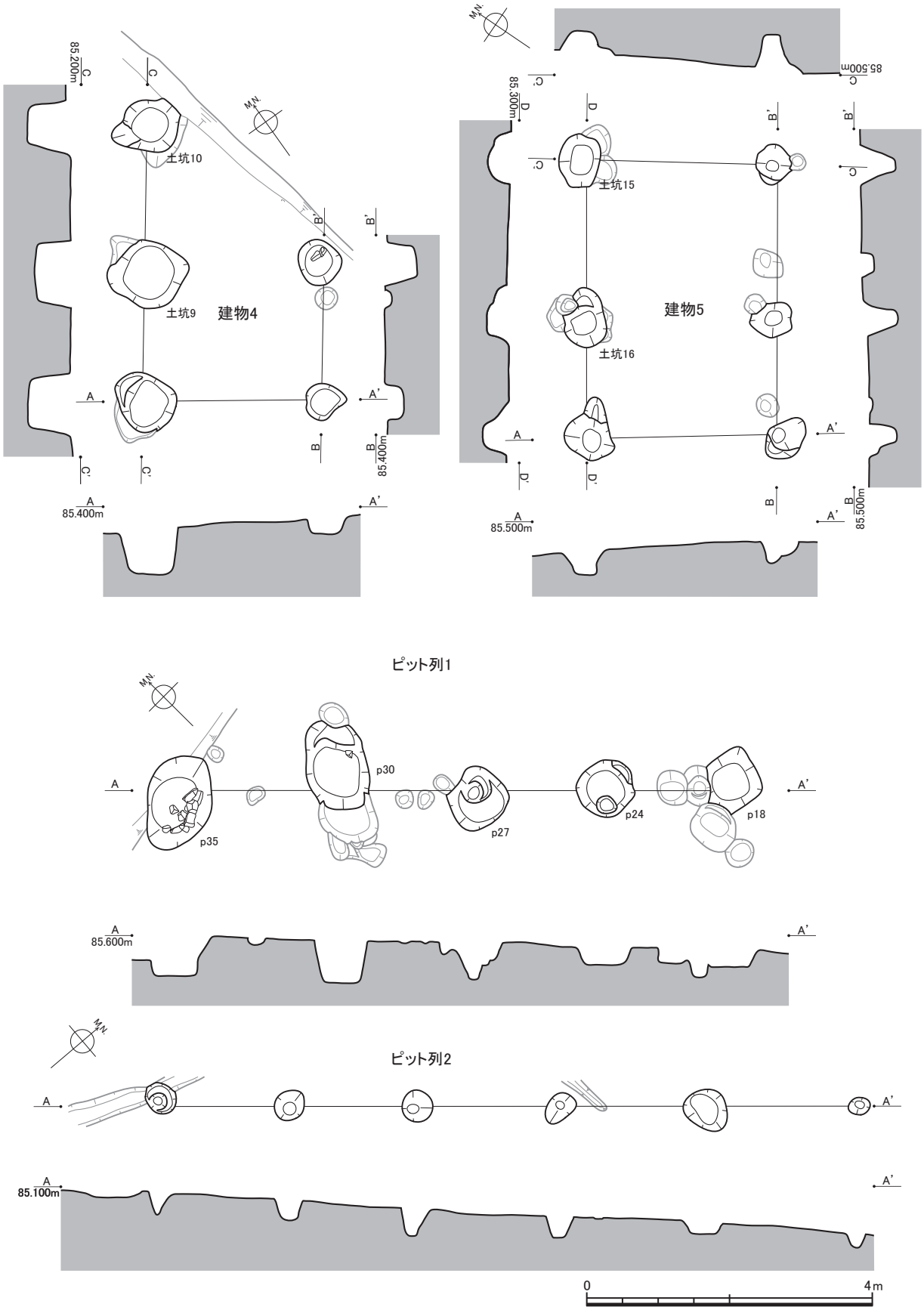
第５表　掘立柱建物・ピット列一覧表

遺構名	地区	構造	柱穴掘り方	桁×梁（間）	桁行×梁行（m）	方位（桁行）	出土遺物	備考	挿図№
建物１	A・B4～6	側柱	不整方形	2×1	6.54×4.34	N36° E			第19図
建物２	A・B3～4	側柱	不整方形	2?×1	4.40×1.98	N28° W			第19図
建物３	C・D1～3	側柱	不整方形	2×1	5.46×2.96	N43° E			第19図
建物４	E・F1	側柱	不整方形	2?×1	3.86×2.52	N37° E			第20図
建物５	F・G1～2	側柱	不整方形	2×1	3.90×2.68	N55° E			第20図
ピット列１	E・F5～6	―	不整方形	―	―	N45° W		柱穴５基（４間分）遺存	第20図
ピット列２	A・B18～20	―	不整円形	―	―	N41° E	―	柱穴６基（５間分）遺存	第20図

※桁行・梁行の長さの数値はすべて概算値もしくは推定値。



第19図　掘立柱建物実測図（縮尺1/80）



第20図　掘立柱建物・ピット列実測図（縮尺1/80）

３　土坑

本項では主要な土坑について概略を記すが、掘立柱建物の項で記したように、特に谷部については、包含層中に遺構面（当時の生活面）が存在した可能性が高く、今回確認し得た遺構の規模は、本来よりもいくらか縮小しているものと推測される。各土坑の詳細は一覧表（第６表）を参照されたい。

土坑１・６（第21図）　土坑１は周辺の複数の土坑と切り合うが、先後関係は最も新しい。土坑内面の大部分が被熱・赤化し、覆土に焼土や炭が含まれ、頻繁に火を使用していた状況が見て取れる。焼土直上で土師質皿を検出していることから、中世に属する遺構と判断される。土坑６は土坑１に隣接するが、直接切り合っていない。覆土に焼土を若干含む。土坑１同様、中世に属する遺構と推測される。

土坑４（第21図）　土坑が複数集合する中の１基である。断面図から判断して、本来の外形はより大きく、浅皿状を呈する土坑と推測される。

土坑45（第21図）　外形が若干歪むが、全体としては長方形を意図したものと見られる。内形は舟形を呈し、西端部がくぼむ。土坑墓の可能性が高い。

土坑41（第22図）　土坑が複数集合する中の１基である。各土坑がそれぞれ個別に掘削されたとは考えにくく、土層断面図の切り合いが１～９層、10～13層、14～15層に大きく三分されることから、本来は３基の土坑が切り合う状況と見られる。特に土坑41を含む１～９層の土坑は、形が粗雑だが、基本的には長楕円形か長方形を意図して掘削されたと考えられる。その場合、長軸2.70ｍ、短軸1.41ｍ、深さ0.33ｍをそれぞれ測り、方位はN40° Eを向くと推定される。土坑45と同様、土坑墓の可能性が高い。

土坑46（第22図）　外形が安定しないが、全体としては長楕円形を呈し、内形は舟形を呈する。土坑41・45と同様、土坑墓の可能性が高い。

第６表　主要土坑一覧表

遺構名	地区	平面形	方位	平面規模 長軸×短軸（ｍ）	深さ （ｍ）	出土遺物	備考	挿図№
土坑１	F6	正方形	N11° W	1.60×1.55	0.30			第21図
土坑４	H5～6	不定多角形	N68° W	1.82×0.90	0.23			第21図
土坑６	F･G6	長方形	N7° W	2.22×1.38	0.18			第21図
土坑41	D3	―	―	0.84×0.56	0.24		全体としては長楕円形か	第22図
土坑45	B14	歪長方形	N83° W	2.00×0.78	0.36			第21図
土坑46	A14～15	不定形	EW	2.55×0.92	0.25			第22図

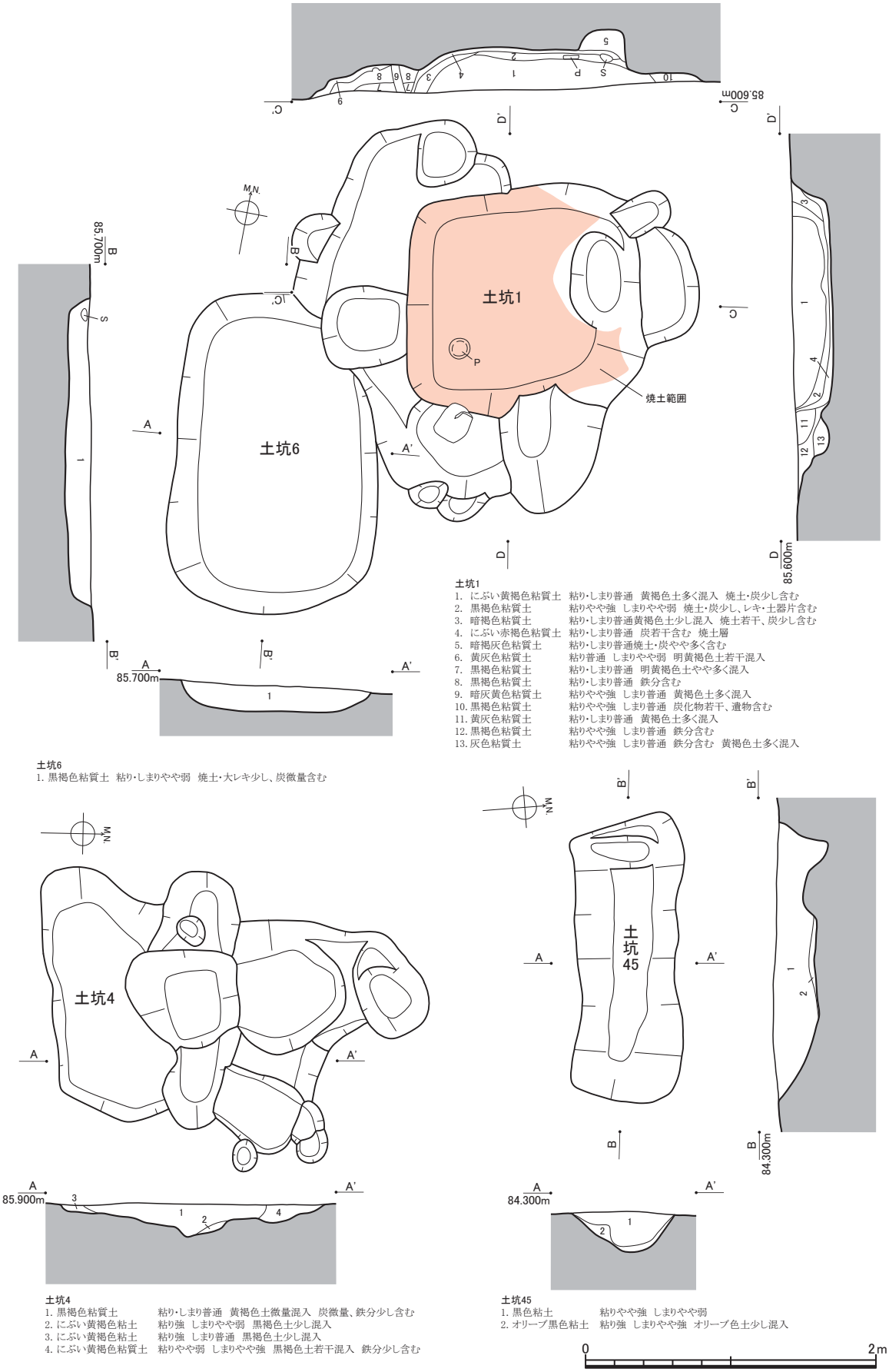
※方位・平面規模・深さはすべて概算値。

４　土器集中出土状況

包含層掘削作業中にC・D２～３区で２ヶ所を検出した（第23図）。本遺跡で遺物の集中出土状況が確認できたのはこの２ヶ所のみである。当所は谷底に位置し、包含層の遺存状況も良好であったことから、包含層中に遺構面の存在を想定して出土状況を観察したが、包含層断面にも出土地点直下の地山層上面にも遺構の痕跡を確認し得なかった。

遺物の内容はほぼすべて縄文土器であったが、本遺跡の出土遺物傾向から見て、この状況は非常に異質である。この２ヶ所以外で縄文土器はほとんど出土しておらず、縄文時代に属すると断定できる遺構も確認されていないことから、他所からの混入と判断するのが妥当と考えられる。

混入の原因は、前節でも指摘した遺物包含層の自然流入によるものと見られ、調査区より標高の高い近隣一帯、具体的には南方の山地およびその周辺に、縄文時代遺跡が存在する可能性は非常に高いと推測される。



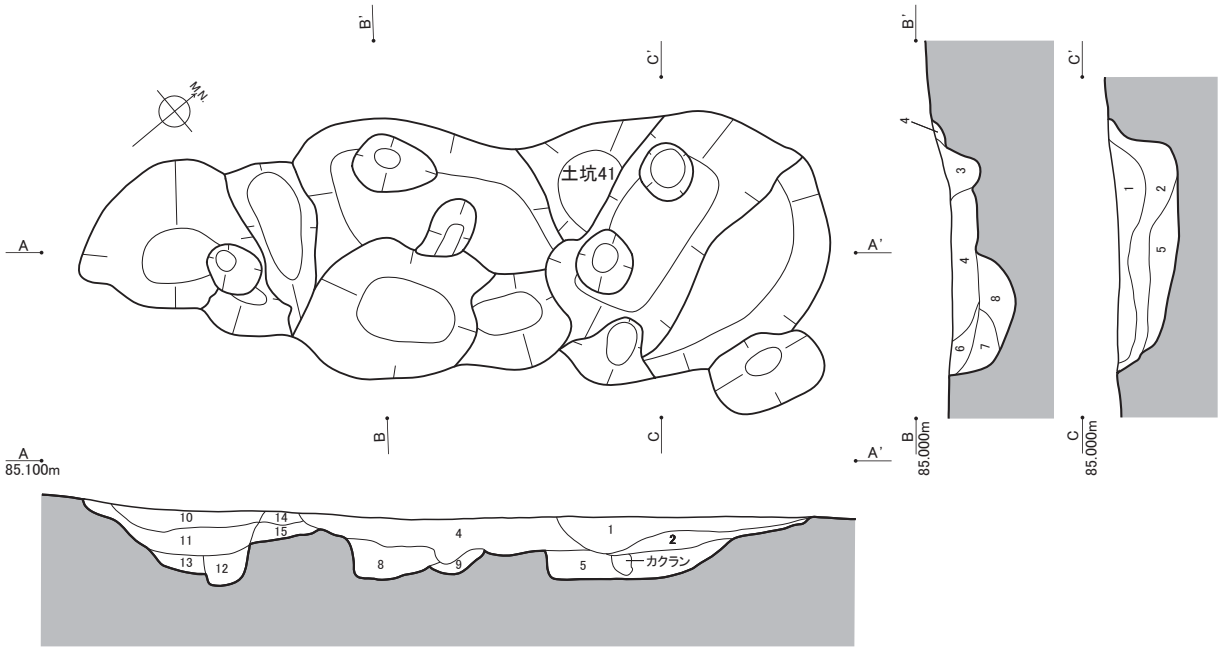
土坑1
1. にぶい黄褐色粘質土　粘り・しまり普通　黄褐色土多く混入　焼土・炭少し含む
2. 黒褐色粘質土　粘りやや強　しまりやや弱　焼土・炭少し、レキ・土器片含む
3. 暗褐色粘質土　粘り・しまり普通黄褐色土少し混入　焼土若干、炭少し含む
4. にぶい赤褐色粘質土　粘り・しまり普通　炭若干含む　焼土層
5. 暗褐灰色粘質土　粘り・しまり普通焼土・炭やや多く含む
6. 黄灰色粘質土　粘り普通　しまりやや弱　明黄褐色土若干混入
7. 黒褐色粘質土　粘り・しまり普通　明黄褐色土やや多く混入
8. 黒褐色粘質土　粘り・しまり普通　鉄分含む
9. 暗灰黄色粘質土　粘りやや強　しまり普通　黄褐色土多く混入
10. 黒褐色粘質土　粘りやや強　しまり普通　炭化物若干、遺物含む
11. 黄灰色粘質土　粘り・しまり普通　黄褐色土多く混入
12. 黒褐色粘質土　粘りやや強　しまり普通　鉄分含む
13. 灰色粘質土　粘りやや強　しまり普通　鉄分含む　黄褐色土多く混入

土坑6
1. 黒褐色粘質土　粘り・しまりやや弱　焼土・大レキ少し、炭微量含む

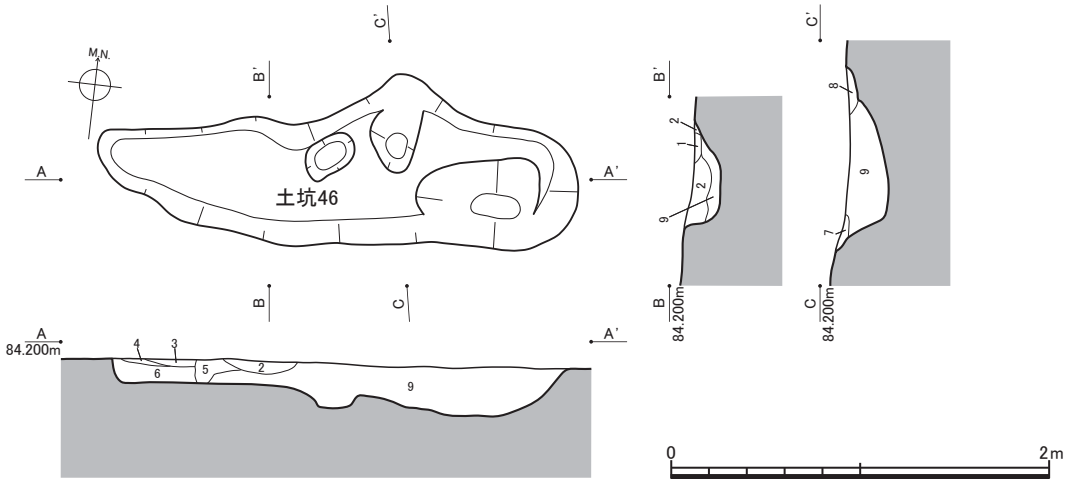
土坑4
1. 黒褐色粘質土　粘り・しまり普通　黄褐色土微量混入　炭微量、鉄分少し含む
2. にぶい黄褐色粘土　粘り強　しまりやや弱　黒褐色土少し混入
3. にぶい黄褐色粘土　粘り強　しまり普通　黒褐色土少し混入
4. にぶい黄褐色粘質土　粘りやや弱　しまりやや強　黒褐色土若干混入　鉄分少し含む

土坑45
1. 黒色粘土　粘りやや強　しまりやや弱
2. オリーブ黒色粘土　粘り強　しまりやや強　オリーブ色土少し混入

第21図　土坑実測図（１）（縮尺1/40）

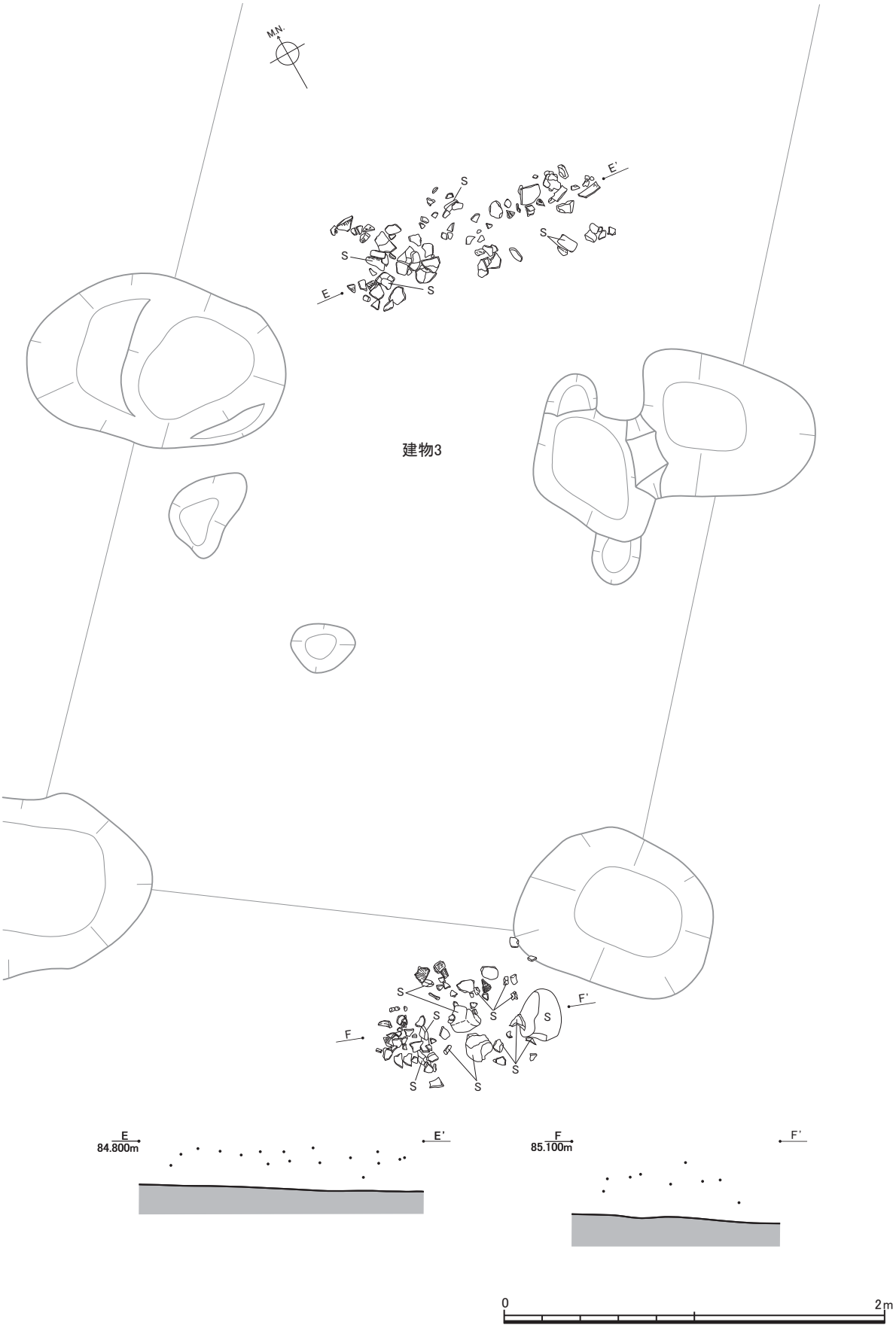


土坑41
1. 黒褐色粘質土　粘りやや強　しまり普通　炭若干、鉄分少し含む
2. 黒褐色粘質土　粘りやや強　しまり普通　にぶい黄橙色土やや多く混入　炭・鉄分少し含む
3. 黒褐色粘質土　粘り・しまり普通　褐灰色土多く混入
4. 黒褐色粘質土　粘り・しまり普通　灰白色土若干混入　炭微量、鉄分少し含む
5. 灰白色粘土　粘り強　しまりやや強　黒色土やや多く混入　炭微量含む　地山の埋め戻し土
6. 黒褐色粘質土　粘り・しまりやや強　炭・鉄分少し含む
7. 黒褐色粘質土　粘り・しまりやや強　灰白色土若干混入　炭少し含む
8. 黒褐色粘質土　粘り・しまり普通　炭・鉄分少し含む
9. オリーブ黒色粘質土　粘り・しまりやや強　炭少し、鉄分やや多く含む
10. 黒褐色粘質土　粘りやや弱　しまりやや強　炭・鉄分若干含む
11. オリーブ褐色粘質土　粘りやや強　しまり普通　10層多く混入　炭微量、鉄分若干含む
12. 灰色粘質土　粘り・しまりやや強　炭微量含む　地山の埋め戻し土
13. 灰色粘質土　粘り強　しまりやや強　炭微量含む　地山の埋め戻し土
14. 褐灰色粘質土　粘りやや弱　しまりやや強　炭微量、鉄分少し含む
15. 灰白色粘質土　粘りやや強　しまり普通　炭少し、鉄分やや多く含む　地山の埋め戻し土



土坑46
1. 黒褐色粘土　粘り普通　しまりやや強　鉄分少し含む
2. 黒色粘土　粘り強　しまり普通　黄褐色土少し混入
3. 黄灰色粘土　粘りやや強　しまり普通　鉄分少し含む
4. 灰オリーブ色粘土　粘り・しまりやや強　黒色土少し混入
5. 灰色粘土　粘りやや強　しまり普通　鉄分少し含む
6. 灰オリーブ色粘土　粘り・しまりやや強　黒色土微量混入　鉄分少し含む
7. 黄灰色粘土　粘り普通　しまりやや強　オリーブ色土若干混入
8. 黒色粘土　粘り普通　しまりやや強
9. 黒色粘土　粘り強　しまり普通

第22図　土坑実測図（２）（縮尺1/40）



第23図　土器集中出土状況実測図（縮尺1/30）

第３節　遺物〔図版第８～15、第24～40図、第７・８表〕

１　土器

１）縄文土器

本項では、前節で示した土器集中出土状況より検出した縄文土器について記述する。これらは遺構に直接伴わない、他所からの混入遺物と考えられる。以下、分類し、説明をおこなう。

第１群土器（第25図１～６）

頸部の屈曲の強いキャリパー器形で、幅広の爪形を連続して押し引き、文様を構成する土器。

１・２は、円形刺突を有するもの。６は、特徴的な節の細長い縄文を有するもの。

第２群土器（第24図、第25図７～36、第26図１～27）

キャリパー器形で、口縁部に横位区画帯を有し、区画内に連続従位半隆起線文ないし斜格子文を有す土器。

１類（第24図１、第25図９～12）口縁部に連続爪形文を有し、口縁部区画帯内に斜格子文を配するもの。

２類（第25図13・14）口縁部に連続爪形文を有し、口縁部区画帯内に格子文を配するもの。

３類（第25図15・16）口縁部に連続爪形文を有し、口縁部区画帯内に連続縦位半隆起線文を配するもの。

４類（第25図７・８・21～31）口縁部に連続爪形文を有さず、口縁部区画帯内に斜格子文を配するもの。

７・８は、口唇内面を肥厚させる。

５類（第25図32～34）口縁部に連続爪形文を有さず、口縁部区画帯内に格子文を配するもの。

６類（第25図35・36）口縁部に連続爪形文を有さず、口縁部区画帯内に連続縦位半隆起線文を配するもの。

７類（第26図１～９）４単位の突起ないし隆帯による加飾を有す土器。

頸部破片（第26図10～27）

第３群土器（第26図28～38）

円筒器形で、主に横位の半隆起線文により文様を構成し、基軸に爪形の連続押し引きを有す土器。

第２・３群土器の胴部破片（第27図）

第２群土器および第３群土器に分離が困難なため一括して提示した。半隆起線文のもの（１～14）、沈線と木目状撚糸文を併用するもの（15）、木目状撚糸文のもの（16～30）がある。

第４群土器（第28図）

緩いキャリパー器形で、半裁竹管状工具で簡易なモチーフを描出する土器。

１・２は、同一個体と考えられる。緩やかに立ち上がる器形を有す。地文は撚糸。半裁竹管状工具による半隆起線文を口縁部および頸部に回周させる。頸部から垂下する縦位の半隆起線文間には、いわゆるコンパス文を配す。

第５群土器（第29図１～５）

口縁部が内弯し、頸部で括れる器形で、口縁部に斜位の沈線や刺突（列点）を配す土器。

第６群土器（第29図６～14）

キャリパー器形で、細い隆帯を貼付することにより文様区画を構成する土器。

第７群土器（第29図15～18）

キャリパー器形で、太い隆帯により文様区画を構成する土器。

第８群土器（第29図19～21）

キャリパー器形で、沈線による渦巻文や弧線文で主文様を構成する土器。

第９群土器（第29図22～24）

キャリパー器形で、刻みを有する貼付隆帯で主文様を構成する土器。

22は、口縁部に横位の狭い区画帯を配し、区画帯内に縦位の刺突を並列して施す土器。24は、本群土器に時間的に併行する浅鉢形土器である。

第10群土器（第29図25～45）

底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形で、口縁部を折り返し状に肥厚させる土器。

１類（25～30）櫛描沈線文を施すもの。

２類（31～34）無文のもの。

３類（35）木目状撚糸文を施すもの。

４類（36～45）縄文を施すもの。

36は、口縁部を折り返さないが、本群に含めた。42は、縄文を縦位に施文するもの。

第11群土器（第30図１～８）

底部。

第12群土器（第30図９）

脚部。

第13群土器（第30図10）

浅鉢形土器。

位置づけ

本遺跡出土縄文土器は、中期前葉から中期中葉までの時間幅を有する。以下、各群に分類した土器の時期比定をおこなう。

第１群土器は、船元Ⅰ～Ⅱ式土器に比定される。

第２・３群土器は、新保式土器に比定される。

第４群土器は、新保式土器に時間的に併行する。

第５群土器は、船元Ⅲ式Ｅ類と呼称される土器群に類似する。

第６群土器は、加曽利Ｅ１式土器に時間的に併行する。

第７群土器は、加曽利Ｅ２式土器に時間的に併行する。

第８群土器は、咲畑式系土器に比定される。

第９群土器は、越前地方において、古府式系土器と呼称されるもの。

第10～13群土器は、新保式土器に時間的に併行するものと考えられる。

以上のように、主体となるのは中期初頭の新保式土器である。本遺跡における新保式土器の深鉢形土器は、キャリパー器形・円筒器形で構成され、それぞれ口縁部文様帯に、斜格子目文・格子目文・縦位半隆起線文を配置する。胴部文様は、半隆起線文のものと木目状撚糸文のものがある。大半が破片資料のため、文様要素と器形の対応関係は不明な点が多いが、北陸地方中央域の新保式とほぼ同様の様相を

示すようである。なお、新保式には、素文系土器の比率が少ないことが指摘されており、本遺跡でも同様の様相を示す（加藤2008）。底部は、中央部が内側に凹む（上げ底の）ものが認められるものの、接合例がないため、時期は特定できない。

最後に、周辺の遺跡出土土器と対比をおこなっておく。福井県で新保式の良好な資料を出土した坂井市坂井兵庫遺跡群（さかいしさかいひょうごいせきぐん）出土土器群には、頸部に斜格子文を有すものが少ない（山本2005）。一方、本遺跡出土土器群には、坂井兵庫遺跡群出土土器群で多く確認される口縁部の鋸歯状文が認められない。このように、モチーフの点で見ると、両遺跡土器群に顕著な差異が認められる。土器に認められるそれぞれの要素差が時間的要因に依るのか空間的要因に依るのかは、常に問題となる。分布や組成などを複合的に考慮しなければならず、検討は今後の資料増加を待たなければならない。

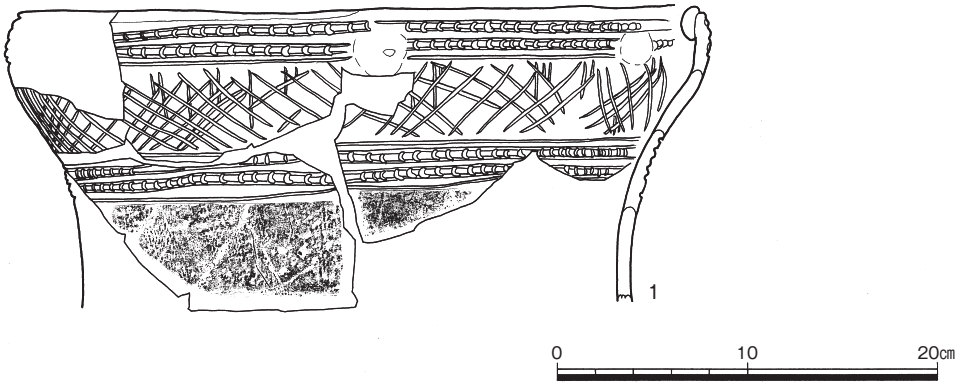
参考文献

加藤三千雄　2008 「新保・新崎式土器」『総覧縄文土器』 アム・プロモーション　450～457頁
山本孝一　2005 「第２章第１節　縄文時代中期前葉土器群の検討」『坂井兵庫地区遺跡群Ⅱ』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　261～272頁

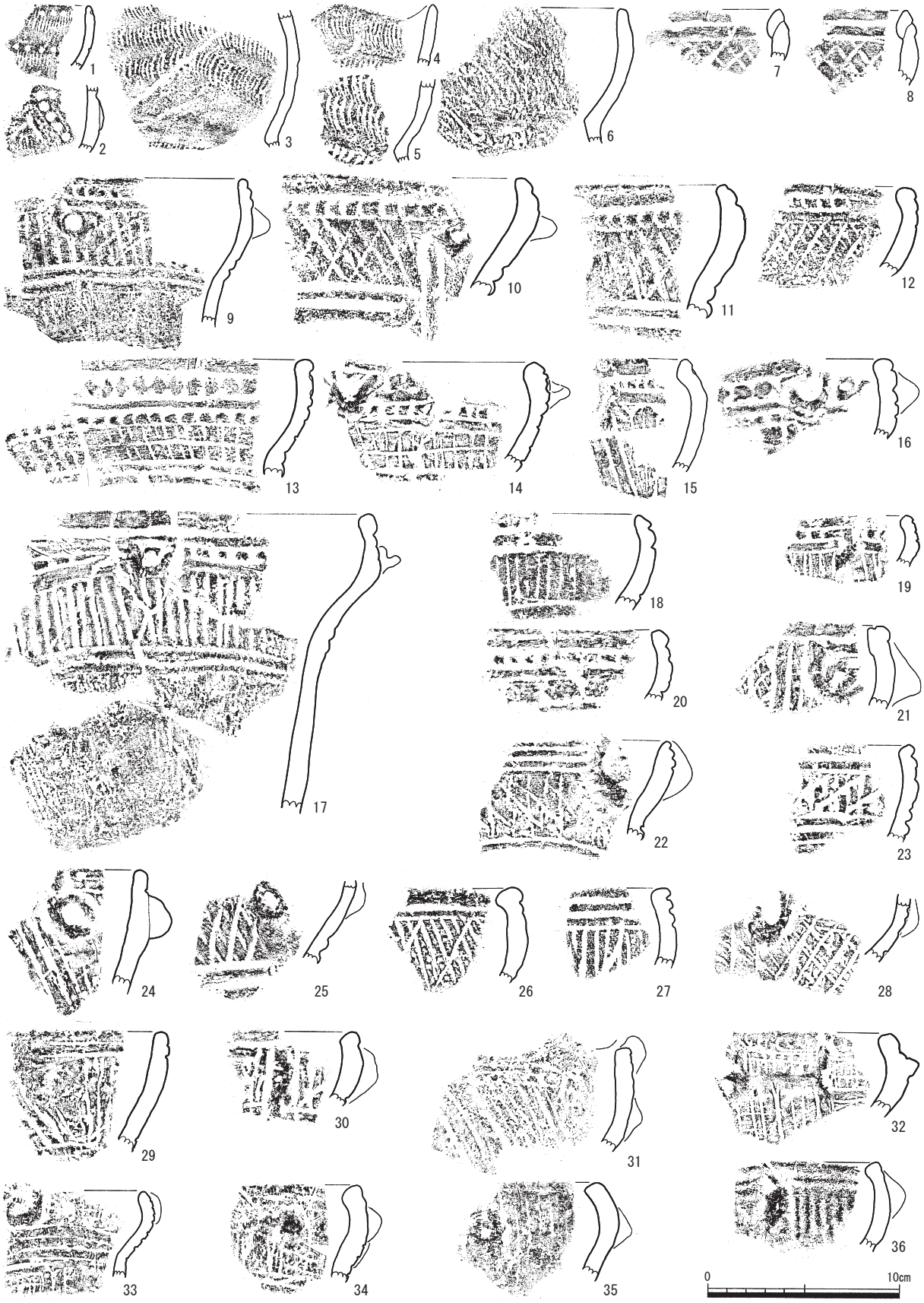
２）土製品

土製円盤（第30図11）

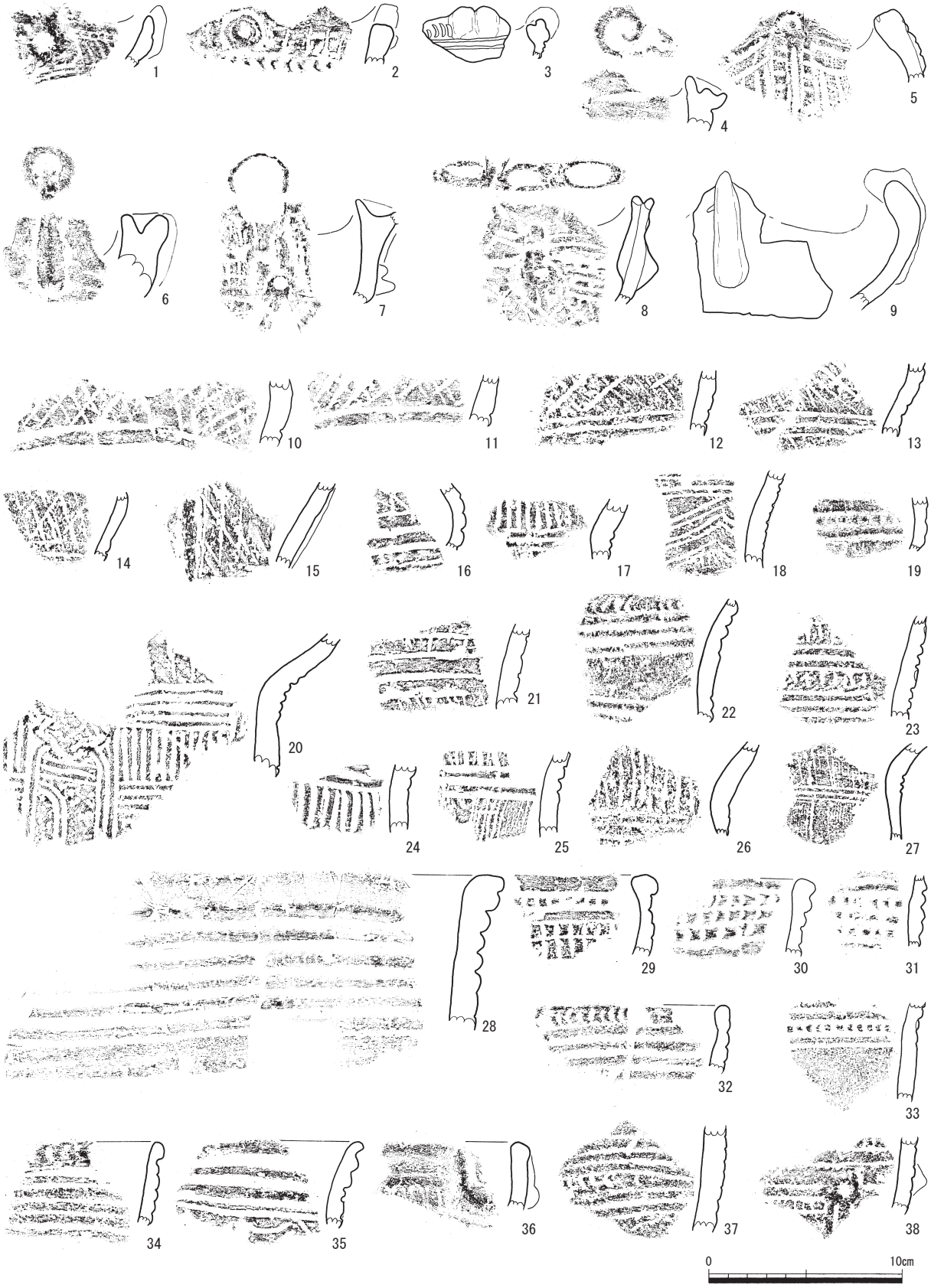
素文土器を転用したもの。



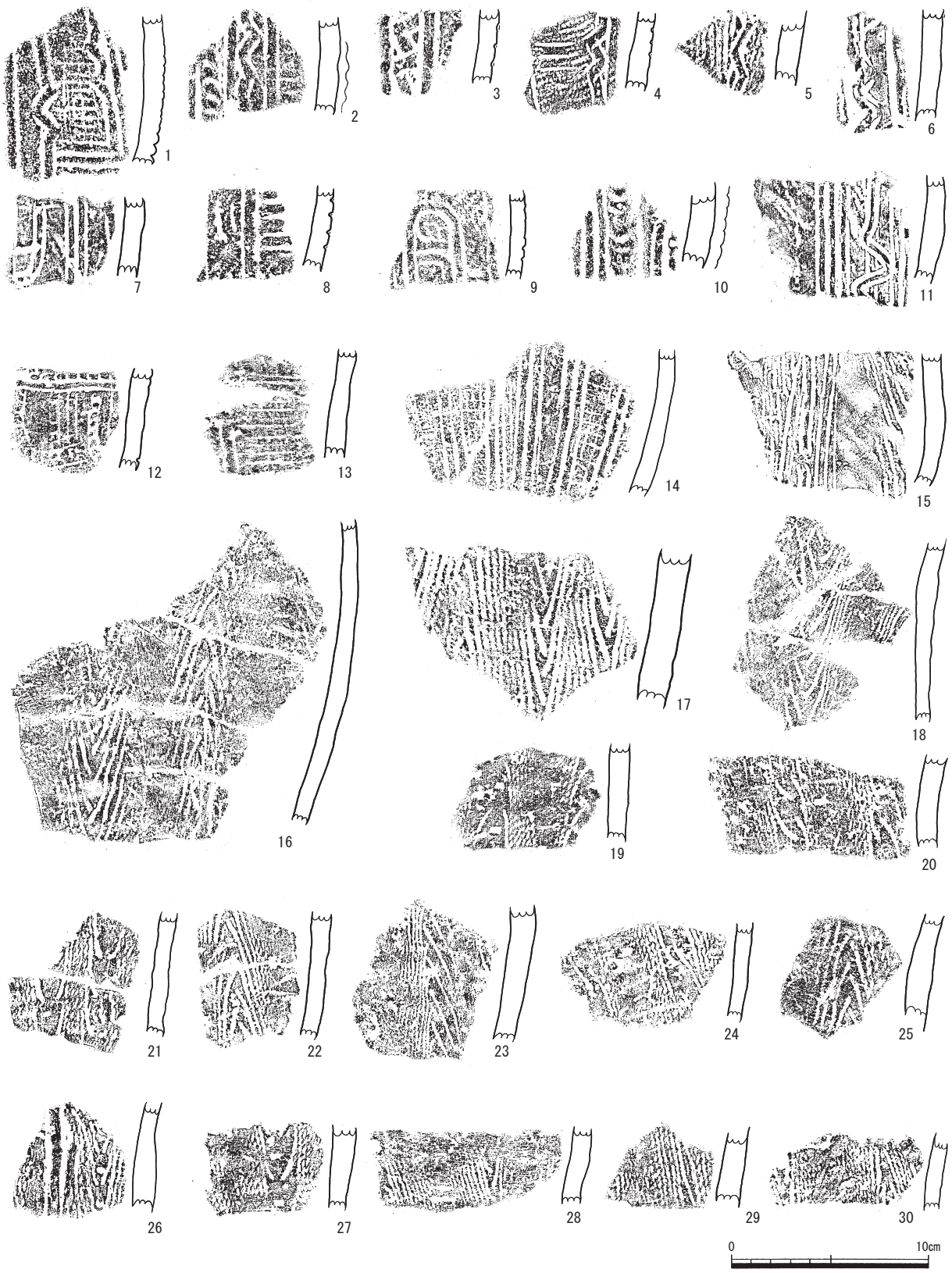
第24図　縄文土器実測図（１）（縮尺1/4）



第25図　縄文土器実測図（２）（縮尺1/3）

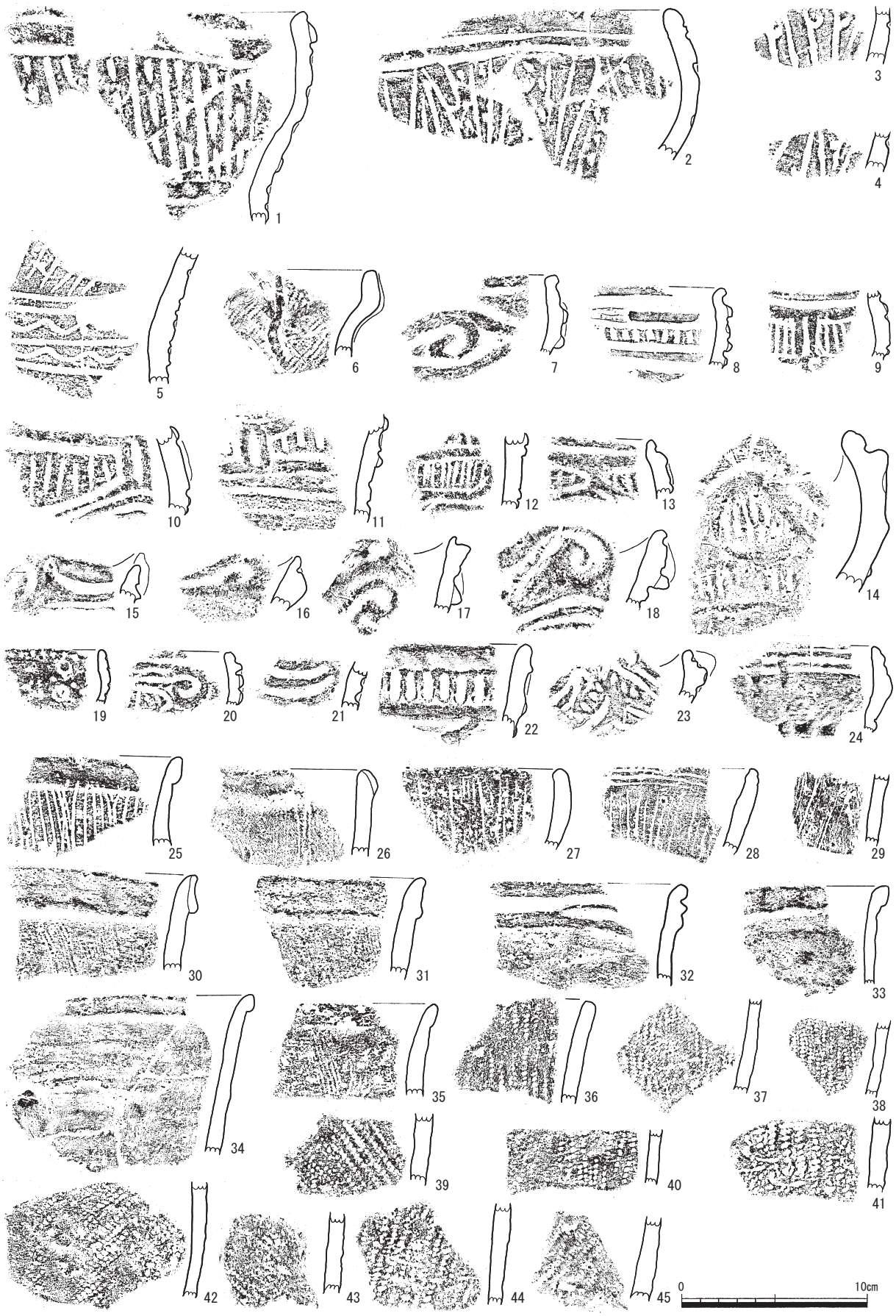


第26図　縄文土器実測図（３）（縮尺1/3）

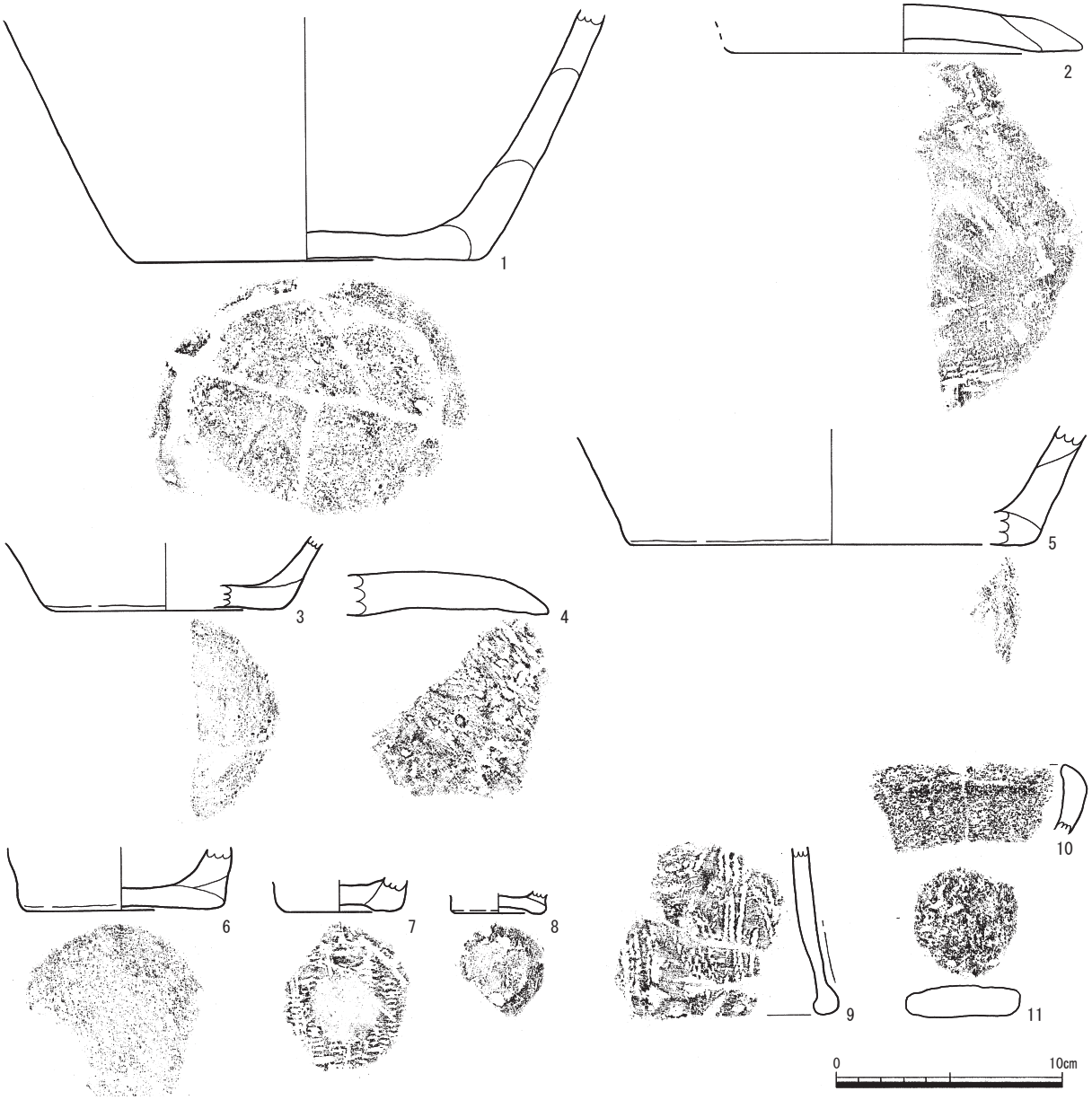


第27図　縄文土器実測図（４）（縮尺1/3）

第28図　縄文土器実測図（５）（縮尺1/3）



第29図　縄文土器実測図（６）（縮尺1/3）



第30図　縄文土器実測図（７）（縮尺1/3）

3)　古代・中世の土器

出土した古代･中世の土器で図化し得たのは、須恵器74点、土師器23点、そして土師質皿（かわらけ）が２点の､合計99点である（第31～34図）。須恵器については､数量の多い供膳具（坏･皿など）を中心に、硯に転用された痕跡がある坏・皿などの破片（転用硯）や墨書土器を、古代の土師器については、特殊なものが多く見られるため、それらを中心に図化した。

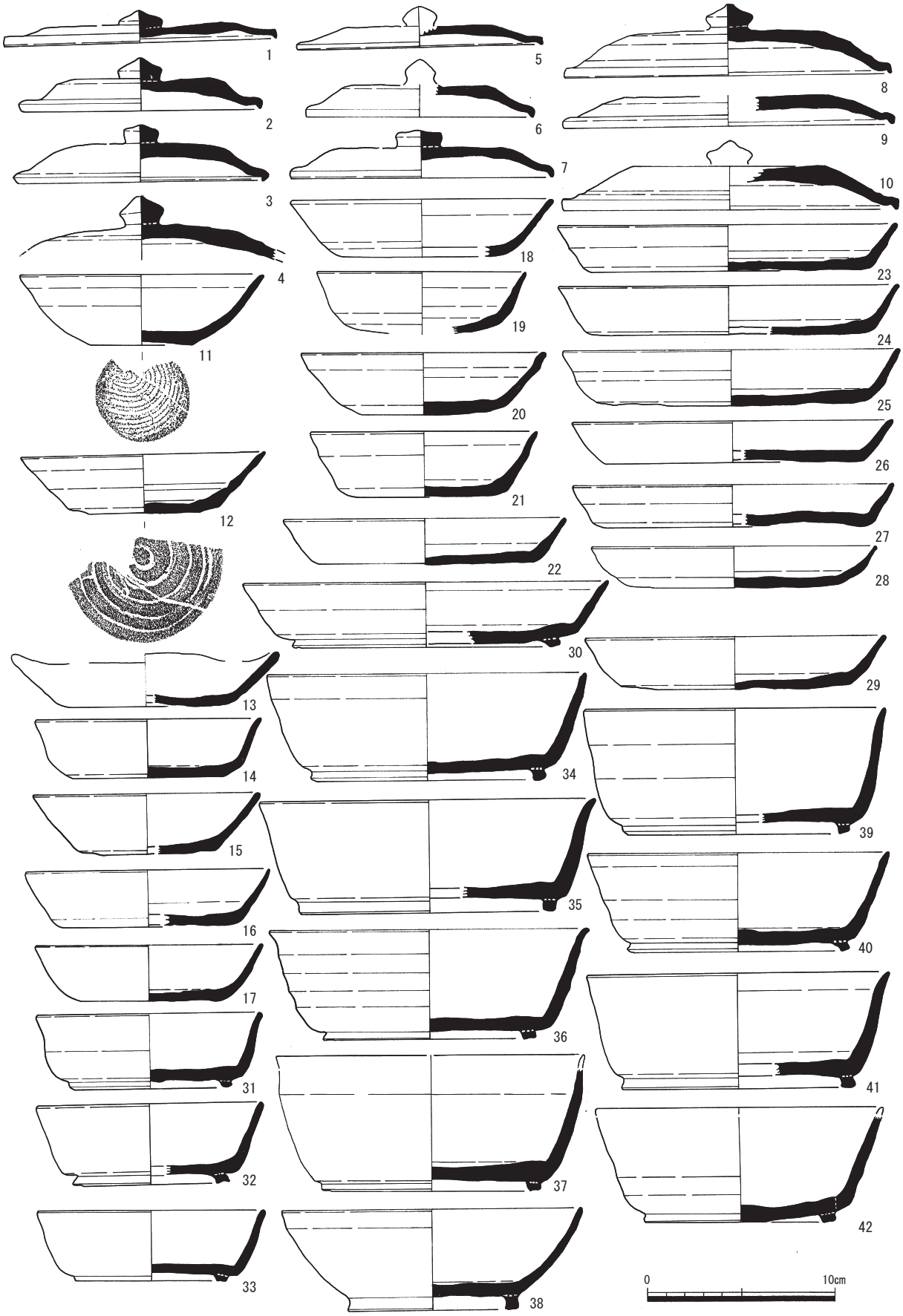
須恵器　坏蓋、坏A・B、皿A、盤A・Bなどの供膳具と横瓶、転用硯、墨書土器がある。坏蓋は摘みがあり､口縁端部を折り返すものが10点（第31図１～10）ある。坏Aは底部ヘラ切りを基本とするが（第31図12～21)、糸切りの底部が１点（第31図11）ある。坏Bは口縁がほぼ直立気味のもの（第31図31～37・39～42、第32図１～８）が20点と多く、胴部に丸みがある埦に近いものが１点（第31図38）ある。皿と盤の違いは微妙である。皿Aに分類したものは口径15cm以下の２点（第31図22・28）で、口径15cm以上の１点（第31図30）を盤Bとし､そのほかの６点（第31図23～27･29）を無台の盤Aとした。横瓶（第32図９）は頸部から胴部にかけての復元実測で、口縁部の形状は不明である。このほか、埦や鉢などの器種に図化できるものはなかった。

転用硯はいずれも坏の底部付近の細片で、全形をうかがえるようなものはない。図示したものをあえて細分するならば、坏Aが３点（第33図17～19)、坏Bが４点（第33図１～４)、盤Aが６点（第33図５～10)、皿Aが６点（第33図11～16）となる。なお、可能性のある破片はまだ多くあり、いずれの刷り面も底部内面である。墨書土器は４点（第33図20～23）あるが、いずれも小片で、文字そのものも不明瞭なため、墨書の内容全体が判読できるものはない。墨書はいずれも坏底部外面にあり、「□寺」（第33図20）と「□□万呂」（第33図22）と判読されるものがある。

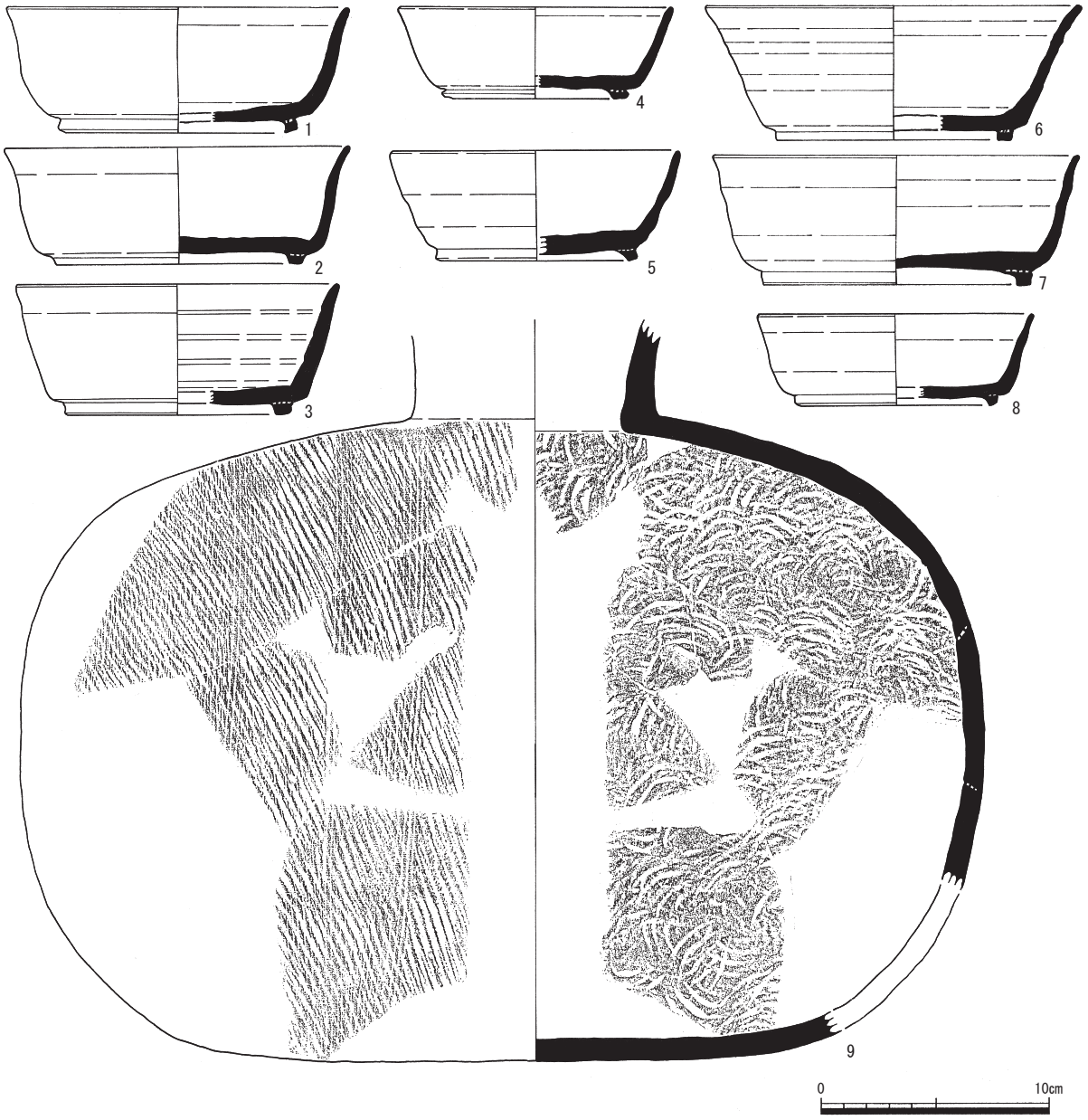
土師器　基本的な器種は甕と鍋であるが、本遺跡ではそれ以外の特殊なものが多く見られ、類例を確認できず、用途が不明なものが多くある。古代の土師器の一般的な器種としては長胴甕があるが、ここではハケ調整の非ロクロ成型のもの（第34図５）とカキ目調整のロクロ成型のもの（第34図４・６）がある。前者は口縁をヨコナデで外反させ､後者は口縁端部を摘み上げて面を作る。底部片のみであるが、内外面ともにカキ目を残すものは､後者のタイプの底部となると考えられるもの（第34図９）であろう。甕には小型で口縁を小さく外反させるもの（第34図１・７）があり、鉢に近い。鉢には口縁部を欠くが、丸底の底部を削るもの（第34図２）と､口径が５cm前後の非常に小型なミニチュア（第34図11）がある。坏・埦類は比較的残りの良いものを図化した。坏Aは底部ヘラ切り（第34図13)、埦Aは底部糸切り（第34図12･15～17）となっている。このほかに遺存状況が悪いが、赤彩と考えられる皿（第34図14）もあり、口縁端部がわずかに外反する。土師器では壺や瓶そのものが非常に特異なものであるが、瓶類の胴部と考えられるもの（第34図８）がある。頸部より上はないが、肩部が屈曲して張り、高台がつくことからそのように判断した。同じ器形の高台のある底部のみのもの（第34図25）もある。上下とも大きく口が開く甑（第34図20）は筒状の器形となる。同じように甑と考えられるものには、先のように円筒埴輪の形状に近いもの（第34図21)、底部を屈曲させたり（第34図22)、平坦面をつくったりするもの（第34図23）もある。また、低い凸帯が口縁直下にあるもの（第34図24）も甑の口縁になると考えられる。

中世の土器　出土量が少なく、そのうち３点を図化した。土師質皿は口径が14cmほどの中型（第34図19）と８cm弱の小型（第34図18）の２点である。もう１点は土師器の鍋の口縁（第34図10）で、外面タテハケ、内面ヨコハケ調整の、中世前半に特徴的なものである。

以上、古代・中世の土器について述べてきたが、大半が古代の土器であり、２点ある中世の土器も中

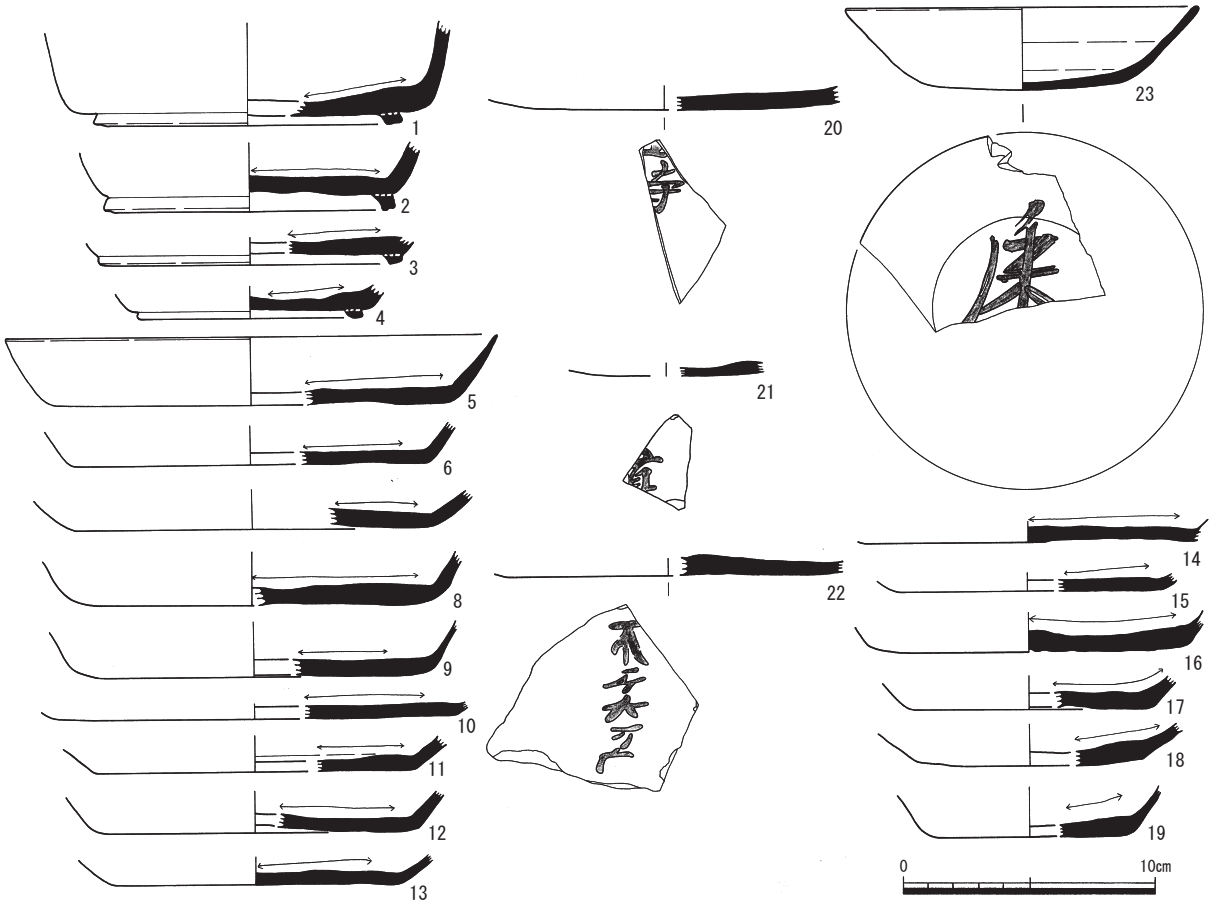


第31図　須恵器実測図（１）（縮尺1/3）



第32図　須恵器実測図（２）（縮尺1/3）

世前半のものである可能性が高い。その所属時期は８世紀後半代から９世紀代までの時期幅を有するが、中心となる時期は、無紐の坏蓋がないことや、坏A・Bなどの特徴から、９世紀代を中心とするものと考えられる。また、図化した須恵器のほとんどが坏などの供膳具で、貯蔵具である甕などの破片はあるものの、数量は少ない。さらに、少ないながらも墨書土器や転用硯の存在と合わせて、土師器は煮沸具である甕・鍋などは見られるものの、瓶や甑など特殊なものも目立つ。煮沸具や貯蔵具が一定量ある一般の集落の土器の様相とは大きく異なり、この二者の比率が極端に低いように考えられる。本遺跡の土器の様相は、単に祭祀的と漠然とするよりも、墨書土器にある「寺」の意義を大きく考慮し、白山信仰に関係する越前五山の一つに挙げられる吉野ヶ岳の西側山麓に位置し、山岳信仰に関連する遺跡の一部であったと、より積極的に評価すべき土器の内容と言えるかも知れない。

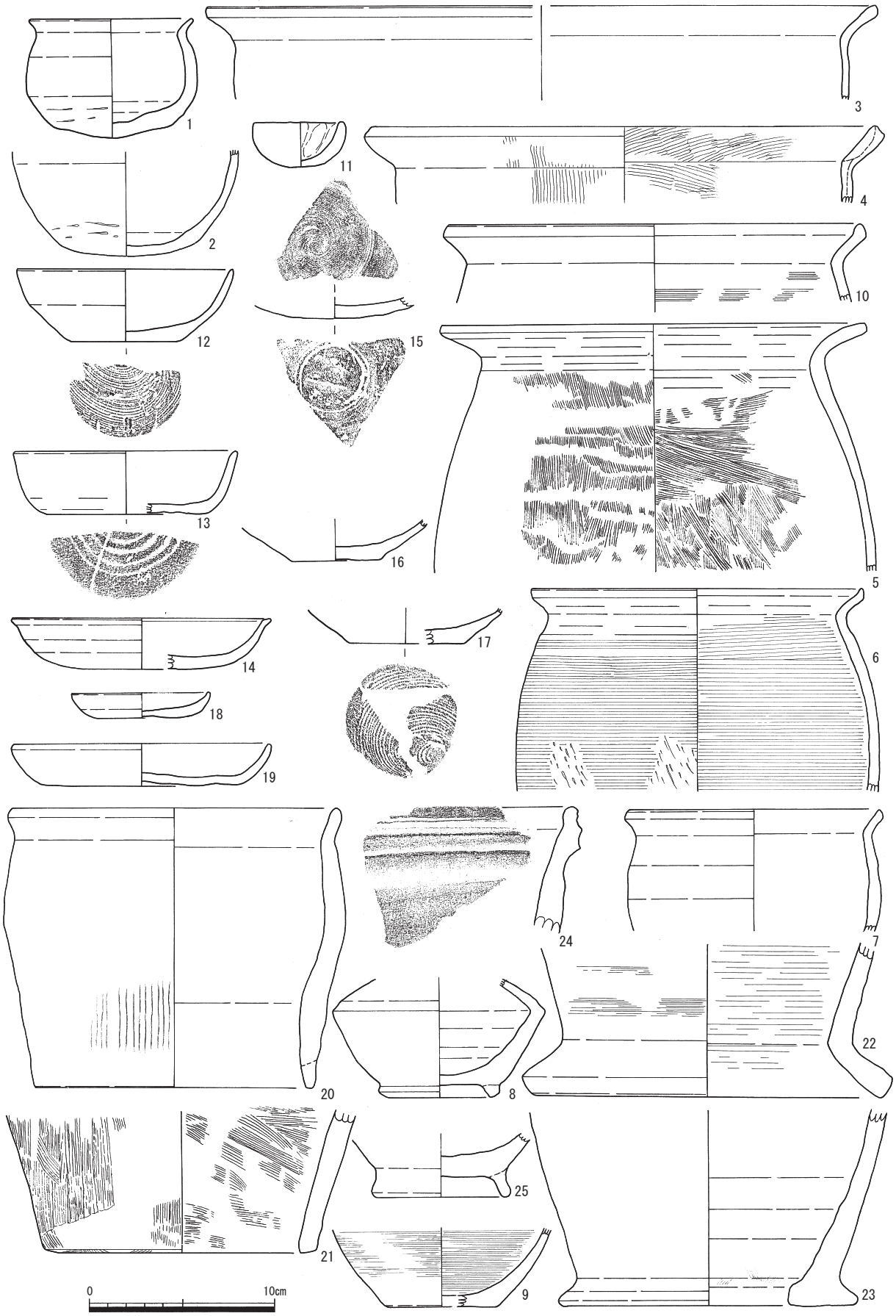


第33図　須恵器実測図（３）（縮尺1/3）

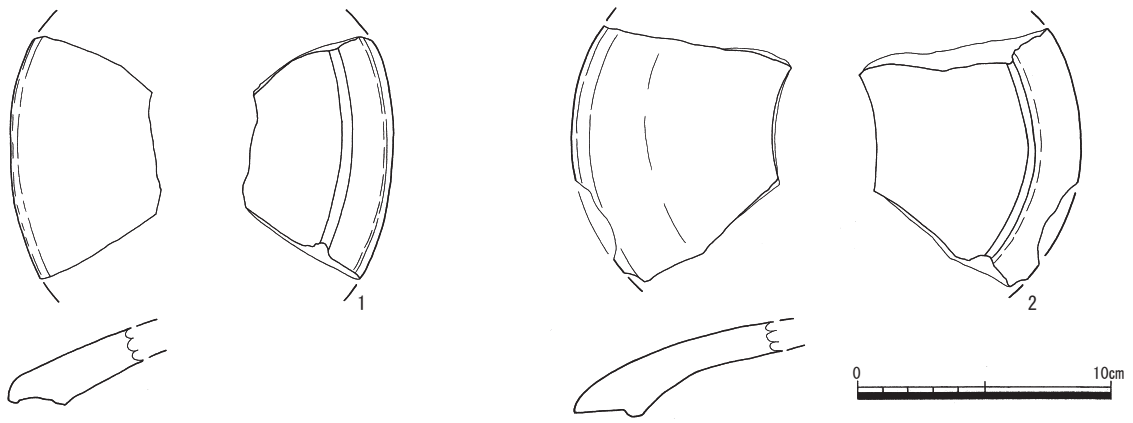
最後に、盛土からの出土で石製バンドコ蓋（第35図２）と、同様の形状の土製バンドコ蓋（第35図１）と判断したものがある。本来のバンドコは石製のものばかりで、土製のものはその類例を知らない。

第７表　古代・中世土器観察表

図版No.	地区	遺構	種別	器種	部位	残存率	調整・技法・文様など	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調	胎土	備考	写真図版
第31図１	K4	包含層	須恵器	坏蓋		1／12	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(14.5)		1.7	黄灰	①④		
第31図２	A12	包含層	須恵器	坏蓋		4／5	外）回転ヘラ切　ナデ　内）ナデ	(12.8)		2.8	灰白	①④	口縁部のみ自然釉付着	図版第13
第31図３	H4	包含層	須恵器	坏蓋		1／2	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(13.1)		3.0	灰	①④		図版第13
第31図４	C14	包含層	須恵器	坏蓋	天井部	2／5	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(13.2)		(3.4)	黄灰	①④		
第31図５	I4	包含層	須恵器	坏蓋	口縁部	1／6	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(12.9)		(1.1)	灰	①④		
第31図６	F4	包含層	須恵器	坏蓋	口縁部	1／4	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(12.1)		(1.7)	灰白	①④		
第31図７	K4	盛土	須恵器	坏蓋		1／2	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(13.9)		2.5	灰	①④		図版第13
第31図８	J3	包含層	須恵器	坏蓋		1／3	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(17.2)		3.8	黄灰	①④		図版第13
第31図９	B14	包含層	須恵器	坏蓋	口縁部	1／4	外）回転ヘラ切　ナデ　内）ナデ	(17.6)		(1.6)	黄灰	①④		
第31図10	J6	包含層	須恵器	坏蓋	口縁部	1／3	外）回転ヘラ切　ナデ　内）ナデ	(17.8)		(2.3)	黄灰	②		
第31図11	G4	包含層	須恵器	坏A		5／12	外）糸切　ナデ　内）ナデ	(13.0)	(5.4)	3.75	黄灰	①④		図版第13
第31図12	E4・6	包含層	須恵器	坏A		1／2	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(12.8)	(5.8)	3.1	灰白	①④	焼成不良	図版第13
第31図13	M4	包含層	須恵器	坏A	口縁部	1／3	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(14.0)	(7.3)	2.8	灰	①④		
第31図14	A9	包含層	須恵器	坏A		1／2	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(11.9)	(7.8)	3.1	黄灰	①③		図版第13
第31図15	A14	包含層	須恵器	坏A	口縁部	1／5	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(11.8)	(7.2)	3.2	灰黄	①④		
第31図16	A12・13	包含層・盛土？	須恵器	坏A		2／3	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(13.0)	(9.0)	2.95	外）灰 内）灰白	①④		
第31図17	E6	包含層	須恵器	坏A		1／3	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(11.9)	(7.1)	3.0	灰	①		
第31図18	A14	包含層	須恵器	坏A	口縁部	5／12	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(13.9)	(8.0)	3.05	灰白	①④		図版第13
第31図19	B14	包含層	須恵器	坏B	口縁部	1／3	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(11.0)	(7.6)	(3.3)	灰白	⑤	底部外面に墨痕か	図版第13



第34図　土師器実測図（１）（縮尺1/3）



第35図　バンドコ実測図（縮尺1/3）

図版No.	地区	遺構	種別	器種	部位	残存率	調整・技法・文様など	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調	胎土	備考	写真図版
第31図20	T6	包含層	須恵器	坏A		1／4	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(12.85)	(6.2)	3.3	灰	①③		図版第13
第31図21	A12	包含層	須恵器	坏A		8／12	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(11.9)	(8.2)	3.5	外）灰黄 内）浅黄	①④		図版第13
第31図22	G4	包含層	須恵器	坏A		1／4	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(14.9)	(11.3)	2.5	灰	①③		
第31図23	F3	包含層	須恵器	坏A		1／3	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(17.8)	(14.0)	2.45	灰白	①④		
第31図24	F・G4・H5	包含層	須恵器	坏A	口縁部	1／6	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(17.9)	(14.0)	2.6	灰	①④	内外面火ダスキ風	図版第13
第31図25	F3	包含層	須恵器	坏A		3／4	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(18.1)	(14.4)	3.0	灰白	①④		図版第13
第31図26	A13	包含層	須恵器	坏A		1／3	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(16.85)	(13.8)	2.2	灰	①④		図版第13
第31図27	H3	包含層	須恵器	坏A	口縁部	5／12	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(16.8)	(13.3)	2.3	外）灰白 内）灰	①③		図版第13
第31図28	H・I3	包含層・盛土	須恵器	坏A		1／2	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(15.0)	(11.4)	2.2	黄灰	①③		
第31図29	F3	包含層	須恵器	坏A		1／4	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(15.9)	(12.3)	3.0	灰	①④		
第31図30	F3	包含層	須恵器	坏B	口縁部	1／3	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(19.4)	(14.3)	3.45	灰	①④		図版第13
第31図31	A12	包含層	須恵器	坏B		1／2	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(11.9)	(7.5)	4.0	黄灰	①③		図版第13
第31図32	B10	土坑40	須恵器	坏B	口縁部	1／4	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(11.8)	(6.7)	4.3	灰	①④		
第31図33	K3	盛土	須恵器	坏B		1／3	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(11.9)	7.9	3.75	黄灰	①④		
第31図34	A1・E3	包含層・盛土	須恵器	坏B		1／2	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(17.0)	(12.5)	5.7	灰白	①③		
第31図35	F・G5・H4・I3	包含層	須恵器	坏B	口縁部	5／12	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(17.8)	(13.6)	5.6	黄灰	①④		
第31図36	A15	包含層	須恵器	坏B		5／12	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(16.9)	(11.2)	5.85	灰	①④		図版第13
第31図37	J9	包含層	須恵器	坏B		1／3	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ		(11.1)	(6.3)	黄灰	①④		
第31図38	J・K3	包含層・盛土	須恵器	坏B		1／2	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(15.9)	9.0	5.4	灰白	①③		図版第13
第31図39	B14・15・C15	包含層・盛土	須恵器	坏B	口縁部	1／3	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(15.9)	(12.0)	6.7	灰	②③		
第31図40	G3・4	包含層	須恵器	坏B		7／12	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(16.0)	(11.85)	5.3	黄灰	①④	外）自然釉付着	
第31図41	G4	包含層	須恵器	坏B		1／4	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(15.9)	(12.3)	6.1	黄灰	①④	外）自然釉付着	
第31図42	E・G3	包含層	須恵器	坏B		1／3	外）回転ヘラ切後粗ナデ　内）ナデ		(10.1)	(5.6)	黄灰	①④		
第32図１	F2	包含層	須恵器	坏B	口縁部	1／4	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(14.9)	(10.4)	5.5	黄灰	①④		図版第13
第32図２	A12・13	包含層	須恵器	坏B		5／12	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(14.9)	(10.6)	5.1	灰	①④		
第32図３	I7・J6	包含層	須恵器	坏B	口縁部	1／6	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(13.9)	(9.8)	5.7	黄灰	①		
第32図４	F5	包含層	須恵器	坏B	口縁部	5／12	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(11.9)	(6.7)	4.0	外）黒 内）灰白	①④	外）自然釉付着	図版第13
第32図５	F3	包含層	須恵器	坏B	口縁部	1／4	外）ナデ　　内）ナデ	12.4	8.8	4.8	黄灰	③		
第32図６	B10	包含層	須恵器	坏B	口縁部	5／12	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(16.4)	(10.3)	5.9	暗オリーブ灰	①		図版第13
第32図７	J3	包含層・盛土	須恵器	坏B		1／2	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(16.0)	(11.65)	5.7	灰	①④		図版第13
第32図８	A16	盛土	須恵器	坏B		1／3	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(11.9)	(7.7)	4.0	灰白	①④		
第32図９	F2・3・G・H2	包含層	須恵器	横瓶		2／5	外）頸-ナデ　体部-タタキ カキメ 内）頸-ナデ　体部-当て具痕 ナデ		(21.0)	(32.5)	暗灰	④⑤		図版第13
第33図１	A・C12	包含層	須恵器	坏B	底部	1／6	外）ナデ　　内）ナデ　底部は磨面		(12.2)	(3.75)	褐灰	⑤	内）転用硯	図版第14
第33図２	J7	包含層	須恵器	坏B	底部	1／6	外）ナデ　　内）ナデ　底部は磨面		11.5	(2.35)	灰	⑤	内）転用硯	図版第14
第33図３	Z15	包含層	須恵器	坏B	底部	1／6	外）ナデ　　内）ナデ　底部は磨面		(8.8)	(1.0)	褐灰	②	内）転用硯	図版第14
第33図４	E4	包含層	須恵器	坏B	底部	1／12	外）回転ヘラ切後ナデ 内）ナデ　底部は磨面		(12.0)	(0.9)	黄灰	⑤	内）転用硯	

図版No.	地区	遺構	種別	器種	部位	残存率	調整・技法・文様など	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調	胎土	備考	写真図版
第33図５	A13	包含層	須恵器	皿	口縁部	1／12	外）ナデ　内）ナデ　底部は磨面		(15.4)	2.7	黄灰	⑤	内）転用硯	
第33図６	C15	盛土	須恵器	皿	底部	1／12	外）回転ヘラ切後ナデ 内）ナデ　底部は磨面		(14.0)	(1.6)	灰白	③	内）転用硯	
第33図７	H7	包含層	須恵器	皿	底部	1／12	外）回転ヘラ切後ナデ 内）ナデ　底部は磨面		(14.0)	(1.5)	灰	①	内）転用硯	
第33図８	A15	包含層	須恵器	皿	底部	1／6	外）回転ヘラ切後ナデ 内）ナデ　底部は磨面		(13.0)	(2.25)	灰黄	⑤	底部外面に墨付着	図版第14
第33図９	I3	包含層	須恵器	皿	底部	1／12	外）回転ヘラ切後ナデ 内）ナデ　底部は磨面		(12.0)	(2.25)	灰	⑤	内）転用硯	図版第14
第33図10	F6	包含層	須恵器	皿	底部	1／12	外）回転ヘラ切後ナデ 内）ナデ　底部は磨面		(16.0)	(0.6)	灰	③	内）転用硯	
第33図11	H5	包含層	須恵器	皿	底部	1／12	外）回転ヘラ切後ナデ 内）ナデ　底部は磨面		(13.0)	(1.45)	灰白	③	内）転用硯	
第33図12	B4	包含層	須恵器	皿	底部	1／12	外）回転ヘラ切後ナデ 内）ナデ　底部は磨面		(12.0)	(1.65)	灰白	③	内）転用硯	
第33図13	I5	包含層	須恵器	皿	底部	1／6	外）回転ヘラ切後ナデ 内）ナデ　底部は磨面		(12.0)	(1.2)	灰	④	内）転用硯	
第33図14	C7	包含層	須恵器	皿	底部	1／12	外）回転ヘラ切後ナデ 内）ナデ　底部は磨面			(0.9)	灰白	⑤	内）転用硯	
第33図15	E5	包含層	須恵器	皿	底部	1／12	外）回転ヘラ切後ナデ 内）ナデ　底部は磨面		(11.0)	(0.75)	灰	②	内）転用硯	
第33図16	J5	包含層	須恵器	皿	底部	1／12	外）回転ヘラ切後ナデ 内）ナデ　底部は磨面		13.0	(1.05)	灰白	③	底部内面に墨付着	
第33図17	H5	包含層	須恵器	皿	底部	1／12	外）回転ヘラ切後ナデ 内）底部は磨面		(10.0)	(1.3)	灰白	④	底部外面に墨付着	
第33図18	H3	包含層	須恵器	皿	口縁部	1／12	外）回転ヘラ切後ナデ 内）ナデ　底部は磨面		(9.0)	(1.6)	灰白	③	内）転用硯	
第33図19	C17	包含層	須恵器	坏A	底部	1／12	外）回転ヘラ切後ナデ 内）ナデ　底部は磨面		(8.0)	(1.7)	黄灰	③	内）転用硯	図版第14
第33図20	G3	包含層	須恵器	皿	底部	1／12	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ			(0.95)	灰白	⑤	外）墨書	図版第14
第33図21	K6	盛土	須恵器	坏A	底部	1／12	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ			(0.6)	黄灰	③	外）墨書	図版第14
第33図22	I5	包含層	須恵器	皿	底部	1／6	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ			(0.8)	灰	⑤	外）墨書	図版第14
第33図23	K6	盛土	須恵器	坏A		1／6	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	14.0	7.2	(3.3)	灰	③	外）墨書	図版第14
第34図１	H4	包含層	土師器	甕		7／10	外）ナデ　ヘラケズリ　内）ナデ	(8.6)		(6.2)	黒褐	③	口縁部から胴部にかけて煤付着	図版第14
第34図２	B10	包含層	土師器	甕	底部	2／5	外）ヘラケズリ　ナデ　内）ナデ		(7.0)	(5.5)	黒褐	②		図版第14
第34図３	E4	包含層	土師器	甕	口縁部	1／8	摩滅のため調整不明	(36.0)		(5.0)	橙	⑤		図版第14
第34図４	H3	包含層	土師器	甕	口縁部	1／6	外）ナデ　内）ナデ	(2.2)		(4.2)	明褐灰	②		
第34図５	E5	包含層	土師器	甕	口縁部 体部	1／6	外）ハケ　ナデ　　内）ハケ　ナデ	(23.8)		(13.3)	にぶい橙	③④		図版第14
第34図６		表土	土師器	甕	口縁部	1／10	外）カキメ後ヘラケズリ　ナデ 内）カキメ　ナデ	(17.6)		(10.9)	明褐灰	③	煤付着 胎土に雲母含む	図版第14
第34図７		表土	土師器	甕	口縁部	1／2	摩滅のため調整不明	(13.4)		(6.5)	橙	③		図版第14
第34図８	H5	包含層	土師器	甕	体部 底部	2／5	外）磨滅のため調整不明　　内）ナデ		5.5	(6.3)	浅黄橙	③④		図版第14
第34図９	F6	包含層	土師器	甕	底部	1／2	外）ナデ後カキメ　　内）カキメ		(6.0)	(4.3)	にぶい橙	③		
第34図10	A13・15・C13	包含層	土師器	鍋	底部	1／4	外）ハケ　内）ハケ	(27.1)		(4.1)	灰	②	外面に煤付着	図版第14
第34図11	A15	包含層	土師器	ミニチュア		11／12	外）磨滅のため調整不明　　内）ナデ	4.7	1.8	2.4	灰白	①		図版第14
第34図12	A5	包含層	土師器	坏A	底部	1／6	外）糸切　　内）ナデ	(11.4)	(5.6)	3.9	黄橙	②		図版第15
第34図13	A13	包含層	土師器	坏A	口縁部	1／3	外）ヘラ切後ナデ　　内）ナデ	(11.8)	(8.0)	3.4	にぶい橙	②		図版第15
第34図14	I6	包含層	土師器	坏A	口縁部	1／2	外）強いナデ　ナデ　　内）ナデ	((11.8)	(10.0)	2.75	にぶい橙	②	赤彩か	図版第15
第34図15	G6	包含層	土師器	坏A	底部	1／12	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ		4.3	1.1	浅黄橙	⑤	内外面ともに赤彩か	図版第15
第34図16	E3	包含層	土師器	坏A	底部	1／2	外）糸切　ナデ　内）ナデ		5.0	(2.15)	灰白	⑤	内）赤彩か	図版第15
第34図17	A4	包含層	土師器	坏A	底部	1／2	外）糸切　ナデ　内）磨滅のため調整不明		(6.2)	(1.9)	灰白	②		
第34図18	B15	包含層	土師器	坏A	底部	1／2	外）ナデ　指押さえ　内）横ナデ	(7.2)	(5.0)	1.35	橙	②		
第34図19	A18	包含層	土師器	坏A	口縁部	1／2	外）ナデ　指押さえ　内）ナデ	(11.6)	(10.4)	2.3	にぶい橙	③		
第34図20	J3	包含層	土師器	甑		1／4	外）ハケ　内）磨滅のため調整不明	(17.4)	(15.0)	15.05	浅黄橙	③		図版第15
第34図21	F6	包含層	土師器	甑	底部	1／3	外）ハケ　ナデ　　内）ハケ		(14.6)	(7.6)	橙	④		図版第15
第34図22	I5	包含層	土師器	甑	口縁部	1／6	外）タタキ後ハケ　ナデ　　内）カキメ	(18.6)		(8.3)	にぶい橙	③		図版第15
第34図23	F6	包含層	土師器	甑	底部	1／6	外）磨滅のため調整不明　　内）ナデ		(15.8)	(10.6)	にぶい橙	③		図版第15
第34図24	I4	盛土	土師器	鉢	口縁部	1／12	外）ナデ　内）ナデ			(6.8)	にぶい橙	①		図版第15
第34図25	N4	包含層	土師器	坏B	底部	1／2	外）ナデ　内）ナデ		(7.0)	(3.4)	浅黄橙	③		

残存率は部位に対する割合とする
口径、底径の復元値を（　）、器高の残存高を（　）で記述する
胎土は①微砂粒（直径１mm以下）を少量含む　②微砂粒を多量に含む　③砂粒（直径１～２㎜）を含む　④小石（直径２㎜以上）を含む　で分けている

２　石器・石製品

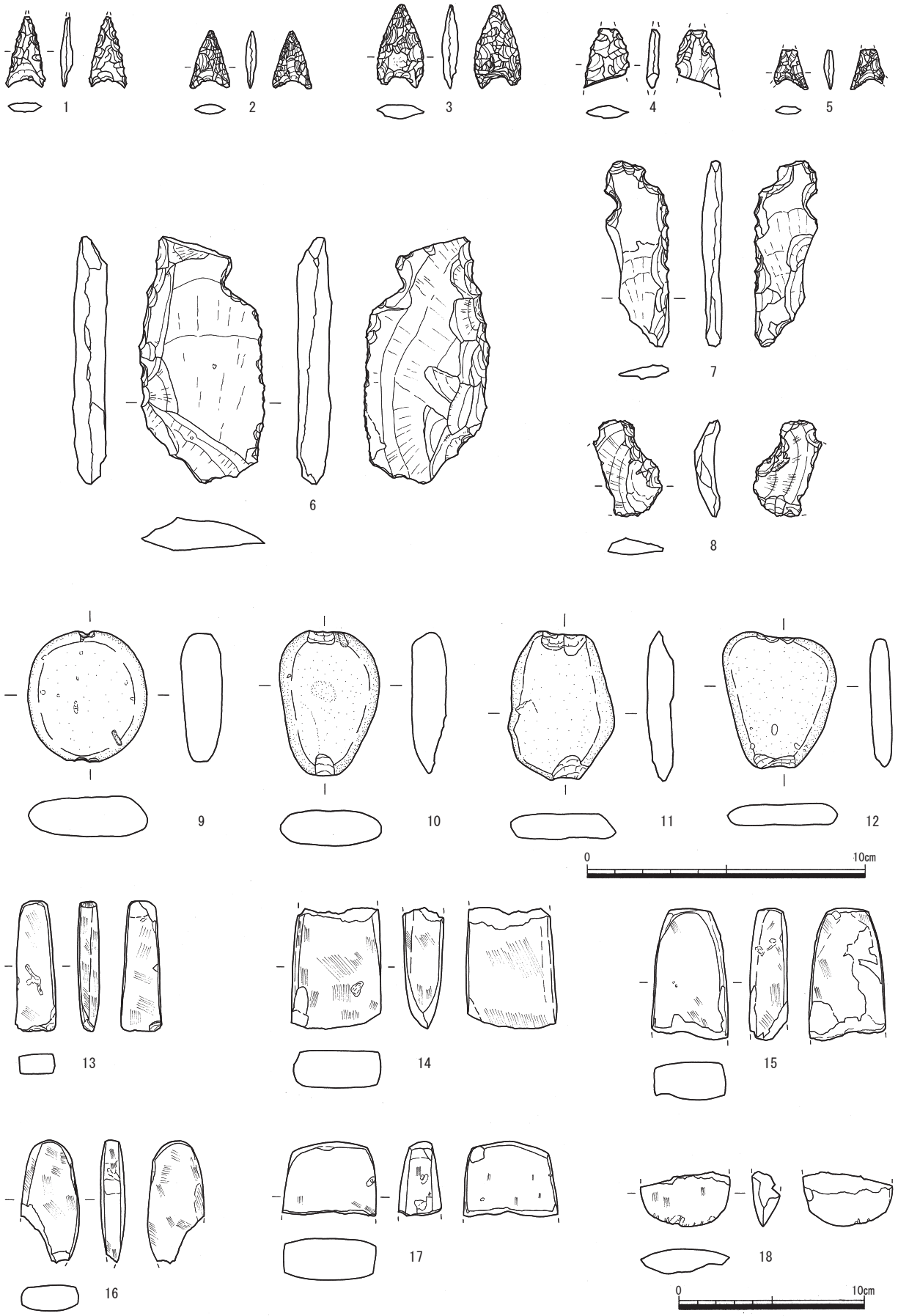
出土した石器・石製品は、総数で63点を数える。ほとんどが包含層から出土しているため、所属時期を明らかにはできないが、一部の砥石を除き、おおむね本遺跡出土の縄文土器に準拠するものと推測される。

石鏃（第36図１～５）　総数で５点を数える。１～３・５は凹基無茎鏃である。１は先端を欠き、整った二等辺三角形を呈する。表面は風化し、灰色を帯びる。綿密な調整剥離が施され、縁辺は鋭い。２は１よりやや短い二等辺三角形を呈する。３は縁辺が丸みを帯びる。４は先端・基部を共に欠き、基部形態は不明だが、三角鏃と判断される。３と同程度の大きさであると推測され、調整はやや粗い。５は先端・かえしの一部を欠き、縁辺が内弯する。１・４は表面の風化状況から、製作よりかなり後に欠損していると見られ、使用による欠損ではないと判断される。

石匙（第36図６～８）　総数で３点を数える。６・７は縦型石匙、８は横型石匙である。６は最大長約９㎝を測る大型品である。直刃を呈し、刃部に調整剥離が施されるが、第一次剥離の割れ口が鋭角であるためか、刃部は縁辺のみを調整するにとどめている。背部は刃部に比べ、粗い剥離が重ねられるが、比較的鋭い縁辺が作出されている。基部はがっしりとしており、抉りは刃部側で明瞭に、背部側では控えめに施される。つまみは刃部に対して傾く。７は直刃を呈し、刃部は入念に調整される。背部は先端付近、抉り、基部周辺が調整される。基部は刃部側・背部側とも明瞭に抉られ、つまみは６と同様に刃部に対して傾く。刃部先端付近に刃部に沿うような剥落があり、使用の痕跡と見られる。８は半分を欠くが、扇形を呈すると推測される。表裏とも同方向から同じ程度の力で打撃・剥離されている。縦断面は弯曲し、刃部は弯曲面の内側のみ、粗い調整剥離が施される。

石錘（第36図９～12）　総数で４点を数える。すべて礫石錘である。扁平な川原石を原石とし、最大長５㎝程度、最大幅４㎝程度で大きさが揃う。打欠はすべて長軸端部２ヶ所に施される。10～12は両面より２～３回の打撃で打欠かれるが、９は礫の端部に垂直に敲打し、敲き潰すように浅い溝が作出される。縄擦れ痕等の明確な使用痕は確認できない。

磨製石斧（第36図13～18）　総数で６点を数える。13は柱状を呈する。14～17は側面が明確な稜線で画される、いわゆる定角式磨製石斧である。18は刃部のみで、全容は不明だが、定角式である可能性が高い。刃部が残存する13・14・18はすべて両刃であり、13は直刃、14はやや偏って緩やかに外弯、18は左右対称に外弯する。どれも丹念に研磨され、自然面や成形時の敲打面を残さない。研磨方向は一定しないが、斜め方向が主である。13・14は側面に擦切分割の痕跡と推測される段を有する。13は石の節理に沿って作出され、刃部が剥落する。折損部の観察から、他のものも同様に石の節理を意識して製作されたことがうかがえる。14・15・17・18は刃部と平行に折損し、使用時と見られる破損の割合が高い。また、18は刃こぼれが見られ、刃部に鋭さがなく、使用感がある。このように折損品が半数以上を占め、使用痕が肉眼で確認できるものもあることから、これらの磨製石斧は当地で使用され、廃棄されたものと判断される。なお、14は刃部の使用痕が肉眼で確認できないため、刃部の研ぎ直しなどの手入れがおこなわれていた可能性がある。刃部が傾くのは刃の研ぎ出しの結果か。



第36図　石鏃・石匙・石錘・磨製石斧実測図（1～12：縮尺1/2、13～18：縮尺1/3）

打製石斧（第37図）　総数で11点を数える。以下、側辺と刃部の形態について、各々の特徴を抽出、それらの組み合わせによる分類を試みた。

①　側辺の形態

A　側辺が基部から刃部まで直線的で、基部と刃部の幅の差が小さいもの

A’　側辺が基部から刃部に向けて弯曲してやや開き、基部と刃部の幅の差が小さいもの

B　側辺が基部から刃部に向けて直線的に開き、基部幅と刃部幅の差が大きいもの

B’　側辺が基部から刃部に向けて弯曲して開き、基部幅と刃部幅の差が大きいもの

②　刃部の形態

Ⅰ　直線的な刃部を持つもの　　Ⅱ　外弯する刃部を持つもの

以上の特徴による分類の内訳は､AⅠ類１点（１）､AⅡ類１点（２）､A’Ⅱ類２点（３・４）､BⅠ類１点（５）、BⅡ類１点（６）、B’Ⅱ類３点（７～９）となった。A’Ⅰ・B’Ⅰ類は出土しておらず、10・11は破損品で、残存部からは全体の形状を把握できないため、分類から省いた。以下、全体の傾向を概括する。

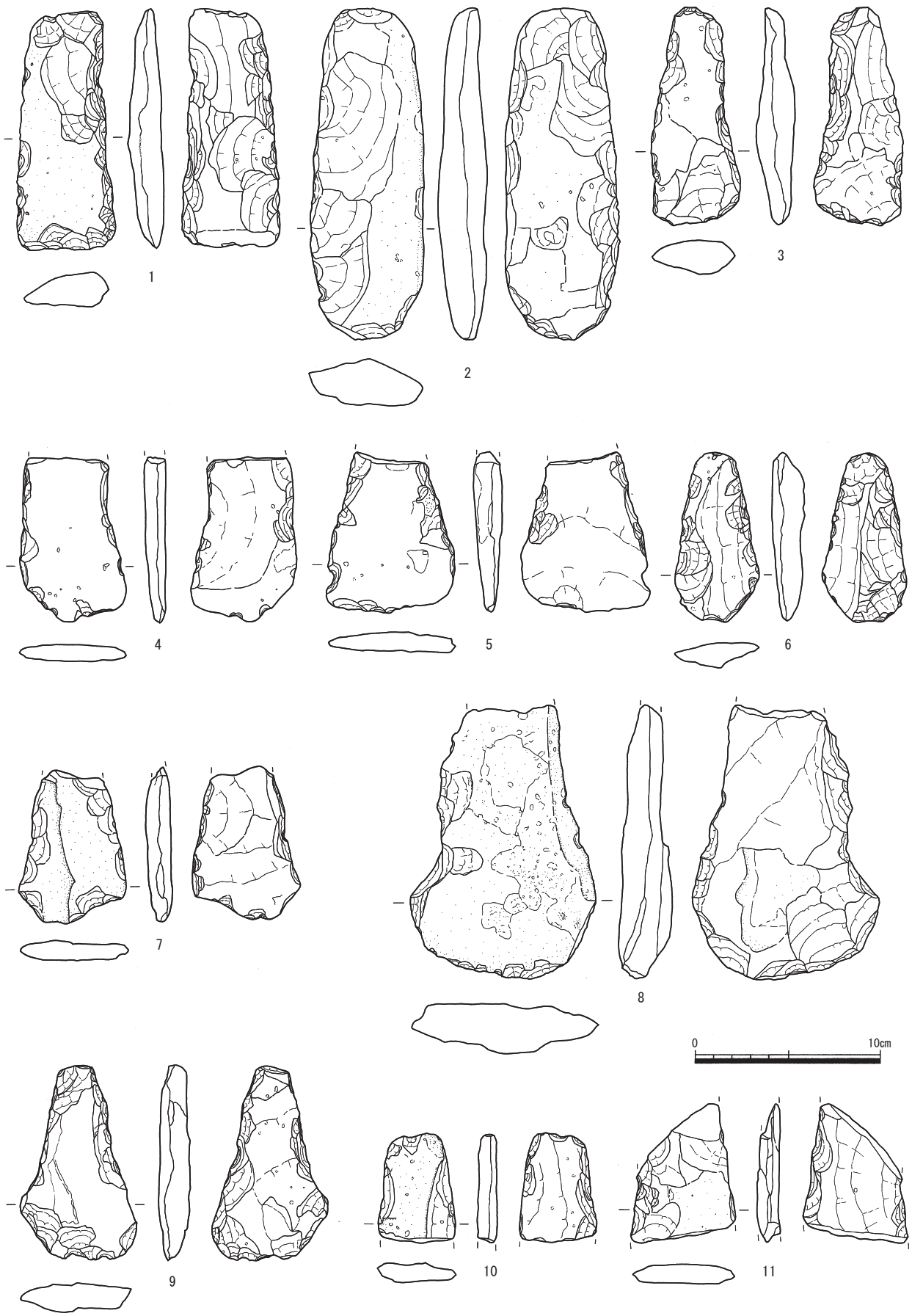
本遺跡出土の打製石斧は、刃部の摩滅が著しいものが多く見られ、磨製石斧と同様に半数以上が刃部と平行に折損している。遺構出土品が皆無であることから、使用後に廃棄されたものが多く含まれていると推測される。

刃部の形態を見ると、Ⅰ類が２点のみと少ない。そのうち、５は直刃を呈するが、第一次剥離面を多く残し、調整剥離は少ない。よって、調整剥離で意図的に直刃を作出するのは１のみとなるが、１の刃部は鈍い光沢を帯びるほどに摩滅しており、製作時の形状を留めていないか、刃部を新たに作出した可能性が指摘できる。つまり、これらの刃部は完成品の具体的なイメージの元に作出されるというより、第一次剥離で得られた鋭い縁辺を、極力そのまま刃部に使用しているものと考えられる。Ⅰ類が少ないのは、第一次剥離で得られる縁辺に直線的なものが少ないためであろう。

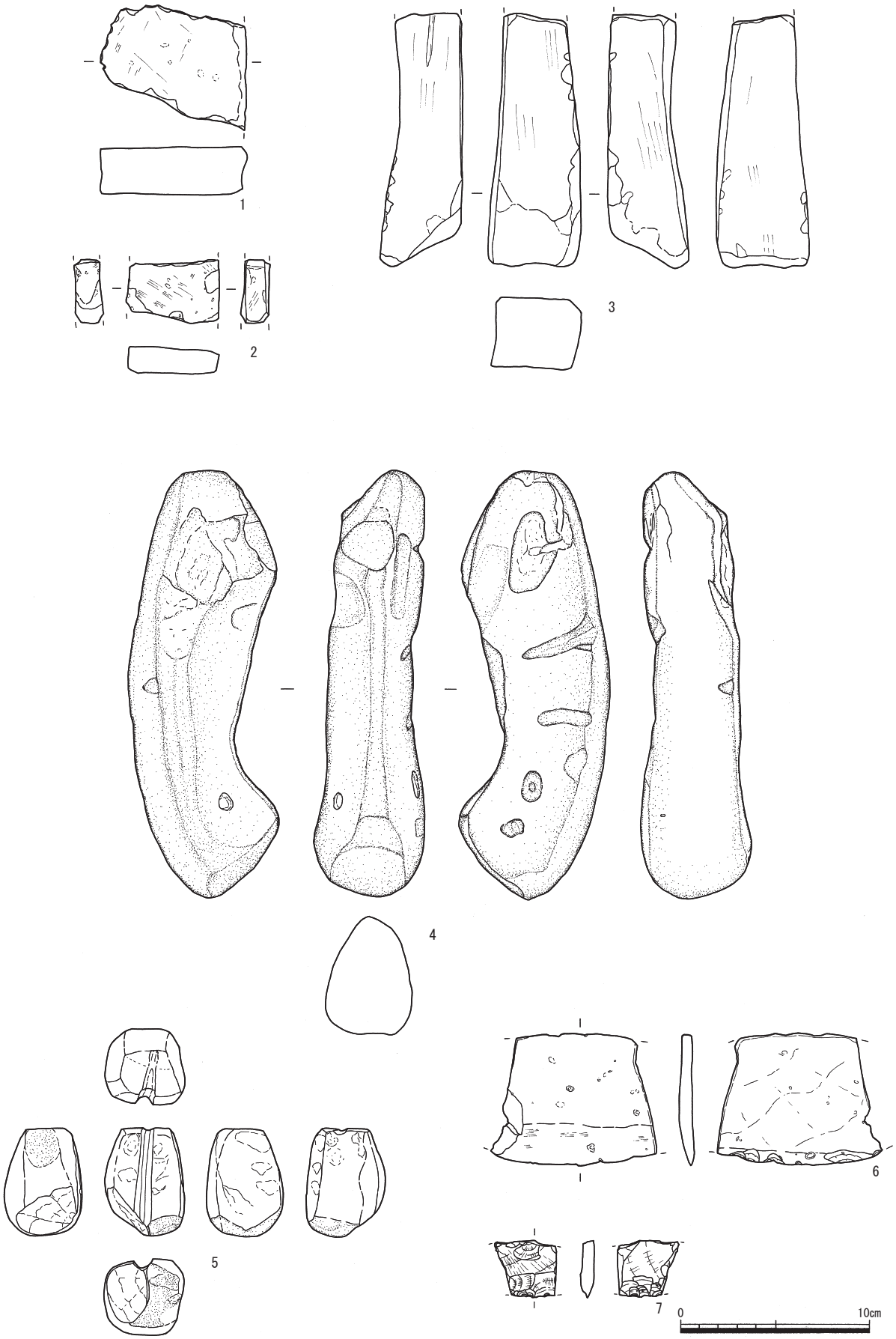
全体の形状を見ると、２や６のように比較的整った形状を呈するものもあれば、３・４・７のように歪なものもある。B’Ⅱ類が若干多いものの、法量を考慮しても、明確な傾向を読み取るのは難しい。７や10のように器厚が薄く脆弱なものや、８のような重厚なものまで、全体の形状はバラエティに富む。

砥石（第38図１～３）　総数で５点を数え、うち３点を図示する。１は一面、２は表面と両側面、３は表・裏・両側面の四面を砥面として使用する。石質から１は仕上砥に近い中砥、２は中砥、３は荒砥とそれぞれ判断される。砥面は１・２が平坦で、３はやや内弯する。１・２は金属を研いだものと見られ、時期が大幅に下る可能性がある。

不明石器（第38図４～７）　総数で４点を数える。４は側面が弓状、断面が三角形を呈する石器である。所々に溝や凹みが見られ、背面には広い平坦部が作出される。敲打痕などの使用痕は認められない。５は翡翠原石の加工品である。長軸に幅５㎜ほどの溝を半周させており、右側面は平担面を作るように研磨している。一部被熱しており、加工の際に熱を加えた可能性がある。何らかの製品を意図して加工を施すも、途中で中断し、敲石に転用したと推測される。敲石転用後に強い打撃が加えられたと見られ、亀裂や大きな剥落が見られる。６は薄い剥片を作り、鋭い一辺に若干調整剥離を施して刃部とした剥片石器である。自然面側には横走する擦痕が見られる。７は剥片の一辺に表裏から調整剥離を施し、刃部を作出した剥片石器である。両端を折損する。



第37図　打製石斧実測図（縮尺1/3）



第38図　砥石・不明石器実測図（縮尺1/3）

磨石類（第39・40図）　総数で25点を数える。いわゆる狭義の磨石・凹石・敲石の特徴をあわせ持つものが含まれるため、それらを総称して磨石類とする。以下、凹み・敲打痕の有無と、表裏・側面の観察により、各々の特徴を抽出、それらの組み合わせによる分類を試みた。

①　凹み・敲打痕の有無

A　凹み・敲打痕を持たないもの　　B　凹みを持つもの　　C　敲打痕を持つもの

D　凹み・敲打痕をあわせ持つもの

②　表裏・側面の形態

Ⅰ　磨面を有し、平坦面を持たず丸みを帯びるもの

Ⅱa　表裏両面、または片面に平坦面を持つもの　Ⅱb　側面に面取りしたような平坦面を持つもの

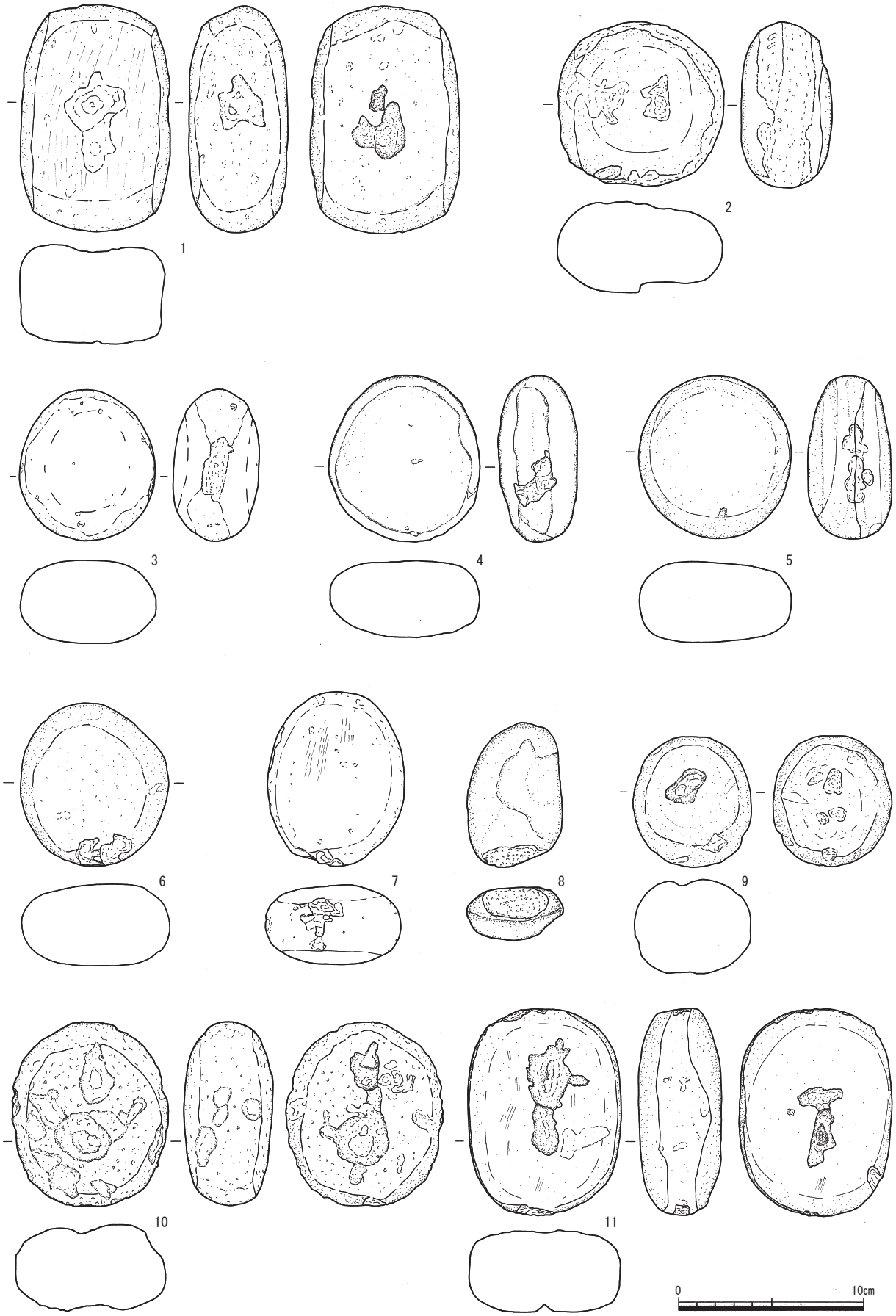
Ⅲ　磨面を持たないもの

以上の特徴による分類の内訳は、AⅠ類４点（第39図１～４）、AⅡa類３点（第39図５～７）、AⅡb類２点（第39図８・９）、BⅠ類１点（第39図10）、BⅡa類２点（第39図11・12）、BⅡb類３点（第39図13・14、第40図１）、CⅡa類６点（第40図２～７）、CⅢ類１点（第40図８）、DⅠ類２点（第40図９・10）、DⅡb類１点（第40図11）である。なお、本分類での凹みとは、意図的に凹みが作出されているものを指し、敲打の結果として凹み状になったものは敲打痕に含める。敲打痕はある程度面的に広がるもののみ取り上げた。Ⅱ類の平坦面はほとんどが磨りの結果によるものだが、素材礫の形状に因るものも若干含まれる。また、Ⅱb類で表裏に平坦面を持たないものは存在せず、Ⅱb類はⅡa類の特徴をあわせ持っている。以下、全体の傾向を概括する。

分類ごとの数量を見ると、凹み・敲打痕の有無については、A～C類で数量に大きな偏りはないが、D類は他に比べて少ない。表裏・側面の形態については、Ⅲ類が１点のみで、磨る機能をほぼすべてのものが持つ。C類は主に側面や上下端面に敲打痕を残し、Ⅱb類はなく、敲打面は平坦にならない。B類はⅡa・Ⅱb類が大半を占め、凹みを作る面は平坦部が好まれる。特に第39図11において、このような傾向が単一の遺物内で見られ、側面を丁寧に面取りし、平滑な表裏面に凹み、上下端面に敲打痕を残している。これらのことから、凹みを面積の広い平坦面に、敲打痕を面積の狭い側面、または上下端面に残す傾向を指摘できる。さらに磨面のほかには、凹みまたは敲打痕のどちらかのみを持つものが大半を占め、磨面・凹み・敲打痕をすべて持つD類は少ない。つまり、本遺跡の磨石類は磨るという機能を基本としながら、一つの道具内で使う部位と使用法を限定しており、明確な目的意識を持って、道具と部位を使い分けているものと推測できる。ここでD類を見ると、第40図９・10は全体を不規則に使用している。機能性を求め、決まった部位を使用するには、単一の道具内では使用法を絞った方がより効果的であると推測されるため、あえて多機能的に使った結果、このように不規則な使用になったのかも知れない。第40図11は例外的に整った敲打痕・凹みをあわせ持つが、大型の礫を使用し、形状を丹念に整えることで、多機能に対応しようという意図が読み取れる。

また、AⅠ類のように本来の礫の形を残すものがある反面、Ⅱb類のように表裏面が必ず平坦になり、本来の礫の形状から大幅に変化しているものもある。これは素材となる礫の形状をそのまま利用するものと、全体の形状を意識して整えるものとに分かれる傾向を示している。上に述べたように、道具の使い分けを考えた場合、全体の形状の違いも機能性の追及を反映した結果と推測されるが、本遺跡には検討に足る資料がないため、ここではその差違を指摘するにとどめる。粉砕具や加工具のセットとされる、石皿や台石の形態をあわせた検討によって、より具体的な様相が明らかになるであろう。

第39図　磨石類実測図（１）（縮尺1/3）



第40図　磨石類実測図（２）（縮尺1/3）

第８表　石器・石製品観察表

遺物№	器種	出土地区	出土遺構	遺存状態	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	石材	備考	挿図№
1	石鏃	K5	包含層	先端欠	(25.2)	13.8	(4.5)	(1.09)	石英安山岩	無茎凹基三角形	第35図１
2	石鏃	K5	包含層	完形	20.8	14.1	3.8	0.76	チャート	無茎凹基三角形	第35図２
3	石鏃	E2	盛土	完形	30.0	16.8	5.2	2.56	チャート	無茎凹基三角形	第35図３
4	石鏃	I6	包含層	先端・基部欠	(21.2)	(15.2)	(4.2)	(1.50)	石英安山岩	三角形	第35図４
5	石鏃	E3	包含層	先端・基部欠	(14.3)	(12.2)	3.6	(0.46)	不明	無茎凹基三角形	第35図５
6	石匙	F3	包含層	完形	89.0	43.6	12.0	52.75	頁岩	縦型	第35図６
7	石匙	I5	包含層	完形	67.0	22.5	6.5	10.80	頁岩	縦型	第35図７
8	石匙	J4	包含層	欠	35.0	(20.5)	6.0	(5.10)	頁岩	横型	第35図８
9	礫石錘	H3	包含層	完形	47.0	43.0	14.5	48	安山岩	長軸端部両側を打欠く	第35図９
10	礫石錘	J3	盛土	完形	52.1	35.9	12.5	32	安山岩	長軸端部両側を打欠く	第35図10
11	礫石錘	K4	盛土	完形	53.0	38.8	9.0	31	砂岩	長軸端部両側を打欠く	第35図11
12	礫石錘	A9	包含層	完形	49.5	40.5	7.8	27	砂岩	長軸端部両側を打欠く	第35図12
13	磨製石斧	F6	包含層	刃部欠	(70.2)	22.1	11.5	(30)	蛇紋岩	柱状	第35図13
14	磨製石斧	D2	包含層	基部欠	(64.5)	48.0	(22.1)	(129)	蛇紋岩	定角式	第35図14
15	磨製石斧	A4	包含層	刃部欠	(71.0)	(40.9)	(20.5)	(119)	蛇紋岩	定角式	第35図15
16	磨製石斧	C3	包含層	刃部欠	(66.2)	31.7	13.5	(46)	蛇紋岩	定角式	第35図16
17	磨製石斧	H4	包含層	刃部欠	(37.8)	(50.8)	(23.0)	(69)	花崗岩	定角式	第35図17
18	磨製石斧	H3	包含層	基部欠	(28.2)	(49.2)	(14.2)	(28)	蛇紋岩	定角式？	第35図18
19	打製石斧	B10	包含層	完形	118.0	53.2	18.5	140	不明	ＡⅠ 刃部は使用によって光沢を帯びる	第36図１
20	打製石斧	B14	包含層	完形	178.0	61.8	26.1	340	不明	ＡⅡ かなり摩滅する	第36図２
21	打製石斧	－	表採	完形	116.1	46.8	19.8	100	不明	A'Ⅱ かなり摩滅する	第36図３
22	打製石斧	H4	包含層	基部欠	(88.5)	57.0	11.0	(69)	不明	A'Ⅱ 摩滅する 刃部の調整剥離は少ない	第36図４
23	打製石斧	H6	包含層	基部欠	(82.0)	67.5	15.0	(91)	不明	ＢⅠ 摩滅する 刃部の調整剥離は少ない	第36図５
24	打製石斧	E6	包含層	完形	90.1	45.5	17.9	62	不明	ＢⅡ 摩滅する	第36図６
25	打製石斧	G5	包含層	基部欠	(82.5)	58.0	13.0	(61)	不明	B'Ⅱ 刃部の調整剥離は少ない	第36図７
26	打製石斧	A20	包含層	基部欠	(145.5)	100.0	27.0	(328)	不明	B'Ⅱ	第36図８
27	打製石斧	E1	包含層	完形	102.2	59.1	16.0	105	不明	B'Ⅱ かなり摩滅する	第36図９
28	打製石斧	D3	包含層	刃部欠	(58.5)	(41.5)	1.05	(31)	不明	形態不明 摩滅する	第36図10
29	打製石斧	H5	包含層	刃部・基部欠	(69.5)	(55.0)	10.5	(45)	不明	形態不明	第36図11
30	砥石	B15	包含層	欠	(55.2)	(77.2)	25.0	(198)	凝灰岩	中砥	第37図１
31	砥石	I7	包含層	欠	(31.8)	48.8	14.8	(29)	凝灰岩	中砥	第37図２
32	砥石	B10	包含層	両端欠	(133.0)	48.8	39.5	(371)	砂岩	荒砥	第37図３
33	砥石	C15	盛土	破片	(40)	(24.5)	(14.5)	(18)	凝灰岩	中砥	—
34	砥石	K5	盛土	破片	(24.5)	(23.5)	10.0	(8)	凝灰岩	中砥	—
35	不明石器	B3	包含層	完形	224.5	59.0	68.2	840	不明		第37図４
36	不明石器	A3	撹乱	一部欠	57.8	40.5	40.0	(179)	翡翠	研磨による溝が半周する 敲石に転用	第37図５
37	不明石器	F2	包含層	両端欠	69.0	(87.0)	6.5	(59)	石英安山岩	不定刃器	第37図６
38	不明石器	H3	包含層	両端欠	30.0	(31.5)	3.8	(11.9)	石英安山岩	削器か	第37図７
39	磨石類	A9	p275	完形	97.0	91.0	63.0	819	不明	ＡⅠ類　狭義の磨石	第38図１
40	磨石類	J3	包含層	完形	92.0	73.0	46.0	389	不明	ＡⅠ類　狭義の磨石	第38図２
41	磨石類	－	表採	完形	95.0	78.0	52.0	479	不明	ＡⅠ類　狭義の磨石	第38図３
42	磨石類	C12	包含層	完形	79.5	72.0	50.5	403	不明	ＡⅠ類　狭義の磨石	第38図４
43	磨石類	A3	撹乱	完形	121.0	102.0	48.0	891	安山岩	ＡⅡa類　狭義の磨石	第38図５
44	磨石類	A10	包含層	完形	103.0	94.0	64.0	869	不明	ＡⅡa類　狭義の磨石	第38図６
45	磨石類	C2	縄文土器集中区	完形	110.0	89.0	58.0	689	不明	ＡⅡa類　狭義の磨石	第38図７
46	磨石類	A3	撹乱	完形	104.0	88.0	41.5	571	不明	ＡⅡb類　狭義の磨石	第38図８
47	磨石類	Z20	盛土	完形	93.5	78.0	35.0	410	不明	ＡⅡb類　狭義の磨石	第38図９
48	磨石類	H6	包含層	完形	87.5	76.0	40.0	320	デイサイト	ＢⅠ類	第38図10
49	磨石類	B3	包含層	完形	84.0	68.0	46.0	410	デイサイト	ＢⅡa類	第38図11
50	磨石類	F2	包含層	完形	100.5	90.5	38.0	532	デイサイト	ＢⅡb類	第38図12
51	磨石類	A3	撹乱	欠	(61)	70.0	31.0	(199)	不明	ＢⅡb類	第38図13
52	磨石類	C2	包含層	欠	(135.0)	(70.5)	(18.5)	(209)	不明	ＢⅡb類	第38図14
53	磨石類	－	表採	完形	123.0	81.0	53.0	818	不明	ＢⅡb類	第39図１
54	磨石類	A10	包含層	完形	90.0	89.0	49.0	580	不明	ＣⅡa類	第39図２
55	磨石類	G4	p107	完形	81.5	73.0	45.0	319	不明	ＣⅡa類	第39図３
56	磨石類	C12	包含層	完形	89.0	81.0	41.0	419	不明	ＣⅡa類	第39図４
57	磨石類	A2	包含層	完形	88.0	82.0	45.0	450	不明	ＣⅡa類	第39図５
58	磨石類	A12	包含層	完形	88.0	80.0	45.0	471	デイサイト	ＣⅡa類	第39図６
59	磨石類	A10	包含層	完形	95.5	73.0	42.0	434	不明	ＣⅡa類	第39図７
60	磨石類	D3	縄文土器集中区	完形	76.0	52.0	27.0	116	不明	ＣⅢ類　狭義の敲石	第39図８
61	磨石類	F3	包含層	完形	70.5	63.5	50.5	305	不明	ＤⅠ類	第39図９
62	磨石類	C3	盛土	完形	99.0	84.5	47.5	490	不明	ＤⅠ類	第39図10
63	磨石類	－	表採	完形	111.0	83.0	44.5	641	不明	ＤⅡb類	第39図11

第４節　まとめ

今回の調査成果から、本遺跡は基本的に９世紀代を主体時期とした集落跡と判断される。以下、遺構・遺物の内容を検証し、遺跡の性格を考察する。

１　遺構

調査区の広範囲に削平が及んでいるため、遺構から当時の状況を想定するのは困難である。掘立柱建物はいずれも小規模で、群を形成するような状況は見て取れない。旧地形が緩やかな尾根と谷が幾重にも入り組んだ起伏地形であったことから、当調査区は集落の縁辺部であり、集落の中心部はやはり現在の上吉野集落に相当するものと推測される。当初は狭小な平坦地を選んで、点々と建物を設営していたが、やがて耕作地の拡大に伴い、尾根を削り、谷を埋めて、平坦面を造り、徐々に水田へと整備していったと考えられる。

２　遺物

遺物については、多くが古代の土器であり、その所属時期は９世紀代が中心となるものと考えられる。その内容は煮沸具や貯蔵具の比率が低い一方、供膳具や特殊な遺物が目立ち、一般の集落とは異なる様相を見せている。特に墨書土器（第33図20）の「寺」の字や転用硯の存在は、当時の識字層である僧侶の関与を示唆し、当地に寺院およびその関連施設が成立していた可能性をうかがわせるものである。この点については、上吉野集落の旧名「印内」や当地の字名「法善田」などから、すでに言及はしているが、遺物という具体的物証が得られたのは大きな成果である。さらに、上吉野集落を麓に控える吉野ヶ岳山頂の蔵王堂周辺で、当遺跡の主体時期と同じ９世紀代の須恵器片が採集されている事実[1]も考慮すれば、９世紀代に吉野ヶ岳およびその山麓が宗教施設として一体に機能していた状況も想定され、その意味でも今回出土した土器の資料的価値は重要と言える。

一方、他所からの流入遺物と見られる縄文土器や石器類については、古代集落との直接の関連性は無論見出せないが、縄文時代中期前葉を主体時期とする集落が近隣に存在していたことを雄弁に物語っている。具体的には、やはり南隣する上吉野集落の位置する小谷部に存在していた可能性が非常に高いと考えられる。吉野の谷の中は、山地に囲まれた狭隘な地を川が谷を刻みながら流れており、山と川が非常に近接した地形である。自然の様々な資源を採集・活用していた縄文時代の人々にとっては、小規模ながら非常に居住に適した生活環境であったのではなかろうか。

３　遺跡

当調査区は寺院を中心に展開する集落の縁辺部か、もしくはその影響下にあった周辺集落の遺跡と考えられる。第２章でも触れたように、旧上吉野集落、すなわち印内集落にかつて僧坊七坊があったとされることについては、これまでは伝承や文献といった文字史料でしか知り得なかったが、今回得られた出土遺物から、吉野ヶ岳も包括した宗教施設、おそらく山岳寺院とも呼べる施設の存在が間接的ながら推察され、その初源が少なくとも９世紀代まで遡れることも判明した。

吉野ヶ岳を含め、かつての「院内」が白山信仰の影響下にあったことは、地勢的に見ても必然と言えよう。白山は越前のみならず日本屈指の霊峰であり、越前五山の中でもあらゆる意味において別格の存在である。そのため、白山以外の四山は白山の代替地として機能していたとも言われる[2]。そこに見出せるのは、やはり白山に対する深い崇敬と憧憬であろう。その意味で、吉野ヶ岳と白山信仰は当地の歴史を構成する重要な要素であり、当地の歴史を理解する上での貴重な手掛かりでもある。

『白山縁起』によれば、白山は養老三年（719）七月、泰澄によって開かれ、天長九年（832）には、登山道として三方馬場（越前禅定道、加賀禅定道、美濃禅定道）が開かれたとあるが、文献史料などから、この９世紀代ごろに白山へ登山する者はごく少数の苦行僧のみであったと推測される[3]。一方、考古学的史料については、白山山頂で９世紀末から10世紀の土器が初源的に見つかっており[4]、文献史料による推測とおおむね符合している。いずれにせよ、９世紀代においては、大多数の一般民衆にとって白山は未だ遥か彼方に崇めるほかない聖地であったという事実に変わりはないだろうが、同時にその信仰が中央の仏教勢力にも徐々に浸透し始め、ごく一部ではあったが山頂を目指す苦行僧も現われてきた、というのもまた事実であろう。つまり、９世紀代とはやがて来る白山信仰の普遍化・大衆化[5]への胎動が始まる時期とも言えよう。そして、まさにその時期に吉野ヶ岳と山麓寺院を中核とした宗教活動の痕跡が見られるというのは、非常に興味深い象徴的な符合に思える。

註

１　第２章第２節参照。

２「雲にそびえる白山は、泰澄の開いた修験道の、練行の道場とされているが、道なき原生自然の山奥に深く分け入って、この尾山に登拝することは、古代・中世の頃は容易なことではなかった。五山はこのお山に代わる平常の練行の道場としての、一面も買っていた山であると云われている」（野村2002　26頁）。ただし、越前五山の中でも、越知山は泰澄が修行を開始し、晩年に入寂した地ということで、白山とは別の意味で神聖視されている。

３「『日本三大実録』巻45の元慶８年３月26日の宗叡の卒伝によると、宗叡（809～884）は、師の円珍に随い園城寺で両部大法を受けたが、そのとき比叡山の神が苦行を擁護すると約束した。その後、越前国白山に登ったとき、告げられたように双鳥が先後に飛び随い、夜中は火が自然に路を照らしたという。（中略）また、天台座主尊意の幼年の師であった僧賢一は栂尾寺の苦行僧であったが、元慶２年（878）越州白山に入るので、いつ再会できるかわからないと、薬師像を置いて出かけたという（『尊意贈僧正伝』群書213）」（椙山 2003　89頁）。

４　國學院大學考古学資料館の調査による（椙山 2003　90頁）。

５「寛弘２年（1005）、上道氏吉が国司庁宣により、はじめて白山本宮検校職に補任された（『神官上道家系譜』）。また寛仁元年（1017）10月２日、『左経記』に見える大祓の記事に、延喜式の名神祭に加えられなかった加賀白山が奉幣の対象に加わっている。こうして白山の地位の上昇している状況から見ると、苦行僧に案内された民衆の登拝もこの頃には盛んとなり、室堂の設備もできてきたものと思われる」（椙山 2003　90頁）。

参考文献

野村英一　2002「Ⅱ－５．越前五山の尊像」『地方作仏教尊像の研究　若狭・越前の秘仏』　25～38頁
椙山林継　2003「白山山頂出土遺物と白山信仰」『山岳信仰と考古学』　山の考古学研究会　同成社　87～110頁

第５章　湯谷砂田遺跡

第１節　概要〔図版第16、第41・42図〕

１　地形と層序

湯谷砂田遺跡は吉野の谷幅が狭まる荒川右岸の狭長な谷底平野および小段丘上に立地する。今回の調査区は南北の２区画に分かれ、北調査区が農道部分、南調査区が水田部分に相当し、中間の空白部は排水路である（第41図）。昭和初期に調査区西側の県道を開削した際、調査区周辺に張り出していた尾根を切り落としたため、北調査区全域と南調査区北東部（溝１・３より北側、トレンチより東側）に、地山層の露出した平坦面が見られる。全体の規模は東西27m、南北29m、総面積512㎡を測る。

遺構検出面は地山層の露出した平坦面と遺物包含層を残す緩斜面に分かれ、平坦面は削平された旧尾根部に、緩斜面は旧尾根裾部にそれぞれ相当すると推測される。平坦面の標高は75.60～75.70m、緩斜面部分の標高は74.60～75.20mで、全体として北西方向へ緩やかに下降している。

標準層序は以下の３層に大別される（第42図）が、猪谷田畑・上吉野法善田の２遺跡とは異なり、粘性のやや弱い砂質土が主体である。

Ⅰ層：褐灰色シルトで構成される遺物包含層（包含層１）。しまりは強く、遺物は少ない。

Ⅱ層：褐灰色土で構成される遺物包含層（包含層２）。しまりはやや弱く、遺物は多い。

Ⅲ層：暗灰褐色～黄茶褐色土で構成される地山層。いわゆる山土であり、砂や砂利・大小の礫が多く混入する。山側では特に鉄分を多く含み、赤っぽい。ただし、尾根裾部では粘性の強い灰色系の土が主体である。

当初はⅠ・Ⅱ層を遺物包含層と定めて掘削作業を進めたが、出土する土器の大半が表面の摩滅した細片で、山土を主体とした盛土や多量の礫、ごく最近の木杭などのごみも混入していた。その後、遺構調査に着手すると、遺構（特に溝の）覆土はⅠ・Ⅱ層の土質とは全く異なり、遺物の状態もⅠ・Ⅱ層のそれよりも総じて良好であることも判明した。

以上の状況から、Ⅰ・Ⅱ層はいわゆる自然堆積による遺物包含層ではなく、過去の圃場整備の際に、近隣の遺跡を削平して搬入した客土と判断される。なお、本来の遺物包含層の堆積が乏しいことについては、当地が緩やかな傾斜地形で川に近接していることや、当地の土が粘性の弱い砂質土主体であることを考慮すると、例えば降雨や川の氾濫などの自然作用に容易に影響され、土壌が堆積・定着しにくかったものと推定される。

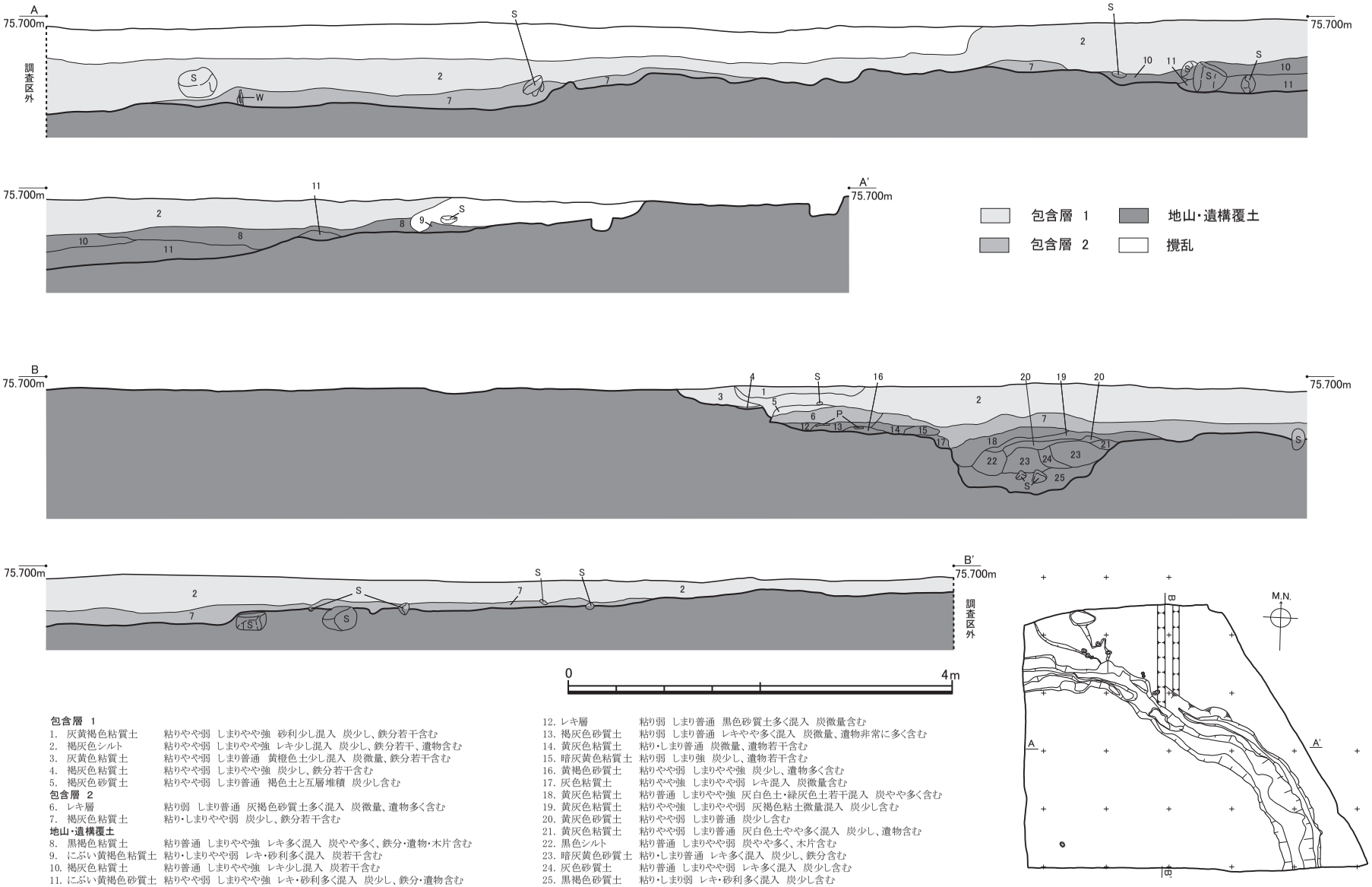
２　遺構検出状況

検出した遺構は、溝、土坑・ピットである（第41図）。基本的に遺物の得られた遺構のみ、遺構ごとの通し番号を付したが、その総数は溝３条、土坑１基をそれぞれ数える。遺構密度は低く、特に通常は多く検出される土坑・ピットなどは非常に少ない。実質、遺構は溝のみと言って良い状況である。

３　遺物出土状況

出土遺物は大型コンテナで60箱分を得た。調査面積に比して、遺物量は非常に多い。内訳のほぼすべてが古代の土師器・須恵器で、越前焼などの中世土器が若干と、石器がわずかに含まれる。前記のように土器には細片が多く、特にほとんどの土師器は表面が摩滅しており、ある程度の形状まで復元し得た資料は、遺物量に比して非常に少ない。

第41図　湯谷砂田遺跡　遺構全体図（縮尺1/200）



包含層 1
1. 灰黄褐色粘質土　粘りやや弱　しまりやや強　砂利少し混入　炭少し、鉄分若干含む
2. 褐灰色シルト　粘りやや弱　しまりやや強　レキ少し混入　炭少し、鉄分若干、遺物含む
3. 灰黄色粘質土　粘りやや弱　しまり普通　黄橙色土少し混入　炭微量、鉄分若干含む
4. 褐灰色粘質土　粘りやや弱　しまりやや強　炭少し、鉄分若干含む
5. 褐灰色砂質土　粘りやや弱　しまり普通　褐色土と互層堆積　炭少し含む

包含層 2
6. レキ層　粘り弱　しまり普通　灰褐色砂質土多く混入　炭微量、遺物多く含む
7. 褐灰色粘質土　粘り・しまりやや弱　炭少し、鉄分若干含む

地山・遺構覆土
8. 黒褐色粘質土　粘り普通　しまりやや強　レキ多く混入　炭やや多く、鉄分・遺物・木片含む
9. にぶい黄褐色粘質土　粘り・しまりやや弱　レキ・砂利多く混入　炭若干含む
10. 褐灰色粘質土　粘り普通　しまりやや強　レキ少し混入　炭若干含む
11. にぶい黄褐色砂質土　粘りやや弱　しまりやや強　レキ・砂利多く混入　炭少し、鉄分・遺物含む
12. レキ層　粘り弱　しまり普通　黒色砂質土多く混入　炭微量含む
13. 褐灰色砂質土　粘り弱　しまり普通　レキやや多く混入　炭微量、遺物非常に多く含む
14. 黄灰色粘質土　粘り・しまり普通　炭微量、遺物若干含む
15. 暗灰黄色粘質土　粘り弱　しまり強　炭少し、遺物若干含む
16. 黄褐色砂質土　粘りやや弱　しまりやや強　炭少し、遺物多く含む
17. 灰色粘質土　粘りやや強　しまりやや弱　レキ混入　炭微量含む
18. 黄灰色粘質土　粘り普通　しまりやや強　灰白色土・緑灰色土若干混入　炭やや多く含む
19. 黄灰色粘質土　粘りやや強　しまりやや弱　灰褐色粘土微量混入　炭少し含む
20. 黄灰色砂質土　粘りやや弱　しまり普通　炭少し含む
21. 黄灰色粘質土　粘りやや弱　しまり普通　灰白色土やや多く混入　炭少し、遺物含む
22. 黒色シルト　粘り普通　しまりやや弱　炭やや多く、木片含む
23. 暗灰黄色砂質土　粘り・しまり普通　レキ多く混入　炭少し、鉄分含む
24. 灰色砂質土　粘り普通　しまりやや弱　レキ多く混入　炭少し含む
25. 黒褐色砂質土　粘り・しまり弱　レキ・砂利多く混入　炭少し含む

第42図　湯谷砂田遺跡　調査区土層断面図（縮尺1/60）

第２節　遺構〔図版第17、第41・43図、第９表〕

本節では、特に主要な遺構を中心に記述する。なお、各遺構の規模（長さ･幅･深さなど）や方位（角度）についての数値は、すべて遺構検出面を基準として、測量図上で測定・算出した概算値である。

溝１（第41・43図）　Ａ４・５区からＤ０区にかけて検出した。総延長30.20m、幅1.50～2.50m、深さ0.18～0.40m、底面の標高74.20～75.20mをそれぞれ測る。溝の方向は多少曲折するが、全体としては南（N13° W）から徐々に北西（N40°～53° W）へ円弧を描くように伸長し､西端でほぼ西（荒川の方向）を向く。溝底は自然地形とほぼ同様に北西方向へ緩やかに下降するが、Ｃ・Ｄ２区以西では中央が薬研状に掘り込まれ、勾配も若干きつくなっている。

溝の軌跡が旧尾根の外縁に沿いつつ荒川へ向かっているところから、尾根裾を流れる小川のような自然流路に手を加えて、水路として活用したものと推測される。また、前節でも若干触れたが、覆土には小礫や砂利・砂が多く混じり、遺物量も格段に多いが、土器片の表面はあまり摩滅していない。このことから、溝の上流で廃棄された遺物が当地まで流入・堆積した状況、すなわち標高の高い南方にこれらの遺物を使用・廃棄した集落が存在する可能性を指摘できよう。

溝２（第41・43図）　Ｄ・Ｅ０～１区で検出した。総延長6.50m、幅0.70～3.20m、深さ0.18m、底面の標高74.70～74.80mをそれぞれ測り、方位はN50° Wを向く。土坑１と切り合い、土坑１に先行する。

外形が歪で、浅皿状の土坑が２基連結しているように見えるが、底面に明瞭な高低差や切り合いも確認し得なかったため、調査時は暫定的に溝とした。遺物がほとんど得られていないことから、おそらく自然地形の緩斜面に形成された水溜まりの痕跡と推測される。

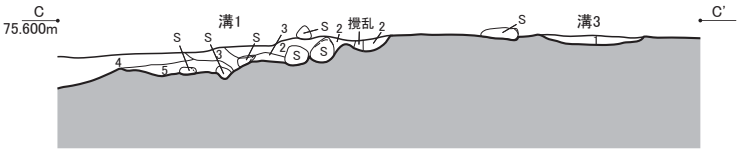
溝３（第41・43図）　Ａ５区からＣ３区にかけて検出した。総延長19.30m、幅0.50～1.10m、深さ0.06～0.14m、溝底の標高75.30～75.40mをそれぞれ測る。溝１の右岸に併行しつつ、ほぼ同様の軌跡（N８°～29°～68° W）を辿るが、削平のためか途中で途切れている。覆土の切り合いで溝１→溝３の先後関係が成り立つことから、溝１が埋没した後に形成された小規模な流路の可能性が想定できるが、自然か人工かは判断できない。

土坑１（第41・43図）　Ｅ１区で検出した。長径2.10m、短径1.30m、深さ0.18mをそれぞれ測り、方位はN85° Wを向く。前述のとおり、溝２が埋没した後に形成されているが、やはり遺物がほとんど得られていないところから、これも自然に形成された水溜まりの痕跡と推測される。

第９表　主要溝・土坑一覧表

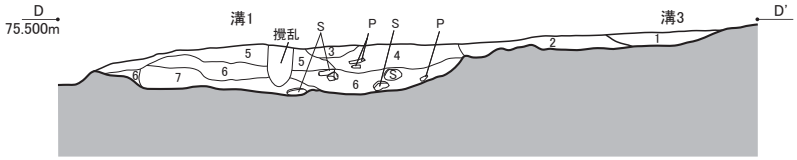
遺構名	地区	平面形	方位	平面規模（m） 長さ×幅（最大値）	深さ （m）	出土遺物	備考	挿図№
溝１	A4･5～ D0	円弧形	N13° W～ N40° W ～ N53° W～ EW	30.20×2.50	0.40	土師器等	下流部薬研状	第40･42図
溝２	D･E0～1	不定形	N50° W	6.50×3.20	0.18		水溜まりの跡か	第40･42図
溝３	A5～ C3	円弧形	N8° W～ N29° W ～ N68° W	19.30×1.10	0.14	土師器等	途切れる	第40･42図
土坑１	E1	長楕円形	N85° W	2.10×1.30	0.18		溝2と切り合う	第40･42図

※平面規模・深さはすべて概算値



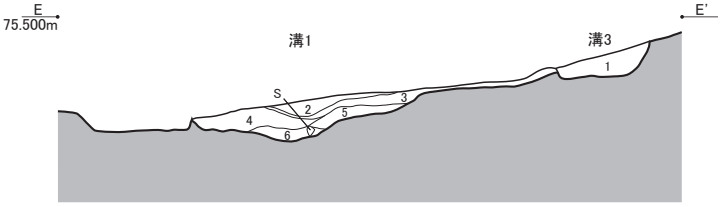
溝1・溝3(C-C')

溝3
1. 黒褐色粘質土　粘りやや弱　しまりやや強　炭少し含む
溝1
2. 黒褐色粘質土　粘りやや弱　しまりやや強　レキ混入　炭やや多く含む
3. 褐灰色粘質土　粘りやや強　しまり普通　レキ混入　炭若干含む
4. 赤橙色砂質土　粘りやや弱　しまりやや強　レキ多く混入



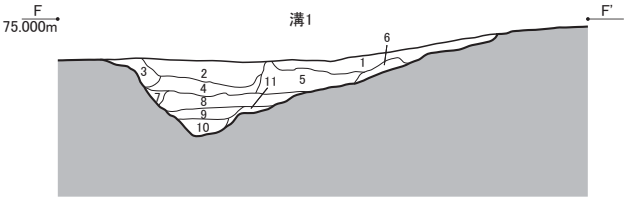
溝1・溝3(D-D')

溝3
1. 黒褐色粘質土　粘りやや弱　しまり普通　レキ多く混入　炭やや多く、遺物含む
溝1
2. 黒褐色粘質土　粘りやや弱　しまりやや強　レキ混入　炭やや多く含む
3. 黄灰色粘質土　粘りやや弱　しまりやや強　炭少し含む
4. 青黒色粘質土　粘り普通　しまりやや強　レキ混入　炭・遺物多く含む
5. 灰色砂質土　粘りやや弱　しまりやや強　炭やや多く、遺物多く含む
6. 暗灰黄色砂質土　粘り・しまりやや弱　レキ混入　炭若干、遺物多く含む
7. 黒褐色砂質土　粘りやや弱　しまり普通　レキ多く混入　炭若干含む



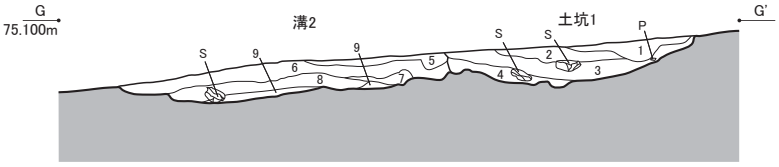
溝1・溝3(E-E')

溝3
1. 黒褐色粘質土　粘りやや弱　しまり普通　レキ多く混入　炭微量、遺物含む
溝1
2. 褐灰色シルト　粘りやや弱　しまり普通　レキ混入　炭やや多く、遺物・木片多く含む
3. 黄橙色粘質土　粘り・しまり普通　にぶい黄色土若干混入　炭微量含む　地山の崩落か
4. 暗赤褐色シルト　粘り・しまりやや弱　褐灰色土と互層堆積　レキ多く混入　炭若干含む
5. 明黄褐色粘質土　粘り・しまり普通　灰黄色土と互層堆積　炭若干含む
6. 黒褐色砂質土　粘り・しまりやや弱　レキ多く混入　炭微量含む



溝1(F-F')

溝1
1. 黄灰色粘質土　粘り普通　しまりやや強　レキ混入　炭少し含む
2. 褐色粘質土　粘りやや弱　しまりやや強　レキ多く混入　炭やや多く含む
3. 褐灰色粘質土　粘りやや弱　しまりやや強　炭若干、鉄分多く、遺物含む
4. 黄灰色粘質土　粘り・しまり普通　レキ混入　炭若干、木片含む
5. 黒褐色粘質土　粘りやや強　しまり普通　炭やや多く含む
6. 黒褐色粘質土　粘り・しまりやや強　炭少し含む
7. にぶい赤褐色砂質土　粘りやや弱　しまりやや強　炭若干、鉄分多く含む
8. 暗灰黄色砂質土　粘りやや弱　しまりやや強　砂利多く、レキ混入　炭少し含む
9. 黄褐色粘質土　粘り普通　しまりやや強　炭微量、遺物含む
10. 灰黄褐色粘質土　粘りやや弱　しまり普通　レキ混入　炭少し含む
11. 褐灰色砂質土　粘りやや弱　しまり普通　レキ混入　炭少し含む



土坑1・溝2(G-G')

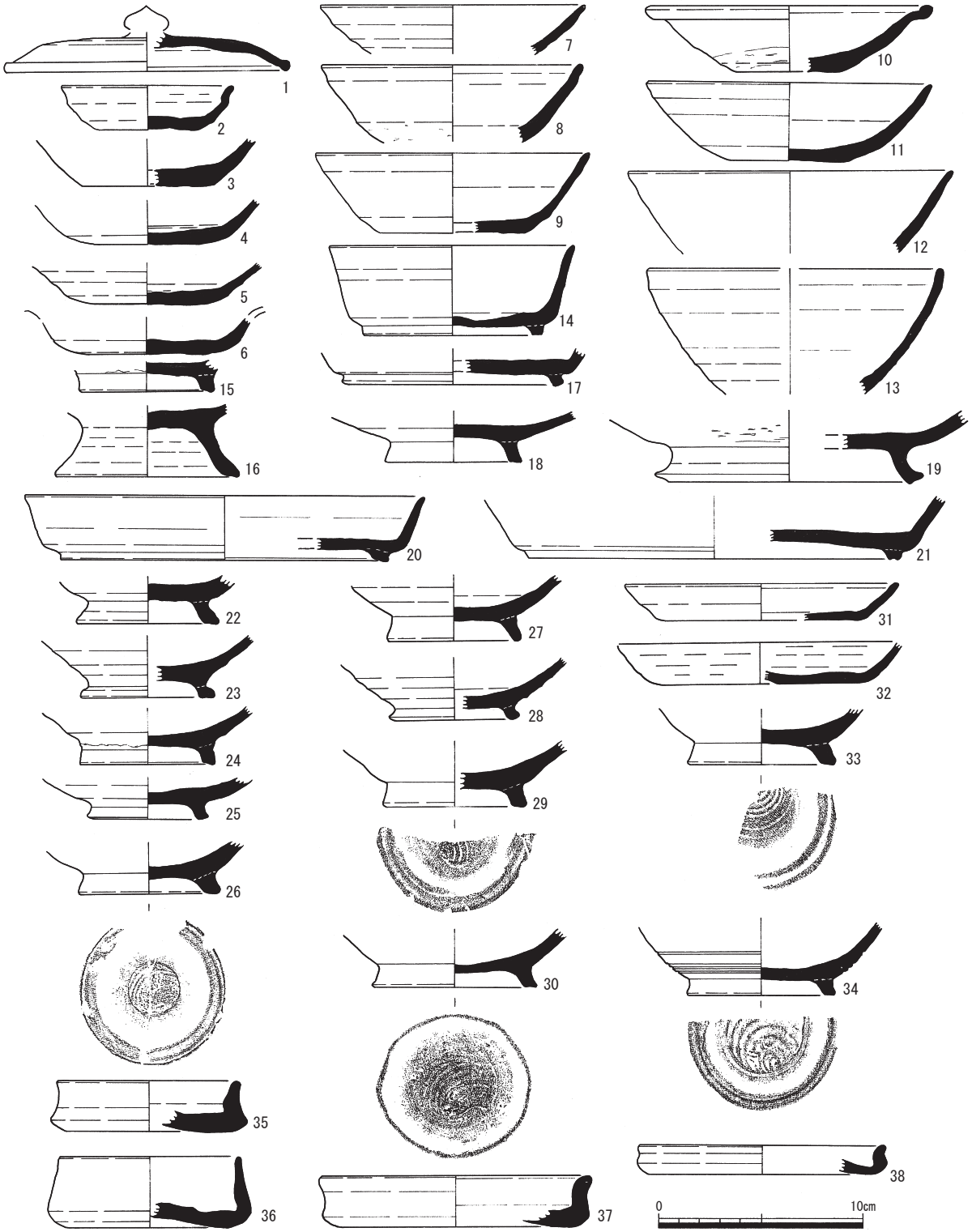
土坑1
1. にぶい黄褐色粘質土　粘りやや弱　しまり強　レキ多く混入　炭少し含む
2. 黄灰色粘質土　粘りやや弱　しまり強　レキ多く混入　炭若干含む
3. 黒色粘質土　粘り・しまり普通　炭若干、鉄分少し含む
4. 暗褐色粘質土　粘りやや弱　しまり強　レキ多く、黒色土若干混入　炭若干含む
溝2
5. 灰色粘質土　粘り弱　しまり強　レキ混入　炭若干含む
6. 暗灰色粘質土　粘りやや弱　しまり強　レキ多く混入　炭若干、鉄分含む
7. オリーブ灰色粘質土　粘り普通　しまり強　レキ混入　炭若干、遺物含む
8. 灰色粘質土　粘りやや弱　しまりやや強　レキ多く混入　炭若干、鉄分含む
9. 暗オリーブ灰色粘質土　粘りやや強　しまり普通　地山混入　炭少し含む

第43図　遺構断面図（縮尺1/40）

第３節　遺物〔図版第18～20、第44～51図、第10・11表〕

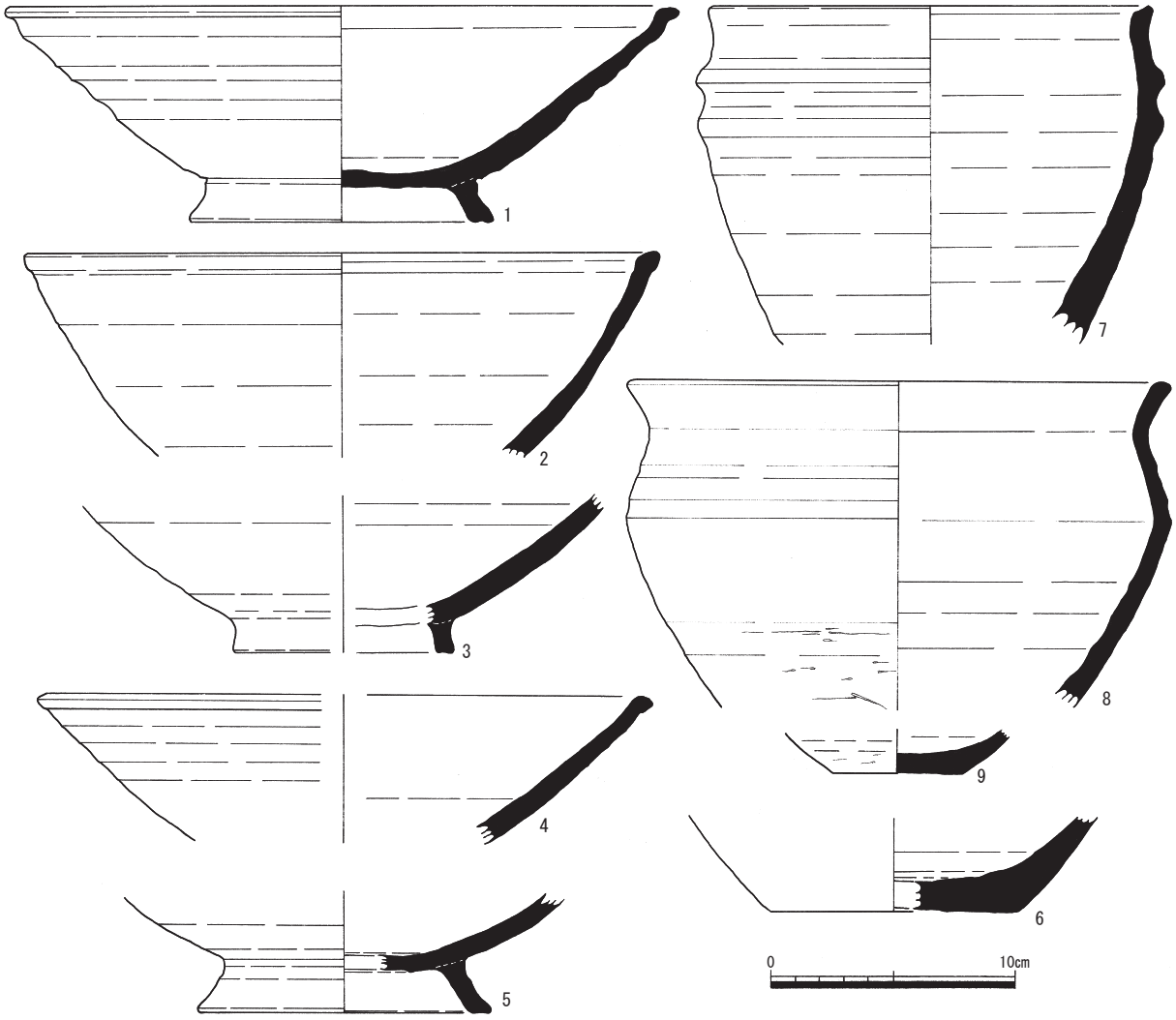
１　土器

本遺跡では須恵器と土師器が多数出土し、所属時期は９世紀後半代から10世紀前半代の時期幅を有する。いずれも近隣からの客土の混入と見られ、全体がわかるものはほとんどない。本節で図示したものは須恵器92点、土師器60点である(第44～50図)。以下、全体の概要と特異な土器を中心に述べる。

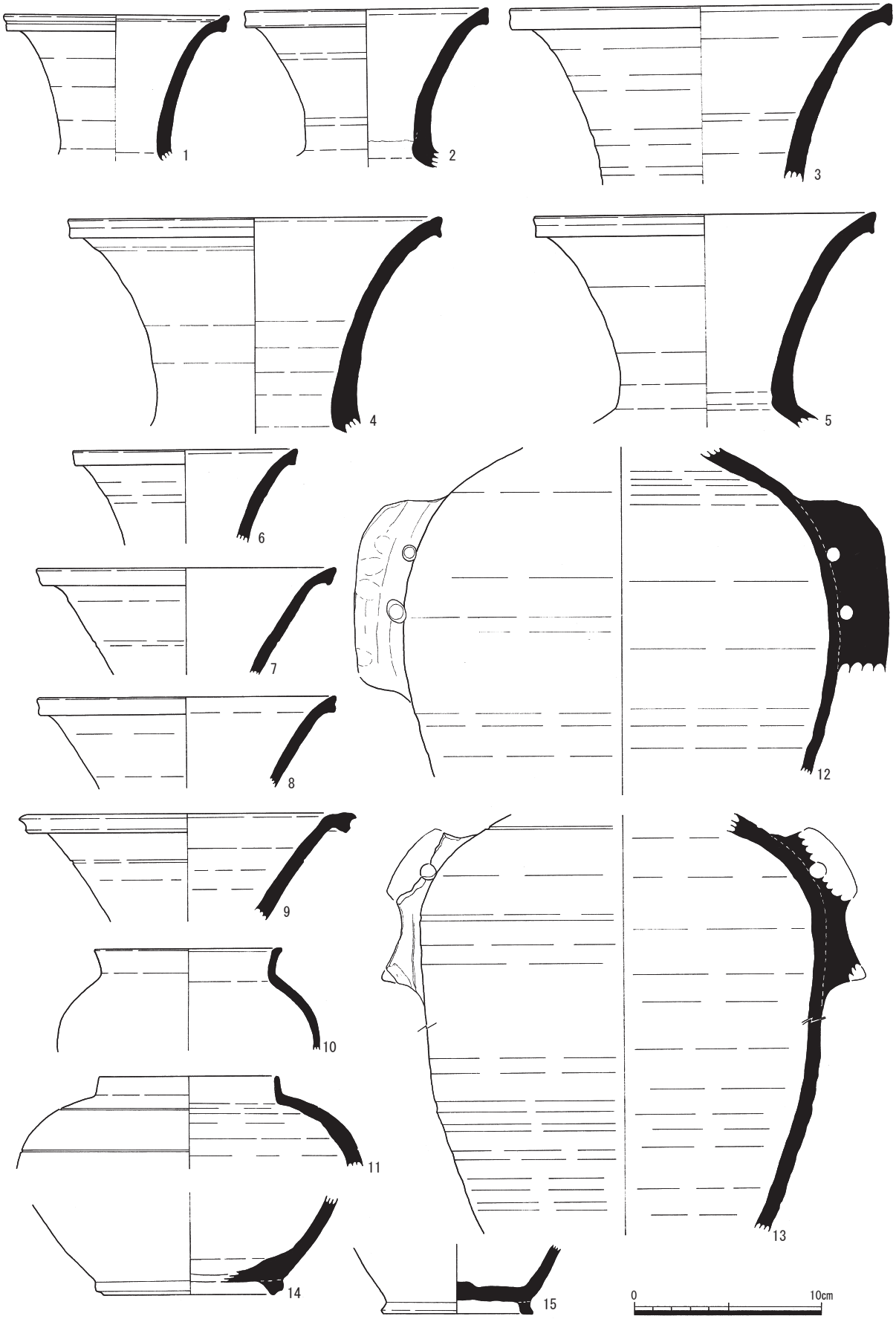


第44図　須恵器実測図（１）（縮尺1/3）

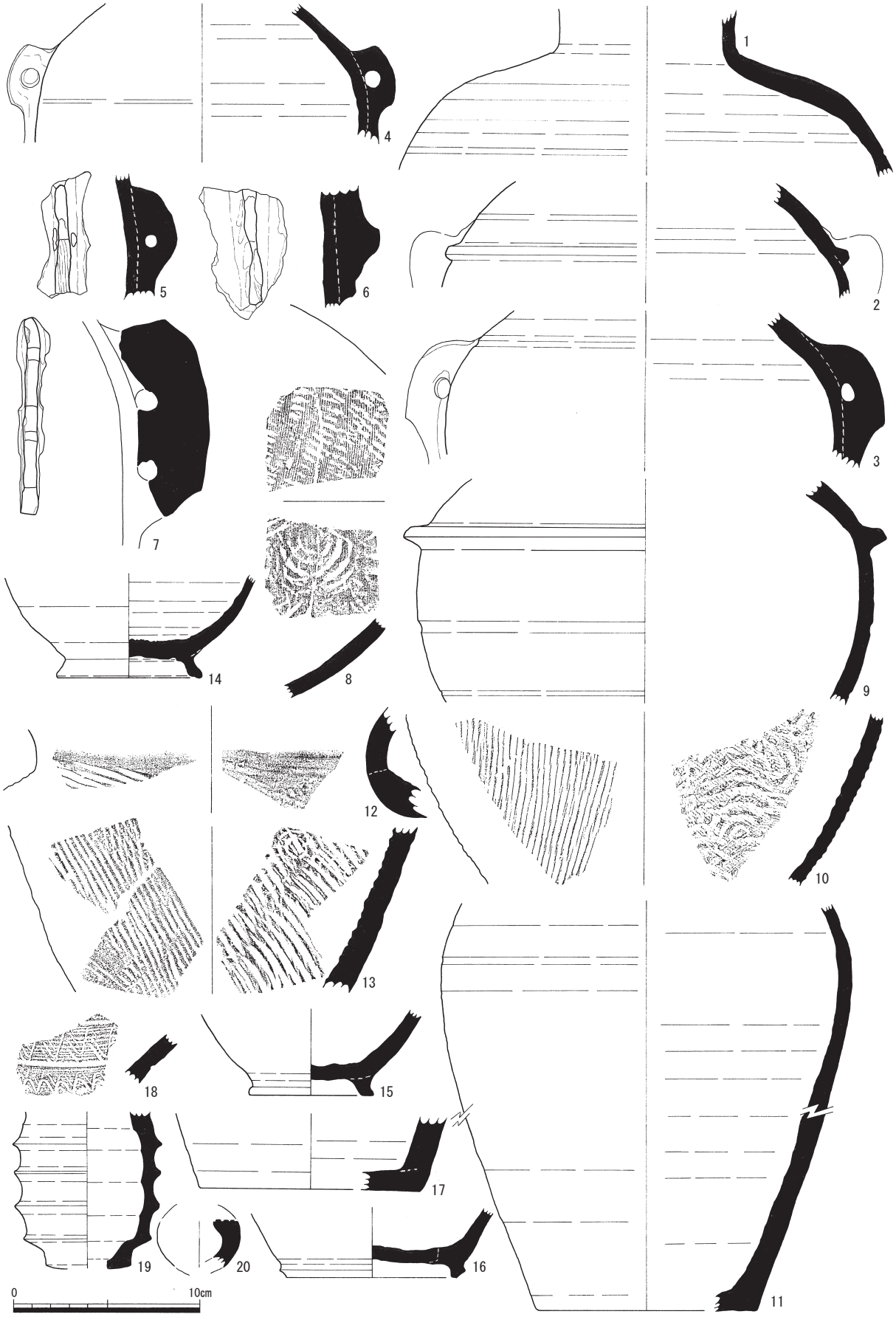
須恵器　坏蓋は摘みが付くもの（第44図１）の１点のみである。坏Aとなるものはなく、坏Bも２点（第44図14・17）あるのみである。埦Aは10点（第44図２～11）あるが、小型のもの（第44図２）や、口縁端部を摘み出して外反させるもの（第44図６･10）は仏具的なものであろう。埦Bは15点（第44図12・13・15・16・22～30・33・34）あり、底部を糸切りののちに、高台の張付けを明瞭に残すのが４点（第44図26・29・30・33・34）ある。盤Aはなく、盤Bは３点（第44図19～21）あるが、１点（第44図19）は高台端部が外反するなど、他の２点とは異なることから、盤ではなく異なる器種となるかもしれない。コースター型の焼台４点（第44図35～38）と、還元焼成された土師器の長胴甕（第48図８）は、本遺跡の性格を直接に物語るものである。鉢で口径が20cmを超えるもの５点（第45図１～５）は太平鉢と呼ばれるもので、高台が付く。直立する口縁直下に２段の凸帯が巡るもの（第45図７）や、頸部が屈曲してゆるく外反するもの（第45図８）､「く」の字になるもの（第48図６）などもある。壺･瓶類には長頸壺、もしくは双耳瓶（第46図１～９・12・13、第47図１～７・９）と短頸壺（第46図10・11）がある。双耳瓶の耳には１孔のもの（第47図４）と２孔のもの（第46図12・13）の２種類があるようである。中には肩部に突帯を巡らせるものもあり、四耳壺（第47図２・９）と考えられる。壺瓶類の底部には高台が付くもの（第47図14・15、第48図14～16）と、高台が付かない平底（第48図11・17）がある。横瓶は小片であるが、２点（第47図８、第48図７）ある。甕は口径が30cmを超える大型のもの（第48図１



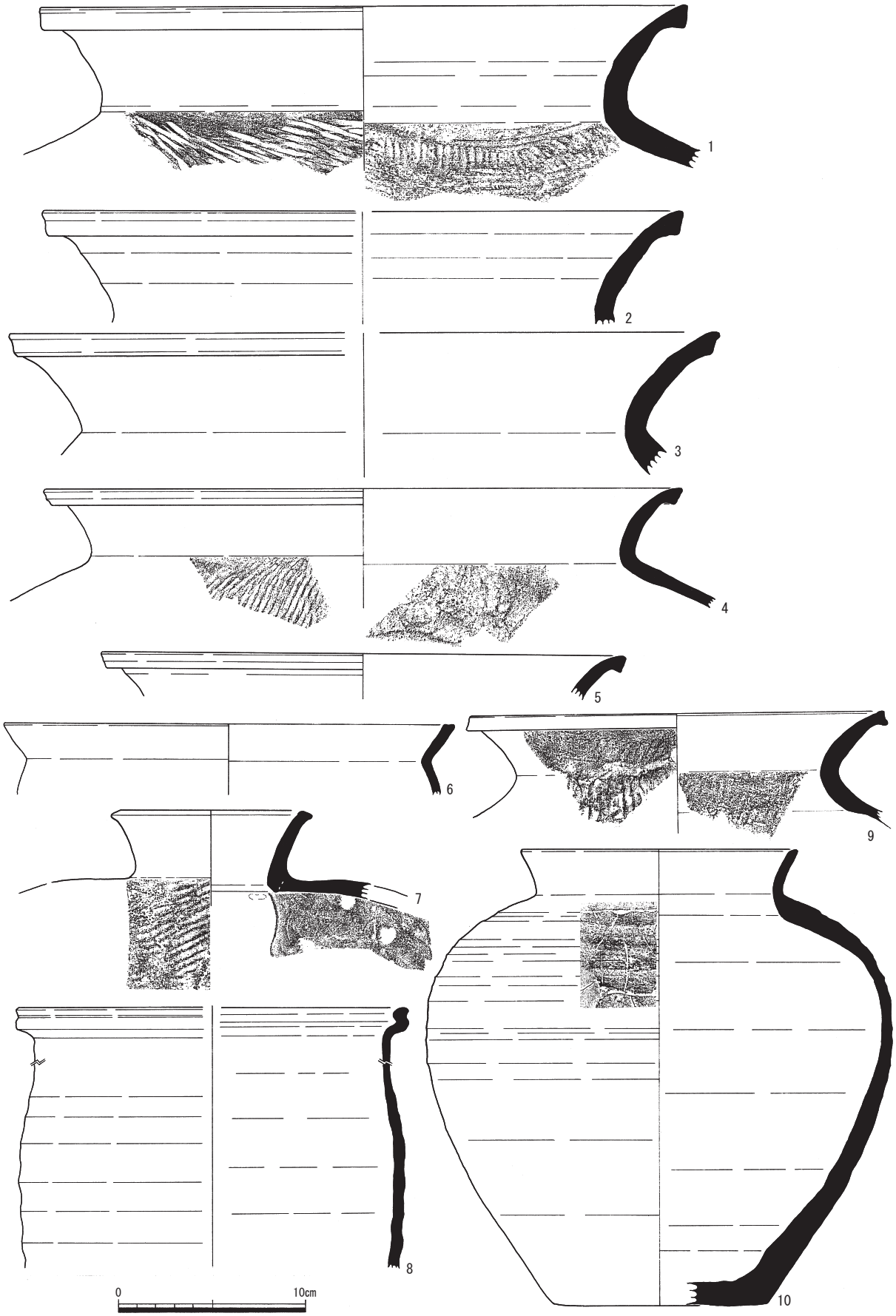
第45図　須恵器実測図（２）（縮尺1/3）



第46図　須恵器実測図（３）（縮尺1/3）



第47図　須恵器実測図（４）（縮尺1/3）



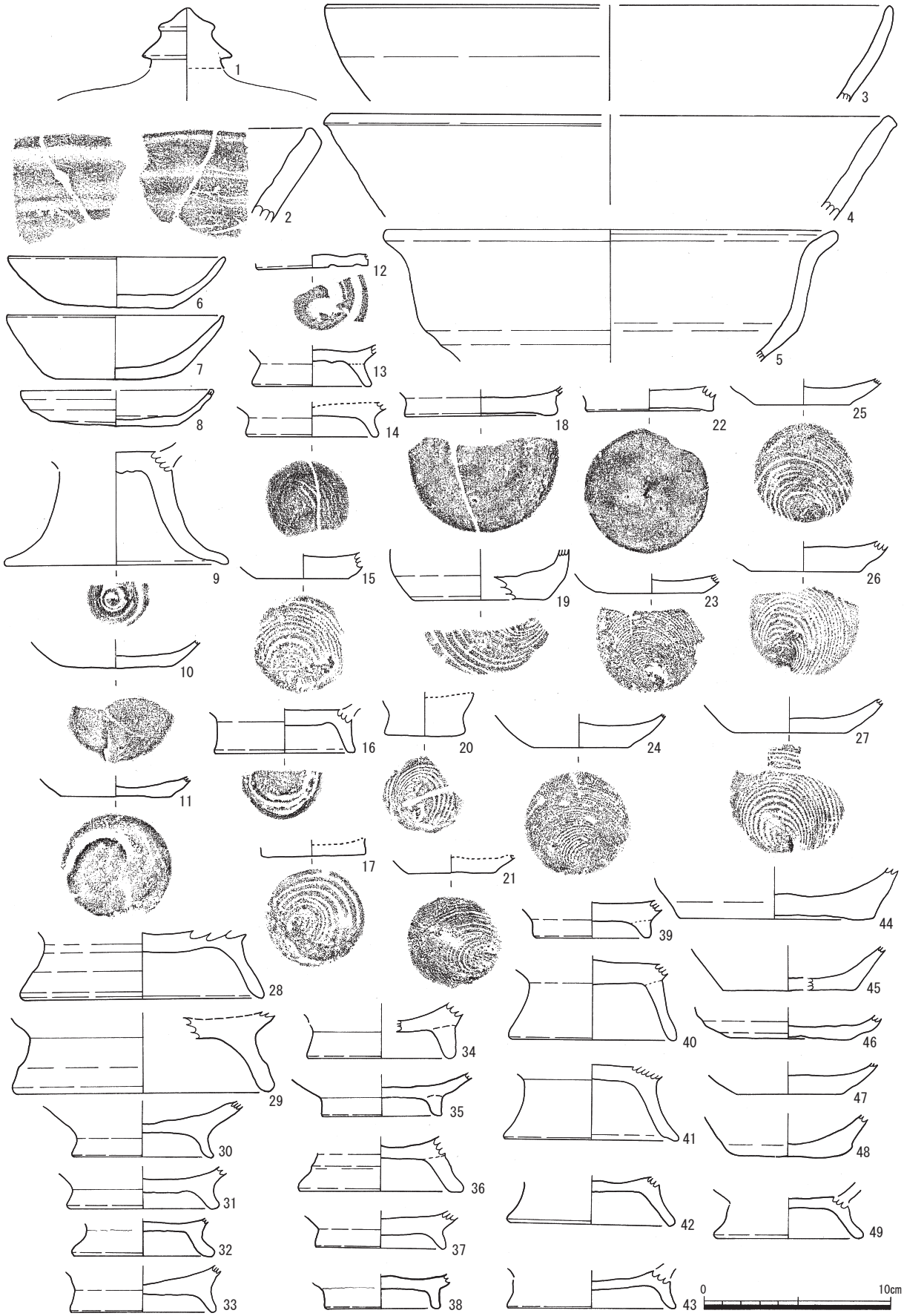
第48図　須恵器実測図（５）（縮尺1/3）

～４）と、それらより一回り小さい25㎝前後のもの（第48図５・９）の２種類がある。また、口縁が小さく外反するもの（第48図10）も甕であろう。肩部にヘラ描きがある。甕の胴部は内外面にタタキのある破片のみで、その形状は不明である（第47図10・12・13・18）。器壁の厚さから、これらの甕の胴部と考えられるものには、卵型のように縦長となるもの（第47図10・13）が目立つ。さらに須恵器の土鈴（第47図20）や、おそらく瓦塔相輪部分と考えられるもの（第47図19）など、通常の集落では出土しないようなものがある。

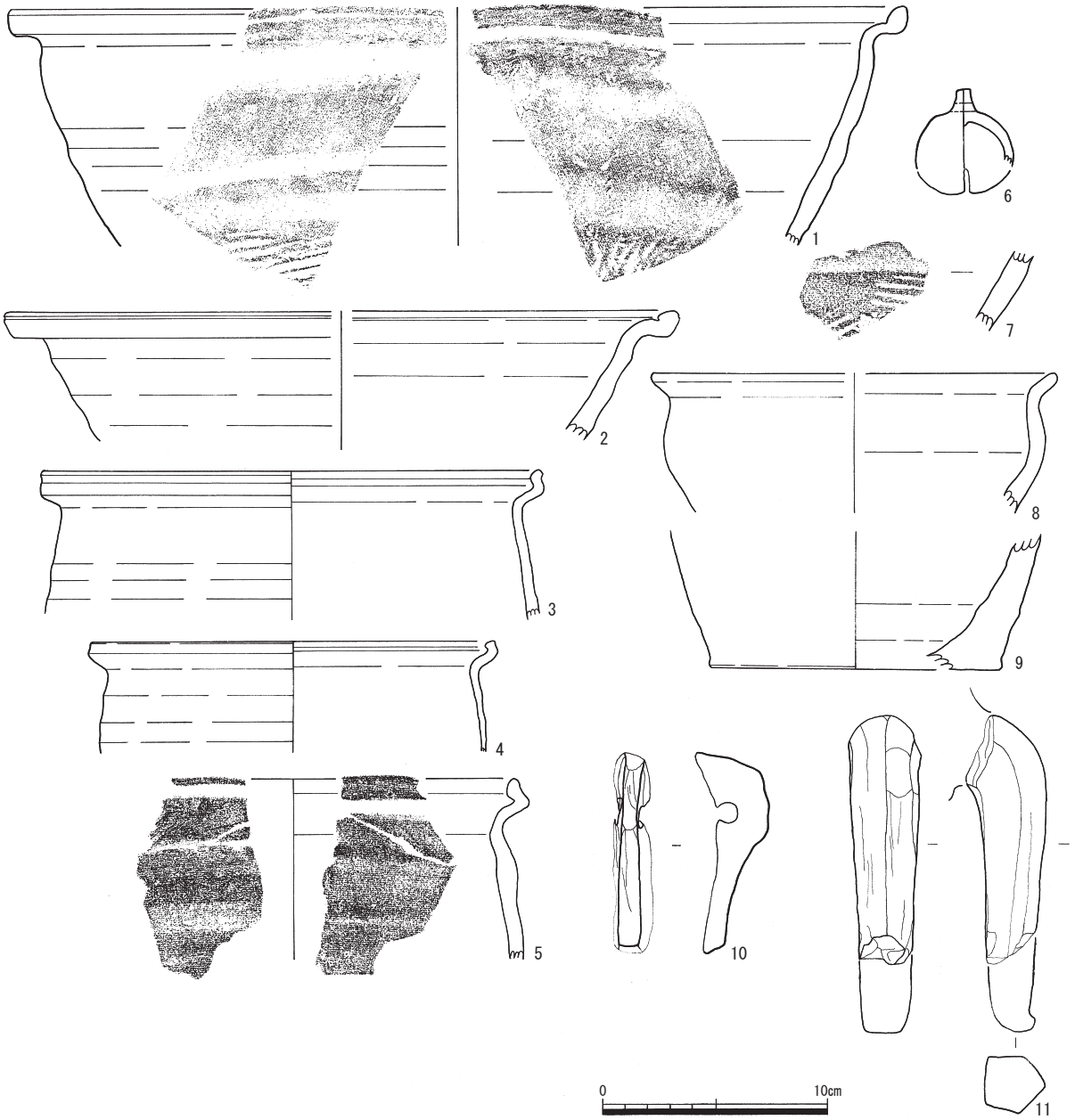
これらの須恵器には注目される点がいくつかあり、若干の補足をおこなっておきたい。太平鉢の１点（第45図１）と瓶の１点（第46図12）は、還元焼成が不十分なため、色調が須恵器に特有な灰色ではなく、茶褐色の色調となっている。特に後者には、中世陶器の壺などの肩部によくある降灰もあり、中世陶器と見間違えるほどである。しかし、太平鉢は口縁や高台の形状に加え、法量からも古代末のものである。また、瓶には耳がつき、双耳であることは明らかで、古代の須恵器であろう。先にも説明した、土師器の長胴甕で還元焼成されて、須恵質化したもの（第48図８）は窯業遺跡で出土することが多い。

土師器　土師器は種類も多く、供膳具である埦、煮沸具である甕・鍋のほかに、須恵器の焼成不良品もあるが、坏と考えられるものはない。全形が判るのは埦Aの２点（第49図６・７）と、皿Aの１点（第49図８）である。その他に図示したものは、埦や皿などの底部もしくは高台部で、特徴的なものが多く、平底をユビオサエ、またはユビナデで全体を上げ底状とするもの（第49図18・22）は少ない。糸切りは11点（第49図17・19・21・23～27）あり、多くは埦Aと考えられる。やや厚手のもの（第49図15・19）は坏ではなく、鉢もしくは壺などの底部であろう。高台の付く底部も多く、脚の径が大きく、大型の鉢のものではないかと考えられるものもある（第49図28・29）。脚を貼り付ける前の底部に糸切りを残すもの（第49図９・16）は２点確認できた。高台が伸びて長脚となるもの（第49図９・40・41）は脚高高台で、柱状高台（第49図20）とともに、古代から中世の過渡期にかけて特有の器種である。鉢には口縁が単純に大きく開き、口径が30㎝近くになるかと思われるもの（第49図２～４）と、胴部で屈曲して口縁端部がさらに外反するもの（第49図５、第50図７・８）とあるが、本県では類例が見当たらず、全形などは不明である。長胴甕はいずれも口縁が内側へ立ち上がるもの（第50図３～５）で、鍋も同じような口縁の形状である（第50図１・２）。羽釜の脚と考えられるもの（第50図11）が１点だけある。本来は須恵器として製作されたが、焼成不良で土師器に近い生焼け状態となったものに、宝珠が二重に重なる蓋のつまみ部分（第49図１）や、双耳瓶の耳（第50図10）などもある。

以上、これらの出土土器は、古代の窯業遺跡が削平され、本遺跡に搬入された客土に混入したものである可能性が高い。当調査区東側にその存在が推定される古代の窯跡に、上吉野窯跡（第４図７）と藤谷窯跡（第４図４）があるが、いずれも時期やその内容などの実態は不明である。



第49図　土師器実測図（１）（縮尺1/3）



第50図　土師器実測図（２）（縮尺1/3）

第10表　土器観察表

挿図No.	出土地点	種別	器種	部位	残存率	調整・技法・文様など	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調	胎土	備考	写真図版
第44図１	A5溝１	須恵器	坏蓋	口縁部	1／5	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	13.8		(1.9)	灰色	⑤		図版第18
第44図２	E1溝２	須恵器	坏A		1／2	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(8.4)	(5.1)	2.15	灰白色	①④		
第44図３	C2包含層	須恵器	坏A	底部		外）回転ヘラ切後ナデ		(6.2)	(2.3)	灰白色	①	焼成不良	
第44図４	C2溝１	須恵器	坏A	底部	5／12	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ		(5.3)	(2.2)	灰色	①	胎土に雲母含む	
第44図５	A4包含層	須恵器	坏A	底部	7／12	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ		(5.2)	(2.1)		②		
第44図６	C1包含層	須恵器	坏A	底部		外）回転ヘラ切後ナデ		(5.6)	(1.8)	黄灰色	⑤		
第44図７	A4溝１	須恵器	坏A	口縁部	1／6	外）ナデ	13.0		(2.4)	灰色	①		
第44図８	D1溝１・２	須恵器	坏A？	口縁部	1／10	外）ナデ	12.8		(3.8)	灰色	④		
第44図9	C2溝１、C4包含層	須恵器	坏A	口縁部底部	1／6	外）ナデ	13.2	7.0	3.9	外）黄灰色 内）褐灰色	①		図版第18
第44図10	C2包含層	須恵器	坏A		1／12	外）回転ヘラ切後ナデ	(13.5)	(5.0)	3.2	外）黄灰色 内）灰色	②		図版第18
第44図11	C2包含層	須恵器	坏A			外）回転ヘラ切		5.6	3.8	灰白色	①		
第44図12	D1溝１	須恵器	坏A	口縁部体部	1／12	外）ナデ	16.0		(4.0)	黄灰色	③		

挿図No.	出土地点	種別	器種	部位	残存率	調整・技法・文様など	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調	胎土	備考	写真図版
第44図13	D2包含層	須恵器	埦	口縁部 体部	1/12	外）ナデ　内）ナデ	14.0前後		6.0前後	外）灰黄褐色 内）にぶい黄橙色	①		
第44図14	A4・5包含層	須恵器	坏B	口縁部		外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(11.8)	(8.8)	4.35	外）灰色 内）灰白色	②		図版第18
第44図15	A4包含層	須恵器		底部	1/2	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ		(6.4)	(1.5)	灰白色	①		
第44図16	D1包含層	須恵器	埦	底部	1/4	外）ナデ　内）ナデ		(8.8)	(3.5)	灰白色	③		
第44図17	A3包含層	須恵器	坏B	底部	1/3	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ		(10.0)	(1.8)	灰白色	②⑤		
第44図18	C3包含層	須恵器	坏B 埦?	底部	1/2	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ		(6.6)	(2.5)	灰色	②		
第44図19	A4包含層	須恵器	盤	底部	1/6	外）ナデ　内）ナデ		(11.8)	(3.5)	灰黄褐色	①	焼成不良	
第44図20	A2包含層	須恵器	坏B		1/6	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(19.4)	(15.9)	(3.2)	黄灰色	②⑤		図版第18
第44図21	C2包含層	須恵器	坏B	底部		外）回転ヘラ切後ナデ　自然釉付着		(18.0)	(3.1)	外）黒褐色 内）灰白色	⑤		
第44図22	A4包含層	須恵器	埦	底部	1/2	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ		(6.9)	(2.4)	灰白色	④	焼成不良	
第44図23	A2包含層	須恵器	埦	底部	1/3	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ		(6.4)	(3.0)	灰色	②		
第44図24	A2包含層	須恵器	埦	底部	1/2	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ		(6.6)	(2.8)	灰色	②		
第44図25	A2包含層	須恵器	坏B 埦?	底部	1/4	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ		(5.0)	(2.1)	灰色	②		
第44図26	D1・C3包含層	須恵器	高台付 埦	底部		外）糸切後ナデ　内）ナデ		6.8	(2.5)	にぶい橙色	③	焼成不良	
第44図27	B・D2包含層	須恵器	埦	底部		外）回転ヘラ切後ナデ		(6.4)	(3.2)	にぶい黄褐色	①	焼成不良?	図版第18
第44図28	B4溝1	須恵器	埦	底部	1/2	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ		(5.6)	(3.0)	灰色	②	胎土に雲母含む	
第44図29	D2包含層	須恵器	埦	底部		外）糸切後ナデ		(6.8)	(3.3)	褐灰色	①		
第44図30	A4包含層	須恵器	埦	底部		外）糸切後ナデ		7.8	(2.8)	灰白色	②		
第44図31	C2溝1	須恵器	皿		1/12	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(13.2)	10.0	1.8	灰白色	①		
第44図32	D1溝2	須恵器	皿	底部	1/3	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ		(9.6)	(2.0)	外）灰白色 内）灰色	①④		
第44図33	C2包含層	須恵器	埦	底部		外）糸切後ナデ　内）ナデ		(7.0)	(2.8)	褐灰色	②		
第44図34	A5包含層	須恵器	埦	底部		外）糸切後ナデ　内）ナデ		(7.2)	(3.5)	灰色	②		図版第18
第44図35	C0包含層	須恵器	焼台		1/6	外）回転ヘラ切後ナデ	(8.5)	(8.2)	2.4	外）灰色 内）オリーブ黒色	③		図版第18
第44図36	C2包含層	須恵器	焼台		1/12	外）回転ヘラ切後ナデ	(8.8)	(8.0)	3.5		⑤		図版第18
第44図37	D1包含層	須恵器	焼台		1/10	外）回転ヘラ切後ナデ	(13.1)	(11.4)	2.45	外）黒色 内）黄灰色	⑤		図版第18
第44図38	D1包含層	須恵器	焼台		1/6	外）回転ヘラ切後ナデ	(12.0)	(11.0)	1.4	外）暗灰色 内）黄灰色	③		図版第18
第45図１	B4溝1、C3トレンチ、C2·D2·C3包含層	須恵器	鉢			外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ	(27.4)	(12.4)	(8.8)	外）にぶい褐色 内）褐色	④		図版第18
第45図２	C2・C3・D4包含層	須恵器	鉢	口縁部 体部	1/4	外）ナデ　内）ナデ	25.0前後		8.0前後	灰白色	③		図版第18
第45図３	A4包含層	須恵器	高台付 鉢	体部		外）ナデ　内）ナデ		8.6前後	(6.4)	灰白色	②		
第45図４	B4包含層	須恵器	鉢	口縁部		外）ナデ　内）ナデ	(25.0)		(6.0)	外）黒褐色 内）にぶい黄褐色	③		図版第18
第45図５	A4包含層	須恵器	鉢	底部		外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ		(11.8)	(4.8)	にぶい橙色	②	焼成不良	
第45図６	C2包含層	須恵器	鉢?	底部		外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ		(10.1)	(3.9)	外）灰色 内）灰白色	③		
第45図７	D0溝1、 C1包含層	須恵器	鉢	口縁部 体部	1/6	外）ナデ　内）ナデ	(17.8)		(13.3)	外）灰色 内）黄灰色	②		図版第18
第45図８	C2溝1、 C2・D1包含層	須恵器	広口鉢	口縁部 体部		外）ナデ　内）ナデ	(21.4)		(13.4)	灰色	⑤		図版第18
第45図９	E1溝2	須恵器	鉢	底部	3/5	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ		(5.4)	(1.8)	灰色	①④		
第46図１	A4溝1	須恵器	長頸壷	口頸部	5/12	外）ナデ　内）ナデ	(11.9)		(7.7)	灰色	①	胎土に雲母含む	図版第18
第46図２	A4包含層	須恵器	瓶	口頸部		外）ナデ	(12.8)		(8.4)	灰白色	②		
第46図３	D0溝1	須恵器	長頸壷	口頸部	1/6	外）ナデ　内）ナデ	(20.2)		(9.3)	灰色	①		
第46図４	A1客土、C1包含層、B0客土	須恵器	瓶	口頸部		外）ナデ	(19.8)		(11.4)	外）黒褐色 内）灰褐色	③		
第46図５	B4溝1、 B3・C4包含層	須恵器	長頸壺	口頸部		外）ナデ	(18.0)		(11.4)	外）黒褐色 内）にぶい褐色	④		図版第18
第46図６	B1包含層	須恵器	長頸壷	口頸部	1/6	外）ナデ　内）ナデ	(12.0)		(5.0)	外）暗灰色 内）灰色	①		
第46図７	E1溝2	須恵器	長頸壷	口頸部	1/3	外）ナデ　内）ナデ	(15.9)		(5.1)	灰色	②		
第46図８	A4包含層、 A5溝1	須恵器	長頸壷	口頸部	1/10	外）ナデ	15.8		(4.9)	にぶい橙色	①	焼成不良	
第46図９	A5・B4包含層、 F1溝2	須恵器	長頸壷	口頸部	1/3	外）ナデ　内）ナデ	(17.5)		(5.7)	灰白色	⑤		
第46図10	B5包含層	須恵器	短頸壺	口縁部 肩部	1/4	外）自然釉が部分的に付着　内）ナデ	(10.0)		(5.4)	灰色	①		図版第18
第46図11	A5溝1、 C3包含層	須恵器	小壺	口縁部 肩部	1/12	内外面ともナデ	9.5		(4.85)	外）黄灰色 内）灰白色	③		図版第18

挿図No.	出土地点	種別	器種	部位	残存率	調整・技法・文様など	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調	胎土	備考	写真
第46図12	B4·D0溝1、C4溝3、C4包含層	須恵器	瓶	体部		外）ナデ　自然釉付着　内）ナデ			（17.6）	外）にぶい赤褐色 内）にぶい橙色	②		図版第19
第46図13	B4溝1、C3トレンチ、A4包含層	須恵器	瓶	肩部 体部		外）ナデ　内）ナデ			（22.2）	橙色	②		
第46図14	E1溝2、 D1包含層	須恵器	瓶	底部		外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ		9.0	（5.3）	灰色	③		
第46図15	B4溝1	須恵器	瓶?	底部	11/12	外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ		8.0	（3.7）	灰色	⑤		
第47図１	A1客土、 C1·D2包含層	須恵器	壺	肩部		外）ナデ			（8.8）	明赤褐色	③	生焼け	図版第19
第47図２	D0溝1	須恵器	瓶	体部		外）ナデ　内）ナデ			（7.1）	灰色	①		
第47図３	B1トレンチ、 A2包含層	須恵器	瓶	体部		外）ナデ			（8.6）	外）灰色 内）灰白色	②		図版第19
第47図４	B1包含層	須恵器	瓶	体部		外）ナデ　内）ナデ			（7.5）	灰色	②		図版第19
第47図５	D1包含層	須恵器		把手							⑤	自然釉付着	図版第19
第47図６	D1包含層	須恵器		把手						外）にぶい褐色 内）にぶい黄橙色	③		
第47図７	A4包含層	須恵器		把手						にぶい黄橙色	②	焼成不良	
第47図８	A5溝1、 E1包含層	須恵器	瓶	肩部		外）タタキ後カキメ　内）当て具痕			（5.4）	灰白色	⑤		
第47図９	A4溝1、 A2包含層	須恵器	甕	体部		外）ナデ			（12.0）	外）灰色 内）黄灰色	⑤		図版第19
第47図10	B4溝1、 C2包含層	須恵器	?	体部		外）タタキ　内）当て具痕				外）灰白色 内）黄灰色	⑤		
第47図11	E2土坑1、D1溝2、 A2·B5·D1·E1包含層	須恵器	壺	体部 底部		外）ナデ		（12.0）	（21.8）	外）暗灰色 内）灰色	④		
第47図12	C4包含層	須恵器	壺	肩部		外）ナデ　タタキ　内）ナデ　当て具痕			（5.6）	灰色	③		
第47図13	D2・E1溝2	須恵器	甕	体部		外）タタキ　内）当て具痕				灰白色	③		
第47図14	A3・4包含層	須恵器	壺	底部		外）回転ヘラ切後強いナデ　内）ナデ		7.8	（5.6）	外）暗灰色 内）灰色	③	内）砂粒・自然釉付着	
第47図15	D1包含層	須恵器	坏B	底部		外）ナデ　自然釉付着　内）砂粘融着		（6.6）	（4.65）	灰色	③		
第47図16	D1包含層	須恵器	壺	底部		外）回転ヘラ切後ナデ　内）ナデ		（5.2）	（3.7）	灰色	②		図版第19
第47図17	A3包含層	須恵器	壺	底部	1/4	内）ナデ		（11.8）	（4.1）	灰色	②		
第47図18	D2包含層	須恵器				外）2条の波状文+沈線文　内）ナデ				外）黄灰色 内）灰色	②		図版第19
第47図19	D1溝1、B1客土、 B1包含層	須恵器	瓦塔	体部 底部		外）ナデ		4.6	（8.4）	外）暗灰色 内）灰色	②		図版第19
第47図20	D1包含層	須恵器	土鈴							黄灰色	③	胎土に雲母含む	図版第19
第48図１	A4溝1、 D1包含層	須恵器	甕	口縁部 肩部	1/12	外）口縁部ーナデ　肩部ータタキ 内）口縁部ーナデ　肩部ー当て具痕	（34.2）		（8.8）	灰色	②⑤		
第48図２	D1包含層	須恵器	甕	口縁部	1/6	外）ナデ	39.0前後		（6.1）	灰色	⑤		
第48図３	A4溝1、 A4包含層	須恵器	甕	口縁部 肩部		外）ナデ　内）ナデ	（37.8）		（7.7）	にぶい橙色	④	生焼け	図版第19
第48図４	B4・D0溝1	須恵器	甕	口縁部 肩部	1/12	外）口縁部ーナデ　肩部ータタキ	34.0		（6.4）	灰色	④		
第48図５	D1溝1、 B4包含層	須恵器	甕	口縁部	1/6	外）ナデ　内）ナデ	（27.8）		（2.3）	灰色	⑤		
第48図６	C2溝1	須恵器	鉢	口縁部	1/6	外）ナデ　内）ナデ	（23.9）		（3.7）	灰白色	②		
第48図７	A・B4溝1	須恵器	横瓶	口縁部 肩部		外）ナデ　内）肩部ー当て具痕	（9.5）		（4.7）	灰色	①	内）自然釉付着	
第48図８	E1溝2	須恵器	甕	口縁部 体部		外）ナデ　内）ナデ	20.0前後		14.0前後	灰白色	⑤		
第48図９	C2溝1	須恵器	甕	口縁部 肩部	1/6	外）口縁部ーナデ　肩部ータタキ 内）口縁部ーナデ　肩部ー当て具痕	（22.0）		（6.3）	灰白色	⑤		図版第19
第48図10	B3·B4·E3溝1、 A4・B2・B4・ C4・D1・D2包含層	須恵器	甕		2/5	外）ナデ	（14.7）	（11.4）	24.3	灰色	④	肩部にヘラ記号	図版第19
第49図１	E1客土	土師器		宝珠					（4.9）	にぶい橙色		焼成不良?	図版第20
第49図２	A0・1客土	土師器	鉢	口縁部					（5.0）	にぶい黄褐色	③		
第49図３	D2包含層	土師器	鉢	口縁部	1/10	摩滅のため調整不明	（29.8）		（5.1）	にぶい橙	②		図版第20
第49図４	B4溝1	土師器	鍋?	口縁部	1/10	摩滅のため調整不明	（29.8）		（5.5）	浅黄橙色	②		図版第20
第49図５	C3トレンチ	土師器	鉢?	口縁部	1/6	摩滅のため調整不明	（23.9）		（7.0）	灰白色	②	段状口縁?	図版第20
第49図６	C3包含層	土師器		底部	1/2	外）ナデ	11.5	6.0	2.7	浅黄橙色	①④		図版第20
第49図７	C3トレンチ	土師器		底部	1/2	外）回転ヘラ切後ナデ　内）摩滅	11.5	6.0	3.4	にぶい黄橙色	①④		図版第20
第49図８	C2溝1	土師器	皿	底部	4/5	内外面ともナデ	（10.0）	6.8	（1.9）	にぶい黄橙色	②		図版第20
第49図９	B3包含層	土師器		底部		外）ナデ		（12.0）	（6.0）	にぶい橙色	②	脚部?	
第49図10	C4包含層	土師器		底部	1/3	外）糸切後ナデ		5.8	（1.5）	灰白色	③		
第49図11	C3トレンチ	土師器		底部		外）ナデ		5.8	（1.1）	灰白色	③		

挿図No.	出土地点	種別	器種	部位	残存率	調整・技法・文様など	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調	胎土	備考	写真図版
第49図12	B3包含層	土師器		底部				(6.0)	(0.7)	外）明赤褐色 内）浅黄橙色	②	ベタ高台?	
第49図13	B4溝1	土師器	埦	底部		外）強いナデ　ナデ　内）ナデ		(6.2)	(2.3)	外）にぶい黄橙色 内）黒色	②	黒色土器?	
第49図14	C3溝	土師器	坏B	底部		外）糸切　ナデ		(7.0)	(1.8)	外）にぶい橙色 内）にぶい黄橙色	②	底部外面赤彩もしくは化粧粘土	
第49図15	溝1	土師器		底部		外）糸切		5.0	(1.4)	外）にぶい橙色 内）にぶい黄橙色	②		
第49図16	C3包含層	土師器		底部		外）ナデ		7.4	(2.4)	にぶい橙色	②		
第49図17	B4包含層	土師器		高台		外）糸切		5.6	(0.8)	橙色	②	ベタ高台	
第49図18	A4溝1	土師器		口縁部 体部				7.8	(1.5)	外）にぶい黄橙色 内）黒色	②	黒色土器	
第49図19	B3包含層	土師器		底部		外）糸切		(7.0)	(2.7)	灰白色	②		
第49図20	溝1	土師器		高台		外）糸切　ナデ		4.3	(5.2)	橙色		柱状高台	
第49図21	溝1	土師器		底部		外）糸切　ナデ		4.6	(0.9)	明黄褐色	②		
第49図22	C3包含層	土師器		口縁部				6.6	(1.3)	外）明褐灰色 内）黒色	②	黒色土器	
第49図23	溝1	土師器		底部		外）糸切　ナデ　内）ナデ		5.8	(1.0)	にぶい黄橙色	②		
第49図24	B4溝1	土師器		底部		外）糸切　ナデ　内）強いナデ		6.2	(1.8)	にぶい黄橙色	②		
第49図25	溝1	土師器		底部		外）糸切　ナデ		5.0	(1.4)	橙色	②		
第49図26	C2包含層	土師器		底部		外）糸切　ナデ		5.8	(1.6)	灰黄褐色	②		
第49図27	D2包含層	土師器		底部		外）糸切		6.0	(1.9)	にぶい橙色	②		
第49図28	A4溝1	土師器		底部		外）ナデ　内）強いナデ		(12.8)	(3.5)	外）浅黄橙色 内）にぶい橙色	③		
第49図29	D2溝1	土師器		底部	2/5	ナデ?		(12.3)	(3.3)	にぶい黄橙色	③		
第49図30	C3包含層	土師器		底部		外）ナデ		7.4	(3.0)	にぶい黄橙色	②	内面に砂付着	
第49図31	A1客土	土師器		底部		摩滅のため調整不明		7.8	(2.25)	外）灰白色 内）黒色	①	内）黒色	
第49図32	C3トレンチ	土師器		底部	11/12	摩滅のため調整不明		7.2	(2.0)	外）にぶい橙色 内）浅黄橙色	②	胎土に雲母含む	図版第20
第49図33	C1客土	土師器		底部		外）ナデ　内）強いナデ		7.6	(2.5)	にぶい黄橙色	③		
第49図34	A4包含層	土師器		底部		摩滅のため調整不明		7.5	(2.9)	灰白色	②		
第49図35	D2溝2	土師器		底部		内外面ともナデ　糸切後貼付高台		6.2	(2.2)	外）にぶい橙 内）浅黄橙色	③④		図版第20
第40図36	C4包含層	土師器		底部		外）糸切後ナデ　内）強いナデ		(8.6)	(2.9)	にぶい黄橙色	③		
第49図37	C1客土	土師器		底部		外）ナデ		6.8	(2.0)	灰黄褐色	②		
第49図38	D1溝2	土師器		底部		摩滅のため調整不明		5.8	(1.8)	淡黄色	①		
第49図39	C1包含層	土師器		底部		外）ナデ　内）ナデ		6.0	(2.0)	にぶい黄橙色	②		
第49図40	B4溝1	土師器		底部		外）ナデ　内）ナデ		8.8	(4.3)	灰白色	②		
第49図41	溝3	土師器		底部		外）ナデ		(9.4)	(4.0)	にぶい黄橙色	②		
第49図42	C1包含層	土師器		底部	1/4	摩滅のため調整不明		(8.4)	(2.6)	橙色	②		
第49図43	C3トレンチ	土師器		底部		摩滅のため調整不明		8.8	(2.0)	浅黄橙色	②		
第49図44	B1客土	土師器		底部	3/5	外）摩滅　内）ナデ		10.4	(2.8)	浅黄橙色	①④		
第49図45	C2溝1	土師器	鉢 壺?	底部		外）ナデ		(7.0)	(2.3)	外）にぶい橙色 内）浅黄橙色	②		
第49図46	A4溝1	土師器	坏A	底部		外）ナデ　内）ナデ		6.1	(1.6)	浅黄橙色	②	内面に煤付着	図版第20
第49図47	C4包含層	土師器		底部		外）糸切後ナデ　内）ナデ		5.5	(1.7)	橙色	②		図版第20
第49図48	A2客土	土師器		底部		外）摩滅　内）ナデ		6.0	(2.3)	にぶい黄橙色	①		
第49図49	E1包含層	土師器		底部		摩滅のため調整不明		7.6	(2.2)	浅黄橙色	③		
第50図１	B4トレンチ	土師器	鉢	口縁部 体部		外）下部にタタキ　内）下部に当て具痕	(39.8)		(10.5)	灰白色	①		図版第20
第50図２	B4トレンチ	土師器	鍋	口縁部	1/12	外）ナデ　内）ナデ	(29.4)		(5.7)	にぶい黄橙色	②		
第50図３	A4包含層	土師器	鍋	口縁部	1/10	摩滅のため調整不明	(22.0)		(6.6)	にぶい黄橙色	②		図版第20
第50図４	F1客土	土師器	鍋?	口縁部		内外面ともにナデ	(17.7)		(4.9)	外）灰黄褐色 内）灰白色	②		
第50図５	B1客土	土師器	鍋	口縁部		内外面ともにナデ			(8.0)	にぶい橙色	②	胎土にガラス質含む	
第50図６	B3包含層	土師器	土鈴		2/5	外）ケズリ後ナデ　内）ナデ			(3.4)	にぶい黄橙色	③		図版第20
第50図７	B4包含層	土師器	鉢 鍋?	体部		外）ナデ　タタキ			(3.5)	外）橙色 内）にぶい橙色	②		
第50図８	D1溝1	土師器	甕	口縁部	1/10	摩滅のため調整不明	(18.0)		(6.2)	灰白色	②		
第50図９	C1包含層	土師器	壺	底部		外）ケズリ　ナデ　内）ナデ		(12.6)	(6.2)	外）灰白色 内）にぶい橙色	③		
第50図10	A5包含層	土師器	瓶	把手					(8.8)	灰白色	①		
第50図11	A5包含層	土師器	鍋	脚部	1/3	ケズリ後ナデ			(11.1)	灰白色	②		図版第20

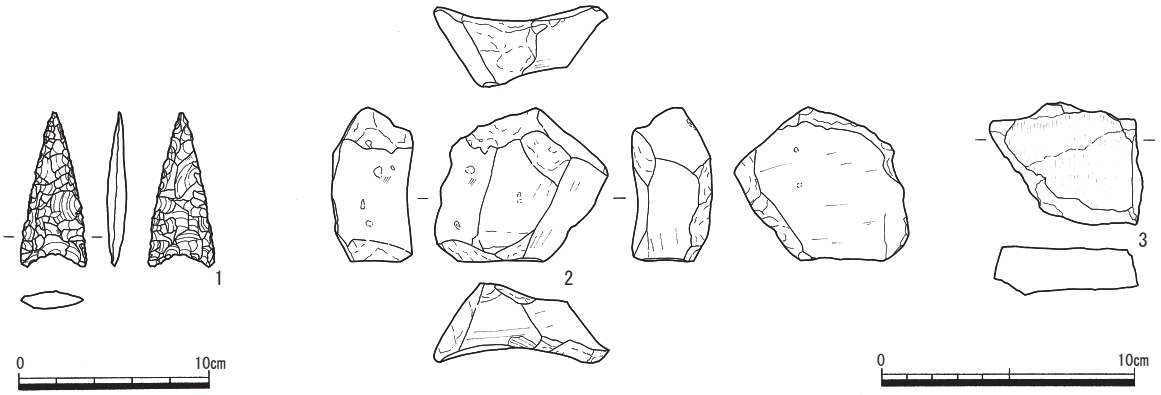
残存率は部位に対する割合とする
口径、底径の復元値を（　）、器高の残存高を（　）で記述する
胎土は①微砂粒（直径１㎜以下）を少量含む　②微砂粒を多量に含む　③砂粒（直径１~２㎜）を含む　④小石（直径２㎜以上）を含む　で分けている

２　石器・石製品

出土した石器・石製品は、総数で５点を数える。うち３点を図化し、それ以外は観察表（第11表）に掲載した。すべて包含層または客土からの出土品である。

石鏃（第51図１）　流紋岩製の凹基無茎鏃である。整った二等辺三角形を呈し、幅に比べ長身である。横断面は凸レンズ状を呈する。表裏面とも調整剥離が入念に施され、縁辺は鋭い。摩滅は少なく、剥離状況が明瞭に観察できる。縄文時代の所産と見られるが、本遺跡出土の土器と時期がかけ離れるため、他所から流れ込んだものと推測される。

砥石（第51図２・３）　ともに凝灰岩製。２は不整七面体を呈する。左上端面以外を使用しており、砥面はいずれも内弯し、よく磨れている。仕上砥に近い中砥と判断される。３は板状を呈し、周囲を欠く。表面のみ使用し、縦走する擦痕を若干残す。あまり使用されておらず、砥面に細かい凹凸が見られる。中砥と判断される。



第51図　石鏃・砥石実測図（縮尺1/3、1のみ縮尺1/2）

第11表　石鏃・砥石観察表

遺物No.	器種	出土地区	出土遺構	遺存状態	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	石材	備考	挿図No.
1	石鏃	B3	包含層２	完形	40.8	17.3	5.0	15	流紋岩	無茎凹基三角形	第50図１
2	砥石	C1	包含層２	一部欠	70.8	64.1	26.8	(119)	凝灰岩	中砥	第50図２
3	砥石	E2	客土	破損	(46.3)	(58.2)	(19.0)	(68)	凝灰岩	中砥	第50図３
4	砥石	C1	包含層１	破損	(37.5)	(27.0)	(18.0)	(27)	凝灰岩	中砥	－
5	砥石	D2	包含層１	大半欠	(31.5)	(24.5)	(11.5)	(12)	凝灰岩	中砥	－

第４節　まとめ

今回の調査成果から、本遺跡は基本的に古代の集落跡と判断される。以下、遺構・遺物の内容を検証し、遺跡の性格を考察する。

１　遺構

溝１が主要かつほぼ唯一の遺構であり、住居や建物などの居住に関わる遺構は全く検出されなかった。その溝１も、旧尾根裾の外周部に形成された自然流路に若干手を加えた程度のものと考えられ、遺構自体にもさしたる特徴は見出せない。そもそも、当調査区は段丘地形の狭隘な上位緩斜面上に立地し、およそ居住に適した地形とは言いがたいので、この結果も妥当なものではある。

立地や遺構の内容のみで判断するならば、当調査区は単なる集落の縁辺部と結論付けられるが、溝１覆土から遺物が大量に検出された事実は、遺構そのもの以上に重要な成果と言える。すなわち、遺物を廃棄したと見られる集落本体が溝１を遡った南方の何処かに展開していたこと、遺物の量に相応する規模を有していたことなどが推察されるからである。

２　遺物

土器は９世紀後半代から10世紀前半代に属する須恵器および土師器が主体だが、ともに破片資料が大半で、器形と焼成が交錯する例（土師器の器形に須恵器の焼成、またはその逆）が多々見られたことから、調査区周辺に須恵器および土師器の窯跡が近接して存在し、それらを削平した客土とともに当地に混入した状況が想定される。したがって、厳密には当遺跡の所属時期を示す遺物とは言えないが、遺構遺物と明確な時期差が見出せないことや、その遺構遺物自体も当地に流入してきたと考えられることなどから、大筋として当遺跡はこれら出土土器と同様の時期に属するものと見なしておく。

その溝１覆土遺物について、瓦塔の相輪（第47図19）や土鈴（第47図20）など、仏教的要素を有するものが見られることは、寺院など仏教関連施設の実在を示す貴重な物証として、特筆に値する。

３　遺跡

遺構・遺物の内容から判断して、当調査区は寺院を中心に展開する集落の縁辺部と考えられる。さらに、地理的条件を踏まえれば、集落の本拠地は当調査区南方に展開する上吉野集落、すなわち旧印内集落一帯にほぼ比定できると推測される。これは前章で導き出した結論とも見事に符合しており、これまで文献史料でしか確認し得なかった印内とその寺院について、明確な時期と裏付けが与えられた意義はきわめて大きいと言えよう。

第６章　吉野ヶ岳と山岳信仰

今回の上吉野法善田遺跡ならびに湯谷砂田遺跡調査成果から、９世紀代の上吉野集落周辺に寺院関連施設が実在し、宗教活動を展開していたことが明らかとなった。上吉野集落は吉野ヶ岳の山岳信仰の中心地と目され、集落の旧名「印内」の由来となった僧坊もその影響によって発生・成立したと推測されることから、今回の成果は吉野ヶ岳における山岳信仰の動態を示すものとも言える。

また、上吉野法善田遺跡のまとめ（第４章第４節）でも記したように、９世紀代とはまだ局地的であった白山信仰が徐々に中央の宗教勢力にも浸透し始め、全国的な普遍化・大衆化への胎動が始まる時期でもある。白山の膝元である越前の吉野ヶ岳一帯で、まさにその時期における山岳信仰の動態が見出せることも、また重要な成果と言うべきであろう。

吉野ヶ岳はその名のとおり、吉野地区を象徴し、泰澄伝説と相まって古くから信仰の対象とされてきた山である。その信仰の源泉は、泰澄伝説と越前五山に象徴される白山信仰に求められる。泰澄が幼少より生涯信仰し、白山の主神白山比咩大神の本地仏[1]ともされる十一面観音が祀られている事実が、吉野ヶ岳と白山信仰との関連を何よりも雄弁に物語っている。

一方、文献史料を見ると、「吉野の嶽　蔵王権現の宮あり　三芳野の吉野の山をなぞらへしにや」（『帰鴈記』）、「吉野山　泰澄大師和州吉野山蔵王権現ヲ勧請ノ霊山ナリ」（『越前国名勝志』）など、この山の名が奈良吉野に由来すると記されている。奈良吉野は、古くは記紀の時代から人々の崇敬を受けてきた地域で、特に大峯[2]はその天嶮な地勢から、山岳修験の根本道場として金峯山寺[3]や大峯山寺[4]を中心に発達し、現在に至るまでも人々の信仰を広く集め続ける修験道の聖地である。

確かに、山頂の「蔵王堂」とは文字どおり吉野修験道の本尊たる蔵王権現を祀る堂に他ならない。また、山頂への道は現在使われている上吉野からの道と、かつて使われていた湯谷[5]からの道の二つがある（第４図）が、この二つの道は山頂を経由しつつ、湯谷ー上吉野間を縦走する経路を辿っており、大峯山中を縦断する大峯奥駈道[6]を模したかのような印象も受ける[7]。ほかにも、印内の枝村であった島[8]（現、松岡島集落）に伝わる、後醍醐天皇の皇子尊良親王終焉の伝承[9]などについても、信憑性はさて置き、吉野に対する崇敬や憧憬のあらわれと解釈できよう。

このように、吉野ヶ岳には白山信仰と大峯信仰が並立しており、白山修験道の修行地としては特異な事例である[10]。大峯信仰は吉野修験道を知る修行者が導入、定着させたと考えられるが、当地で白山信仰と並立するに至った経緯については、残念ながら史料が非常に乏しく、断片的にしか窺い知れない。

まず、開山の時期については、堂の縁起によれば、泰澄が養老二年（718）に十一面観音と蔵王権現を祀ったとされる。無論、伝承を鵜呑みにはできないが、蔵王堂周辺で採集された須恵器片の比定時期と、上吉野法善田遺跡ならびに湯谷砂田遺跡の主体時期は同じ９世紀代であり、吉野ヶ岳山中・山麓一帯における山岳修験活動は、平安初期までにはかなり本格的に機能していたものと推測される。

下って、湯谷神明神社の仏像が平安末期～鎌倉初期の作とされることから、中世初期までには室堂などを含めた修行場の形態がほぼ確立されていたと推測される。さらに正中二年（1325）十一月二十五日付承鎮法親王附属状（『三千院文書』）には「越前国吉野保[11]」とあり、鎌倉末期までには吉野の地名とともに、大峯信仰が定着していたと考えられる[12]。

上吉野の旧名である「印内」が文献に見える[13]のは、慶長十五年（1610）十月二十六日付徳善寺惣門徒中言上書（『昌蔵寺文書』）が最初であるが、『越前国名蹟考』の記述から推測して、僧坊は天正年間より相当以前に成立しており、地名も僧坊同様に定着していたと見なすのが妥当であろう。

明治期に村名は印内から上吉野と改称され、その地名も伝承の類に属してしまったが、吉野ヶ岳の信仰は絶えることなく受け継がれ、現在に至っている。なぜ当地なのか、という疑問は依然として残るが、白山信仰にせよ大峯信仰にせよ、古の人々がかの地に対して深い崇敬と憧憬の念を抱き、その補完をともに吉野ヶ岳に求めた結果が、現在の吉野地区や吉野ヶ岳の有り様であるように思える。

註

1　神仏習合（垂迹）思想により、日本古来の神と同一化された仏尊。

2　奈良県吉野から和歌山県熊野にかけての、紀伊半島中央部に連なる山岳地帯の総称。

3　現、金峯山修験本宗総本山。奈良県吉野郡吉野村吉野山に所在する。本来は大峯山寺も含めた寺院の総称で、白鳳年間（7世紀末頃）に役小角によって開かれたと伝えられる。本堂は「山下の蔵王堂」と呼ばれる。

4　金峯山寺の南約28kmにある、奈良県吉野郡天川村山上ヶ岳（1,719m）山頂に所在する。本堂は「山下の蔵王堂」に対して、「山上の蔵王堂」と呼ばれる。

5　湯谷という集落名は昭和30年（1955）に改称したもので、旧名は「猪谷」である。猪谷田畑遺跡が湯谷地籍に属するのも、旧名の名残である。なお、江戸初期には印内・猪谷・島・宮重をまとめて印内猪谷村と称していたが、後に分村している。

6　吉野（金峯山寺･大峯山寺）と熊野（熊野本宮大社）の二霊場を結ぶ修行道。熊野から吉野へ向かう行程を順峯、吉野から熊野へ向かう行程を逆峯とそれぞれ呼び、熊野修験の修行者達は順峯を、吉野修験の修行者達は逆峯を主に辿ったとされる。ちなみに、熊野修験は本山派と呼ばれる天台宗系教団であり、吉野修験は当山派と呼ばれる真言宗系教団である。

7　「白山信仰の行者達は、主として猪谷から板室（室堂）へ、それより山の稜線に出て、山頂に登拝し、また大峰信仰の行者達は、山麓の院内（印内）と云われていた上吉野の僧房より、九折の道をたどって山頂に登拝し、共にこの山を練行の道場としていた」（野村2002　27頁）。この「白山」を「熊野」に置き換えると、そのまま大峯における順峯･逆峯の構図と符合する。なお、白山信仰は平泉寺（勝山市平泉寺町）が平安時代末頃に比叡山延暦寺の末寺となることから、天台宗の全国分布に伴って全国に流布していくが、熊野修験も同様に天台宗系教団であることは非常に興味深い。

8　第３章註１参照。

9　南北朝期の作と見られる宝篋印塔１基が実在し、尊良親王の墓と伝えられる。『太平記』では、親王は延元二年（1337）に越前国敦賀の金ヶ崎城にあって、足利勢に攻められて自害したとされるが、吉野地区の伝承では、親王は金ヶ崎城を逃れ、当地に隠棲しつつ、時機を待つも果たせず、この世を去ったと伝えられる。

10　吉野ヶ岳のほかにも、泰澄に縁の深い越知山の修験霊場である大谷寺（丹生郡越前町）に、平安時代の作と見られる一木造の蔵王権現立像が伝えられていることが近年明らかにされた。また、「平泉寺境内絵図」にも蔵王権現の堂舎が確認されるという（岩井 2007）。ただ、いずれの場合も主体となるのはあくまで白山信仰であり、吉野ヶ岳のように両者が完全に並立している状況ではない。

11　天台宗円融房領。吉野地区の谷間一帯に存在したとされる荘園で、成立期は鎌倉期以前とも言われる。円融房とは現在の三千院門跡（京都市左京区大原）で、梶井門跡または梨本門跡とも呼ばれる。

12　註10にあるように、越知山では平安期に大峯信仰が移入していたと見られることから、吉野ヶ岳においても同様の可能性が指摘できる。

13　確定した年代ではないが、慶長十一年（1606）頃の越前国絵図にも印内猪谷村として見える。いずれにせよ、確実に遡れるのは江戸期初頭までである。

参考文献

小葉田淳 監修　1981　『福井県の地名』　日本歴史地名体系第18巻　平凡社
河原純之･島田正彦･隼田嘉彦･松浦義則 責任編集　1989　『角川日本地名大辞典　18　福井県』　角川書店
野村英一　1978　『松岡町史　上巻』
野村英一　2002　「Ⅱ－５．越前五山の尊像」『地方作仏教尊像の研究　若狭・越前の秘仏』　25～38頁
前園実知雄･松田真一 編　2004　『吉野　仙境の歴史』　文英堂
岩井孝樹　2007　「泰澄と白山越前修験道」『佛教藝術』　294号　毎日新聞社　64～91頁

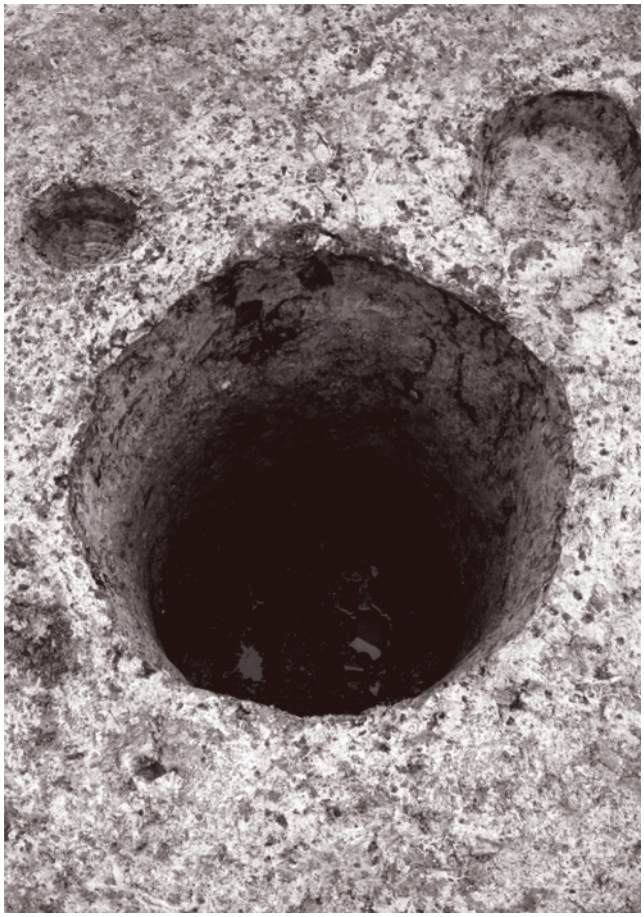
写　真　図　版

図版第一　猪谷田畑遺跡　遺構

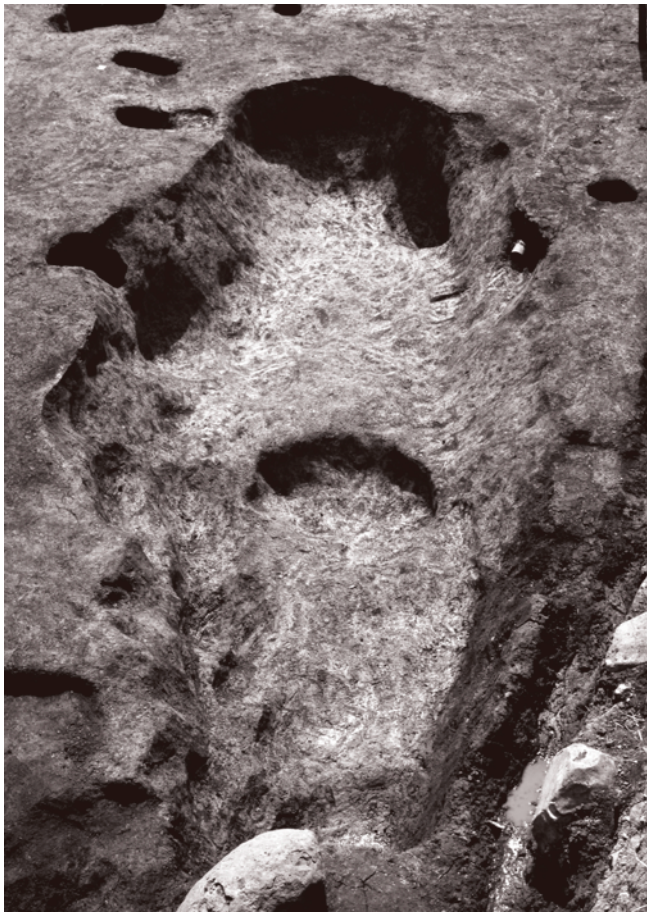
（1）　調査区遠景（東より）

（2）　調査区全景（北より）

図版第二　猪谷田畑遺跡　遺構



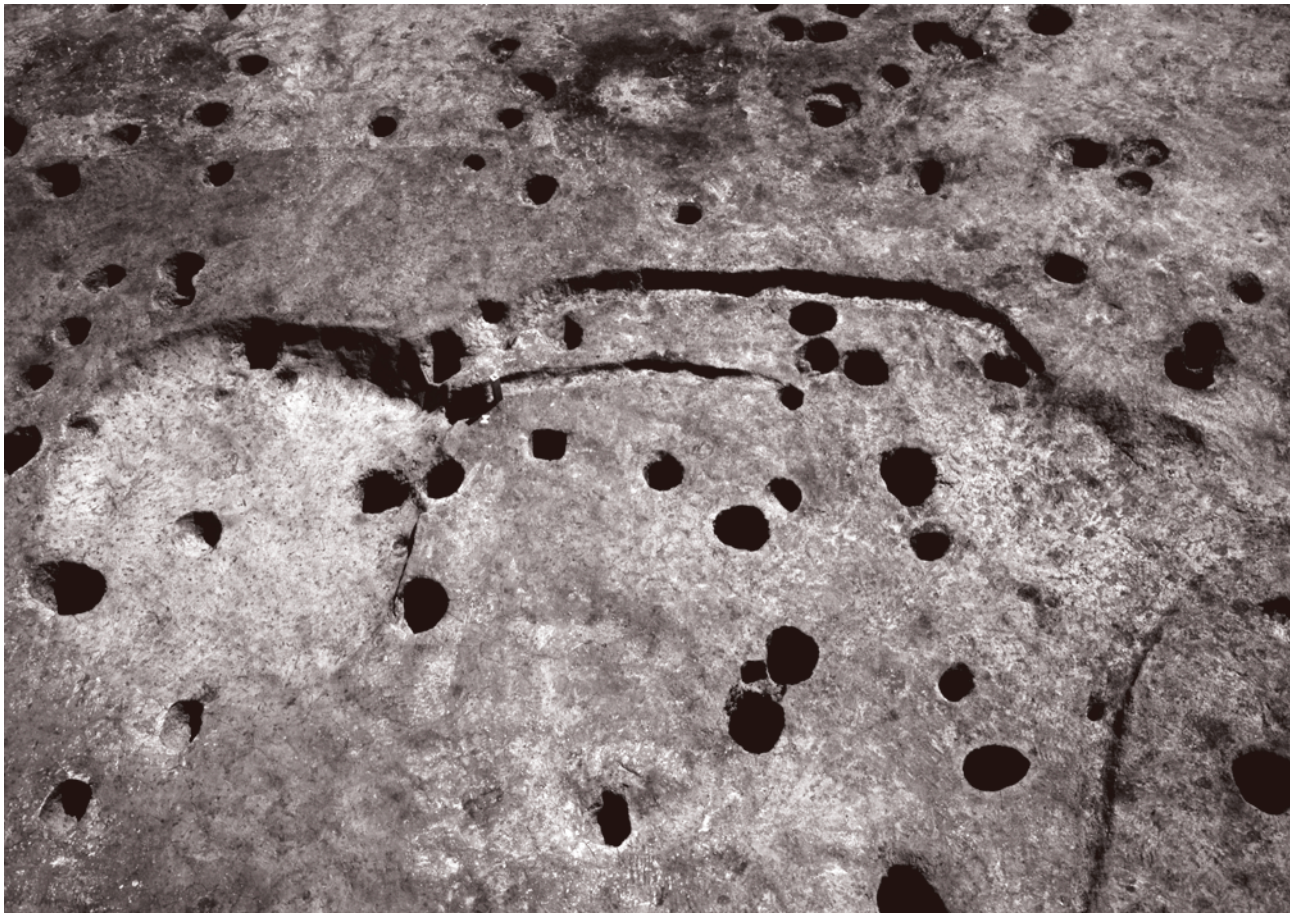
（1）　井戸１（南東より）



（2）　土坑１（北西より）

（3）　竪穴１（北東より）

（1）土坑 10・溝８（東より）



（2）土坑 11・13・溝４・５・７（北より）

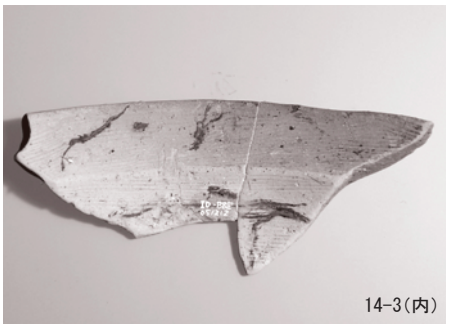
図版第四　猪谷田畑遺跡　遺物

14-1(外)

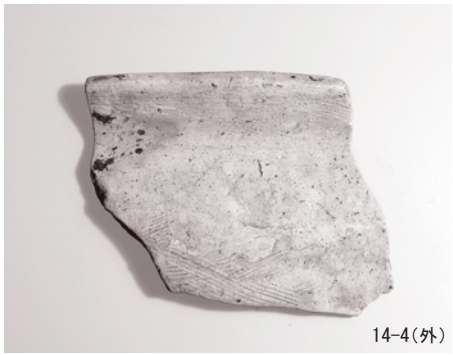
14-1(内)

14-8

14-3(外)


14-3(内)

14-9

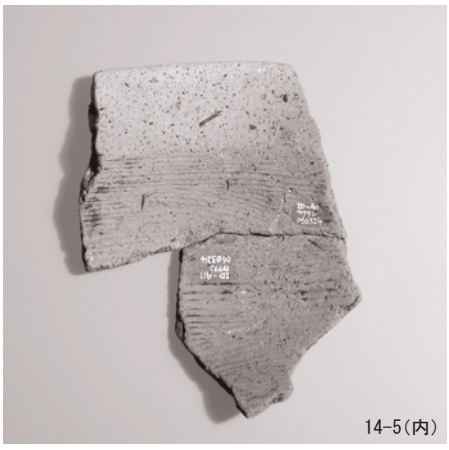

14-4(外)

14-4(内)

14-11

14-11(側)

14-5(外)


14-5(内)

14-12

14-12(側)

14-7(外)

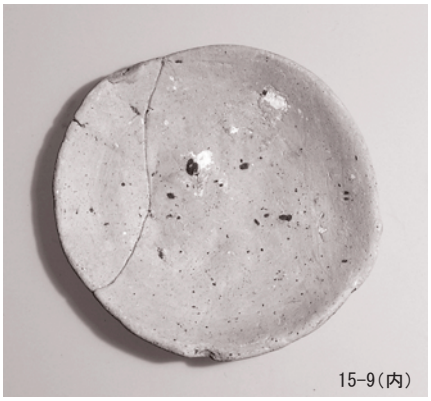
14-7(内)

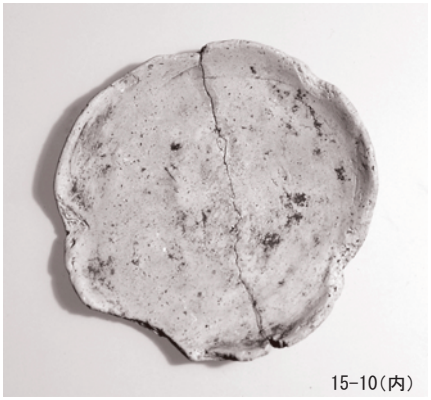
14-14

14-14(側)

図版第五　猪谷田畑遺跡　遺物

15-8(内)

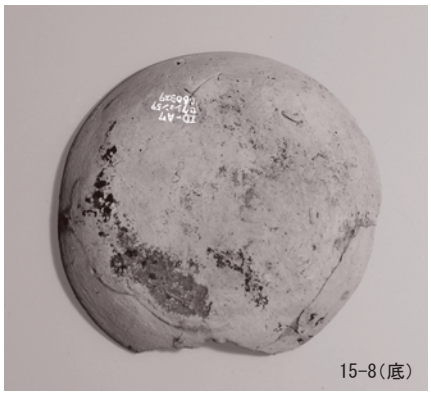

15-9(内)


15-10(内)

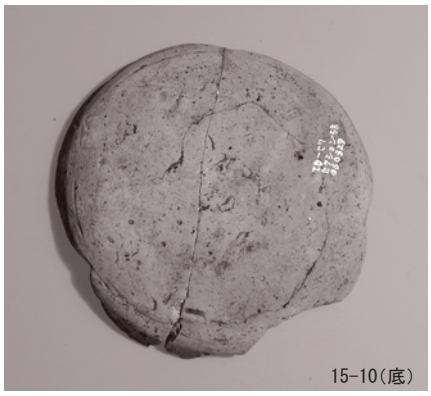
15-8

15-9

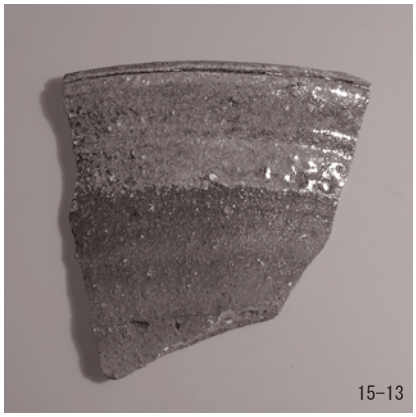
15-10


15-8(底)

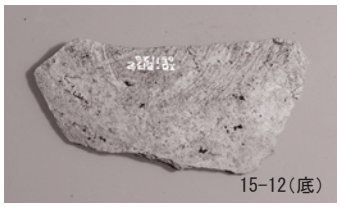
15-9(底)


15-10(底)

15-1


15-13

15-12


15-12(底)

15-1(底)

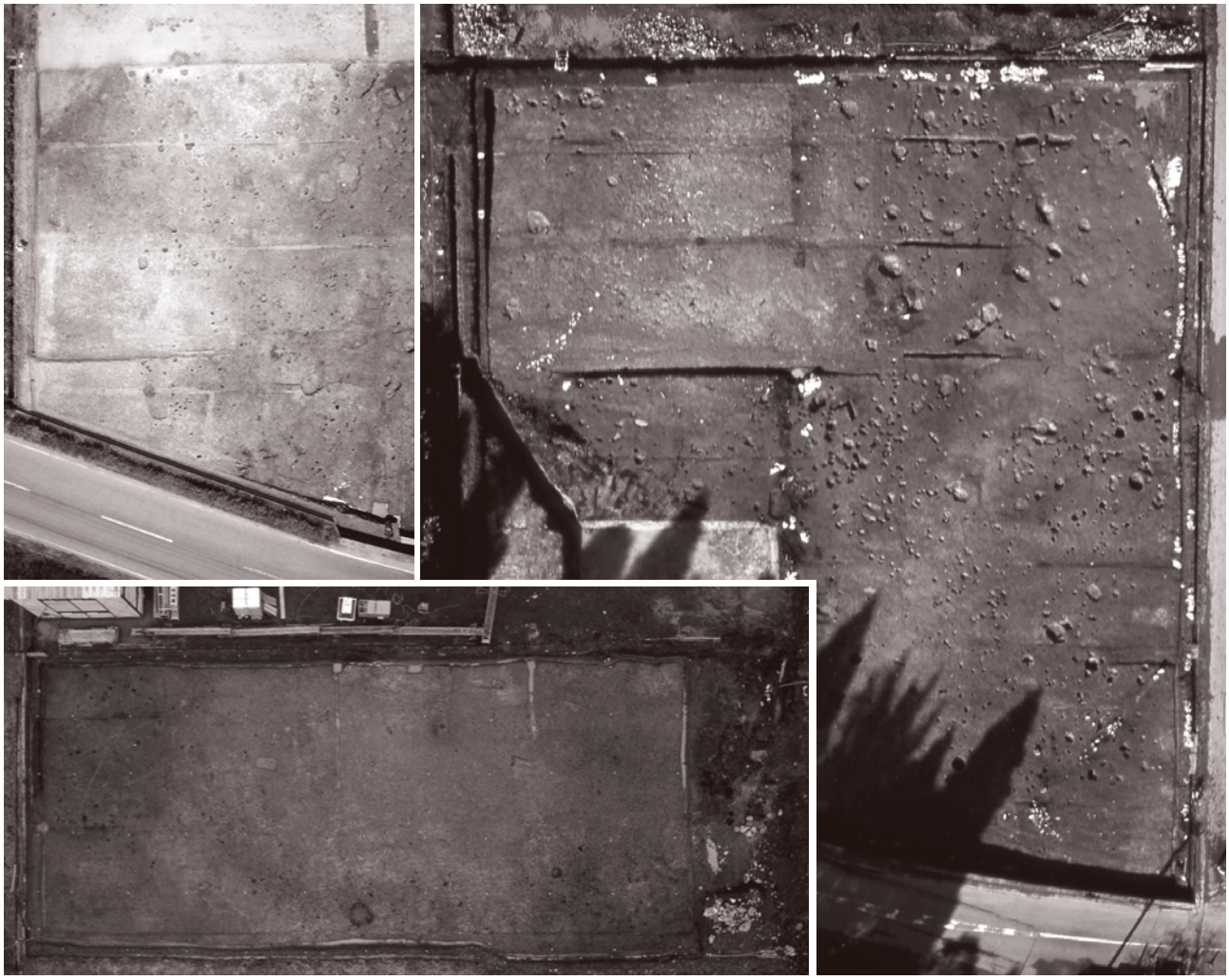
16-1

16-1

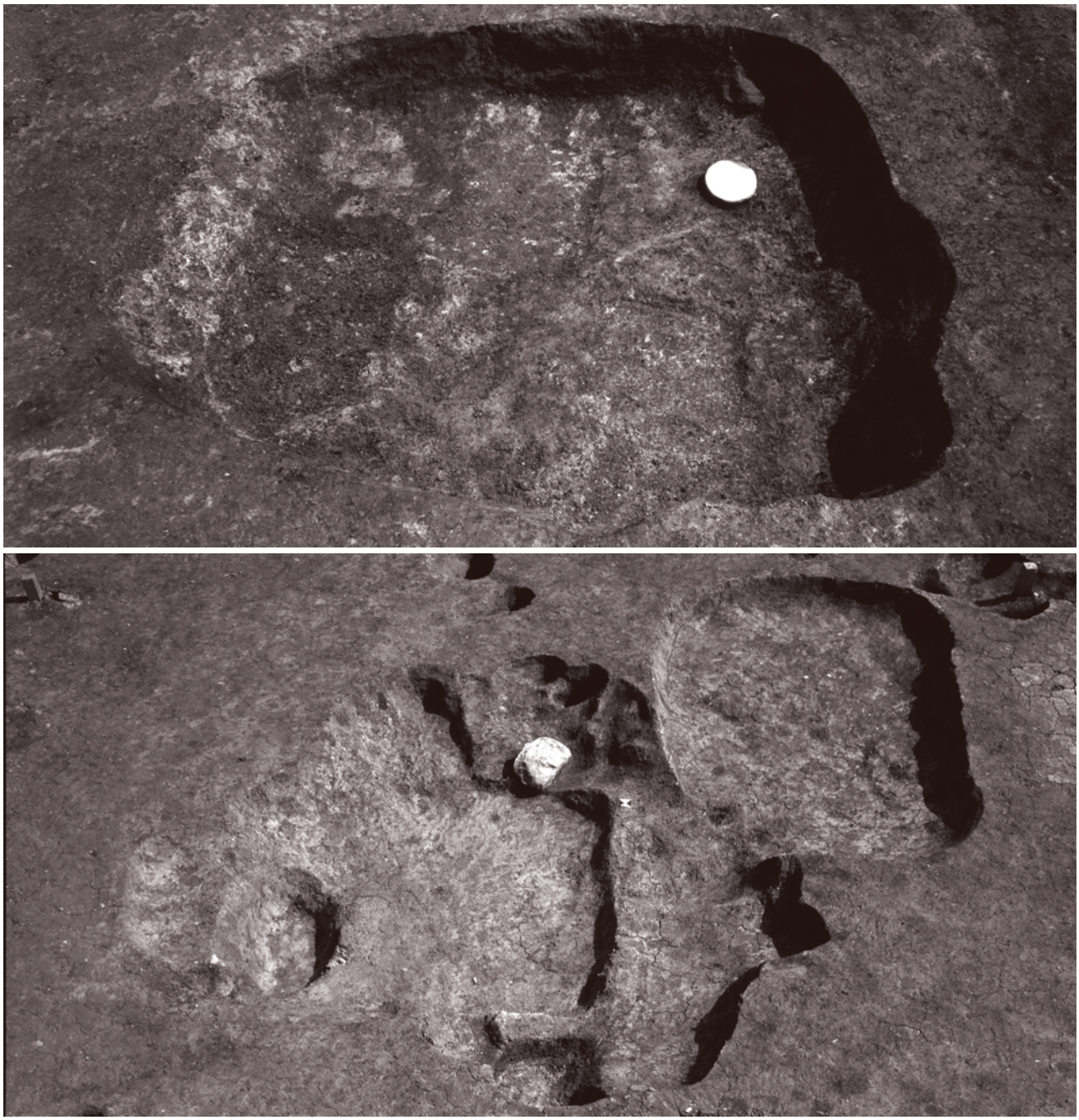
16-2

図版第六　上吉野法善田遺跡　遺構

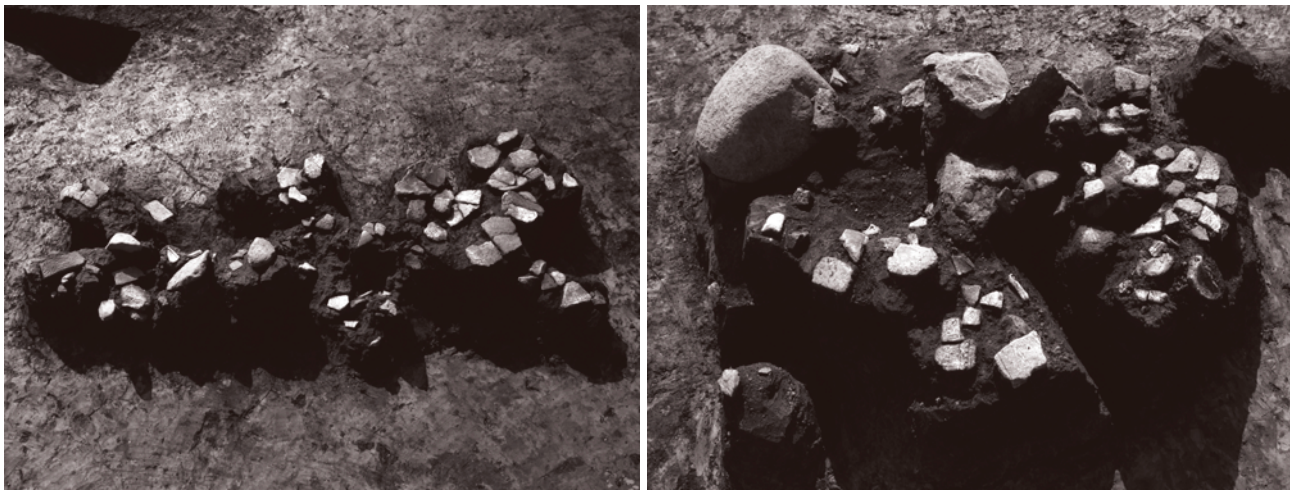
（1）　調査区遠景（南東より）



（2）　調査区①･②･③全景（南より）　左上：調査区①　右：調査区②　左下：調査区③

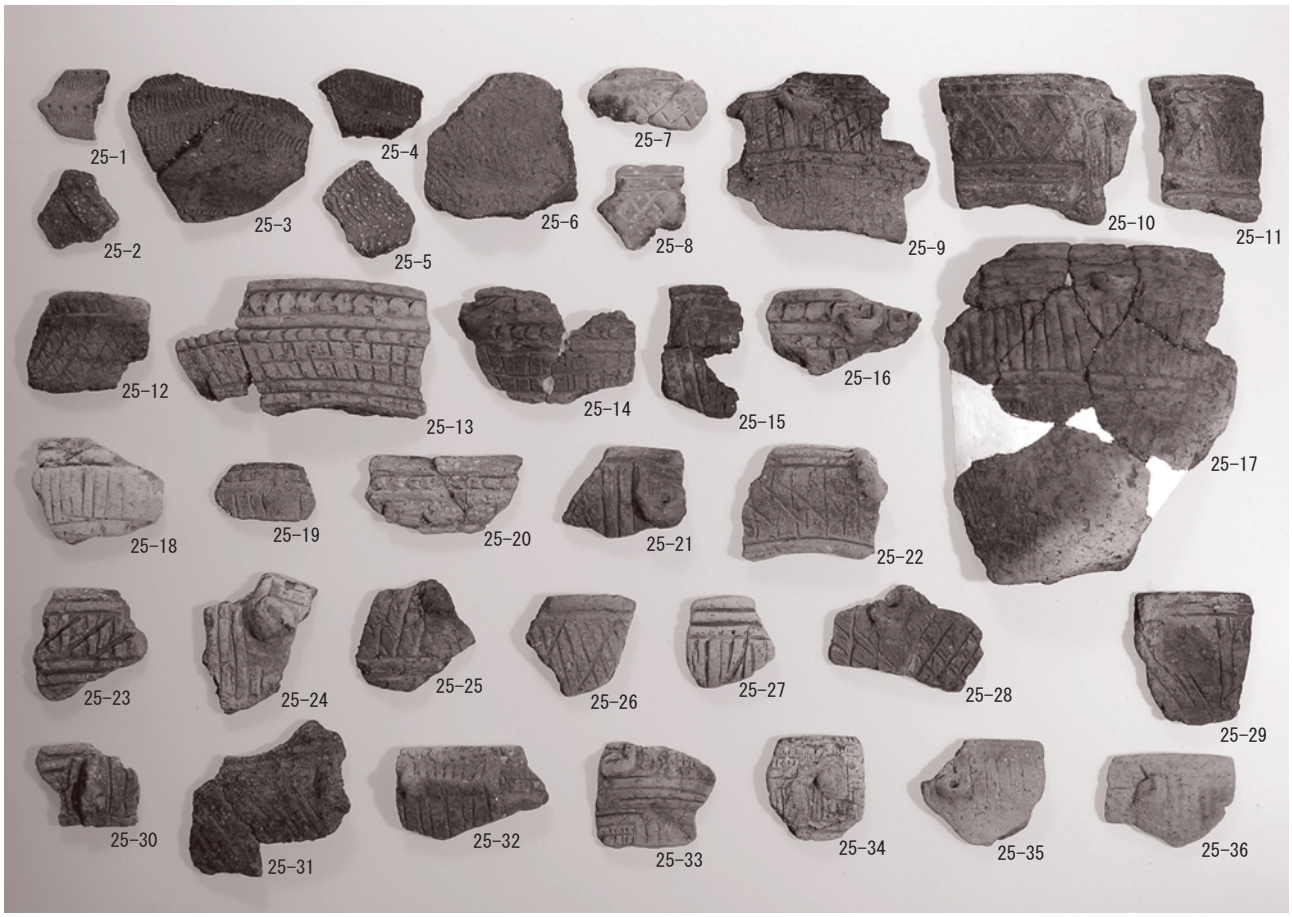


（1）　土坑１・６（北より）　上：土坑１内部焼土検出状況　下：土坑１・６完掘状況

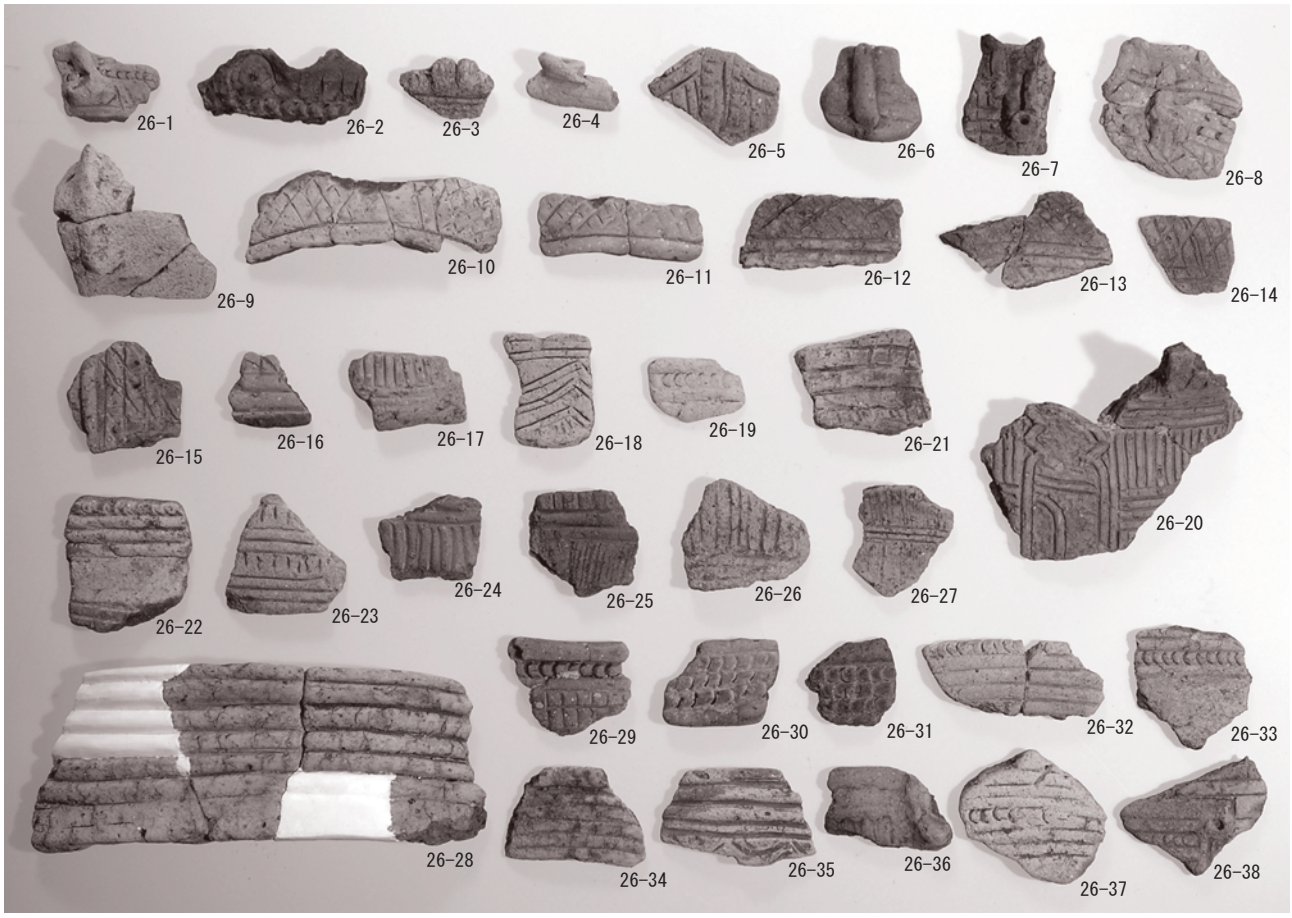


（2）　土器集中出土状況（北より）　左:北側集中出土　右：南側集中出土

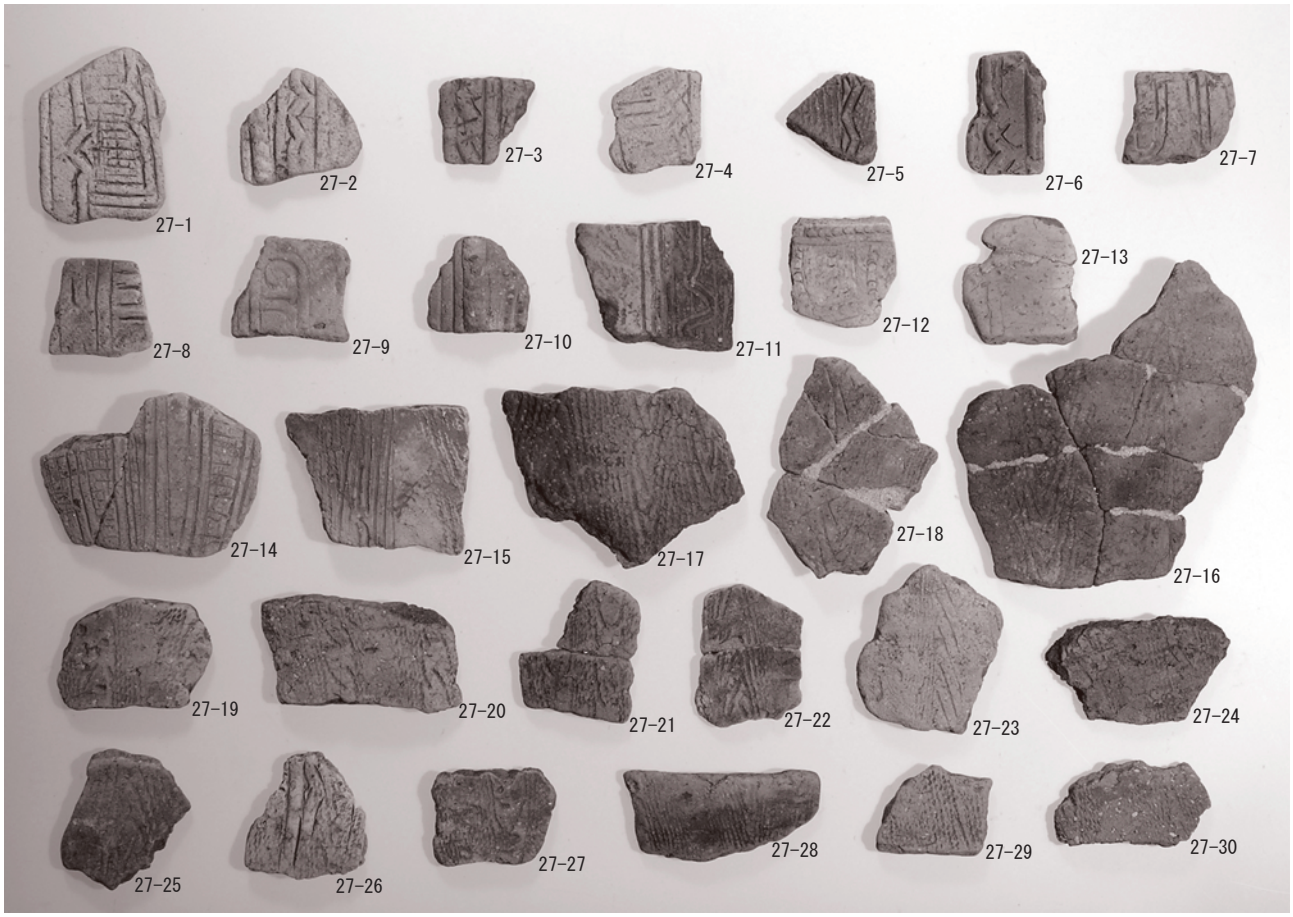
図版第八　上吉野法善田遺跡　遺物



（1）　縄文土器



（2）　縄文土器


27-1
27-2
27-3
27-4
27-5
27-6
27-7
27-8
27-9
27-10
27-11
27-12
27-13
27-14
27-15
27-17
27-18
27-16
27-19
27-20
27-21
27-22
27-23
27-24
27-25
27-26
27-27
27-28
27-29
27-30

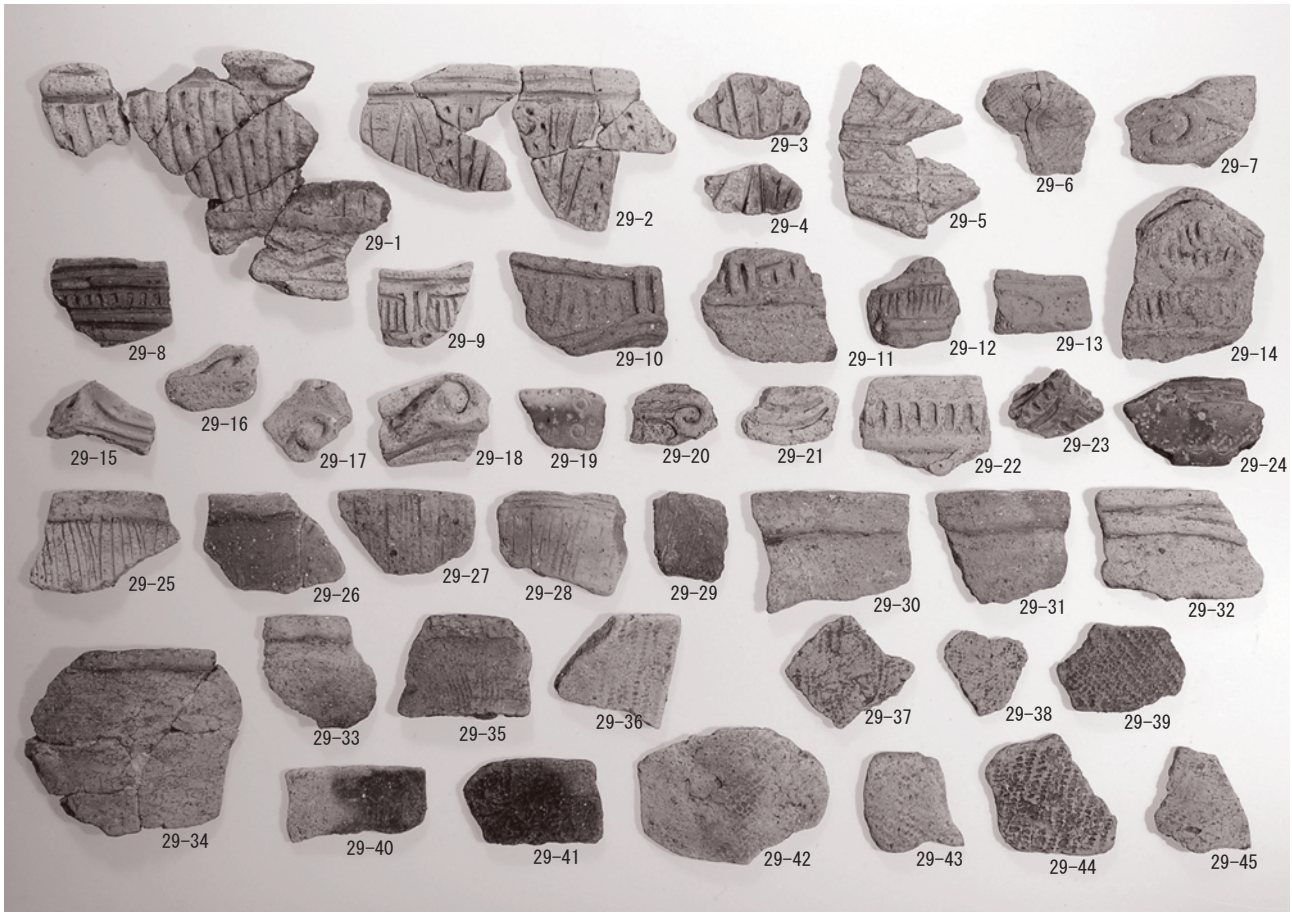
（1）　縄文土器

28-1

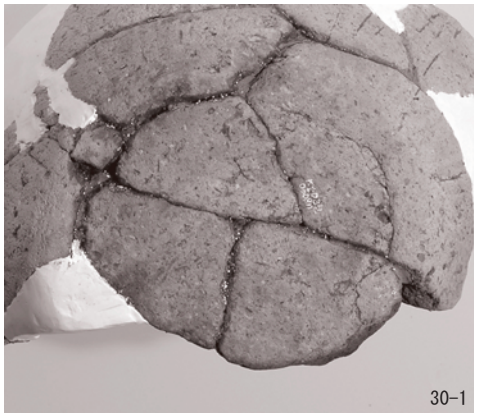
28-2

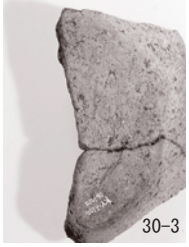
（2）　縄文土器

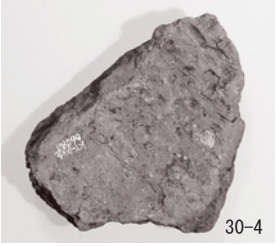
図版第一〇　上吉野法善田遺跡　遺物

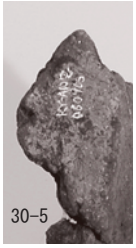


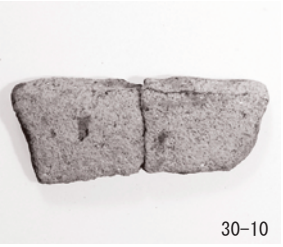
（1）　縄文土器

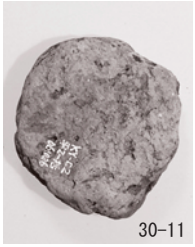












（2）　縄文土器

図版第一一　上吉野法善田遺跡　遺物

31-2

31-3

31-7

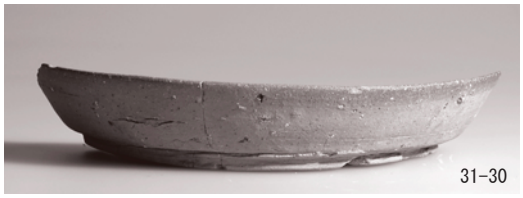
31-8

31-24

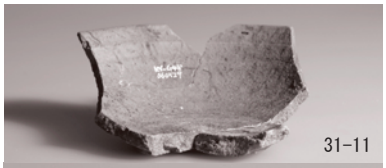
31-25

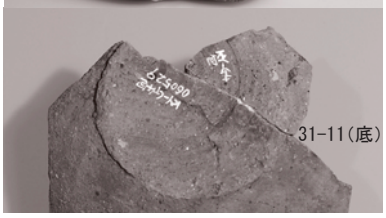
31-26

31-27

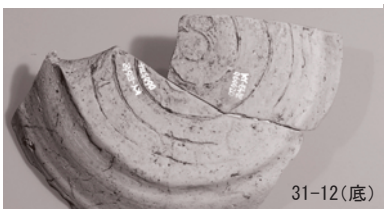

31-30

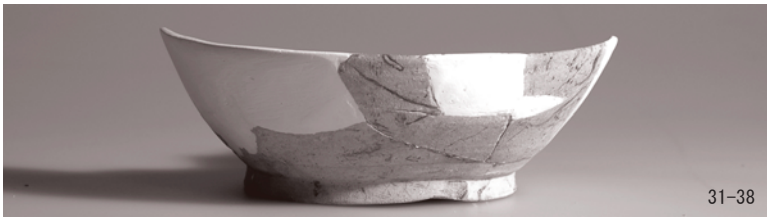
31-36


31-11

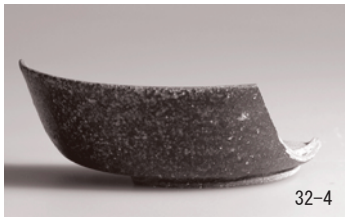

31-11(底)

31-12

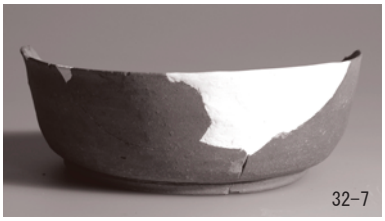

31-12(底)


31-38

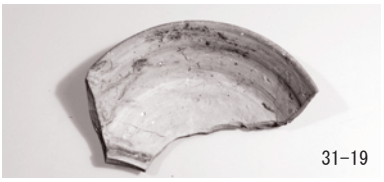
32-1


32-4

32-6

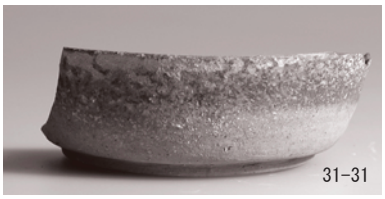

32-7

32-9

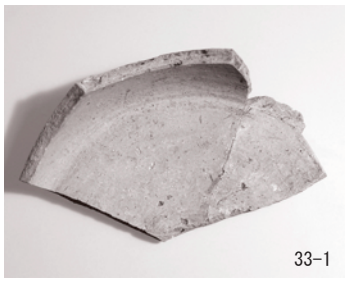

31-19

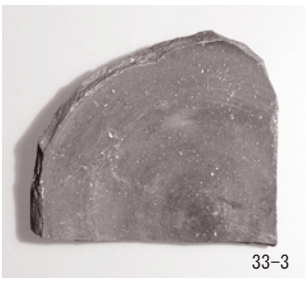
31-20

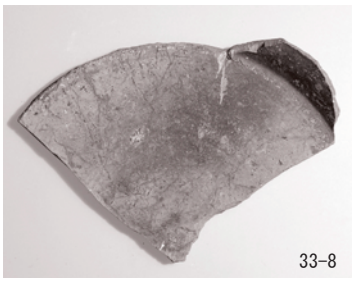
31-21

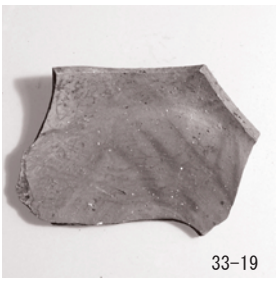

31-31

図版第一二　上吉野法善田遺跡　遺物

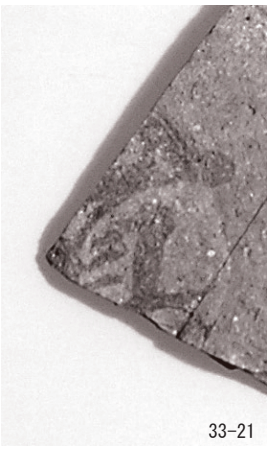

33-1

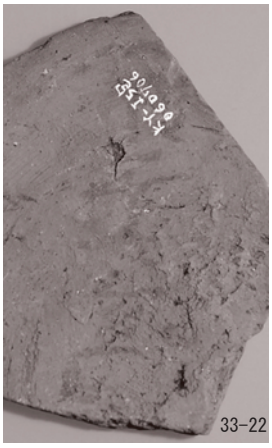

33-3

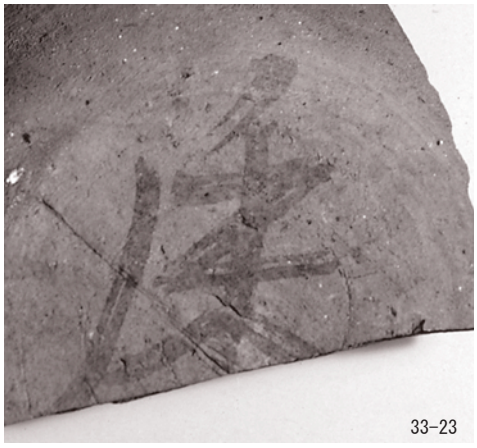

33-8

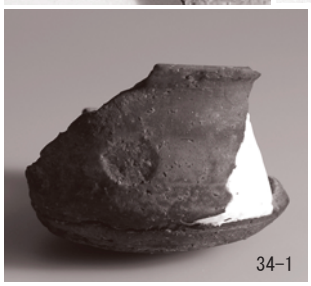

33-19

33-20


33-21


33-22


33-23


34-1

34-2

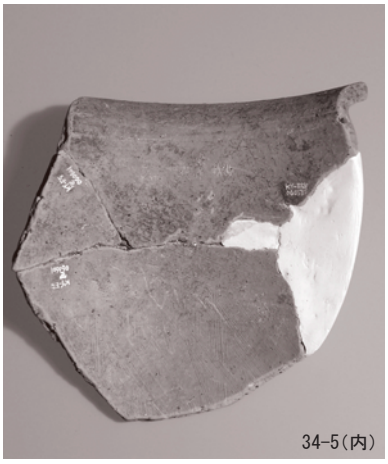
34-3

34-6

34-7

34-8

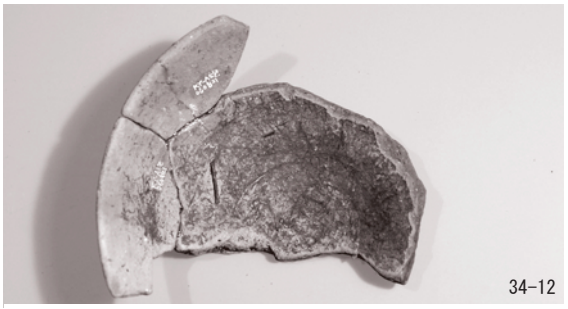
34-5(外)

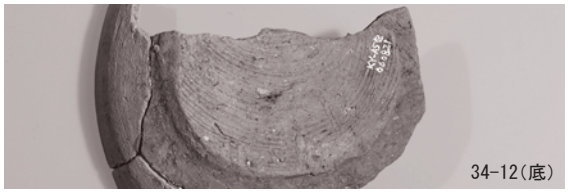

34-5(内)

34-11

図版第一三　上吉野法善田遺跡　遺物

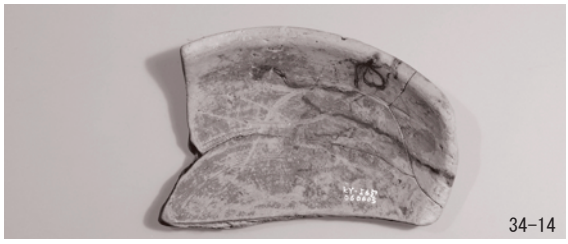
34-16


34-12


34-12(底)

34-13

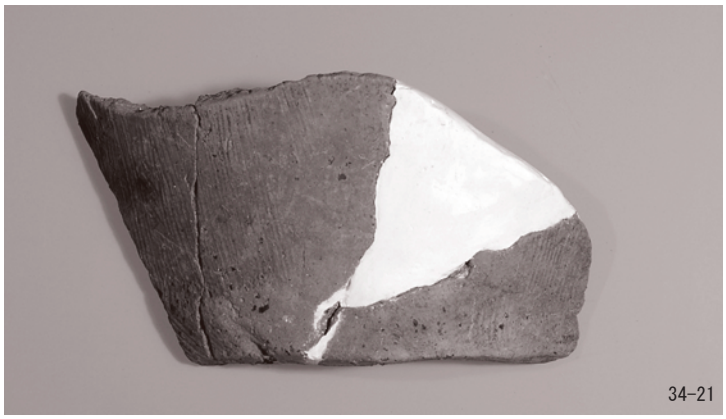
34-13(底)


34-14

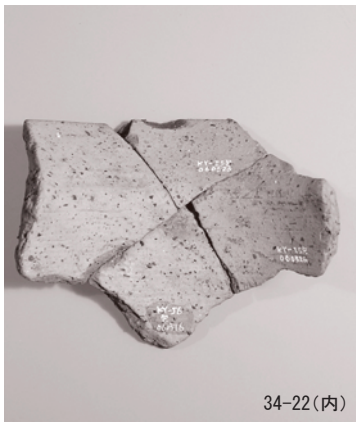
34-24

34-20(外)

34-20(内)


34-21

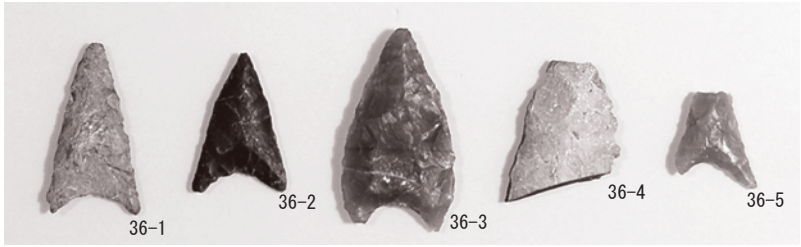
34-22(外)

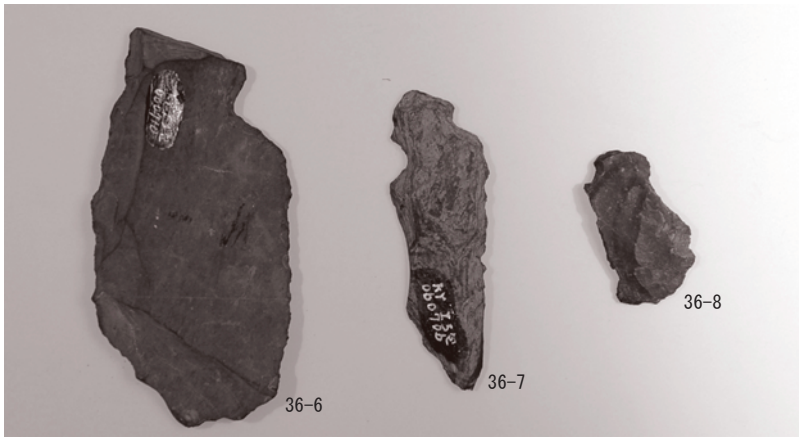

34-22(内)

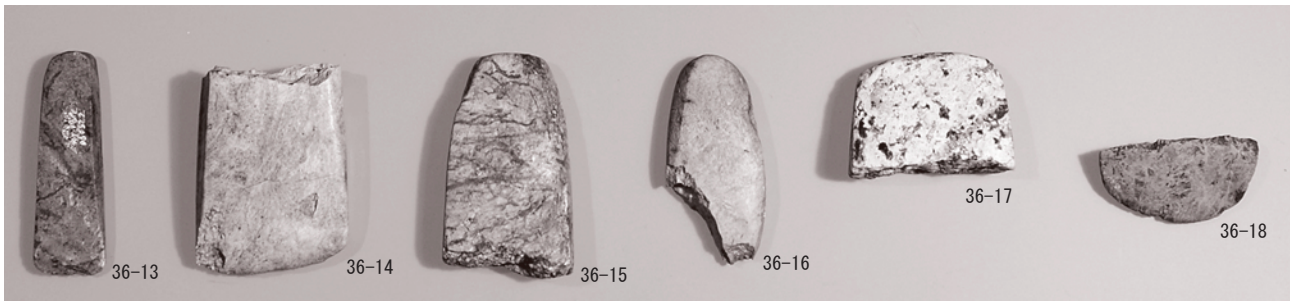
34-23(外)

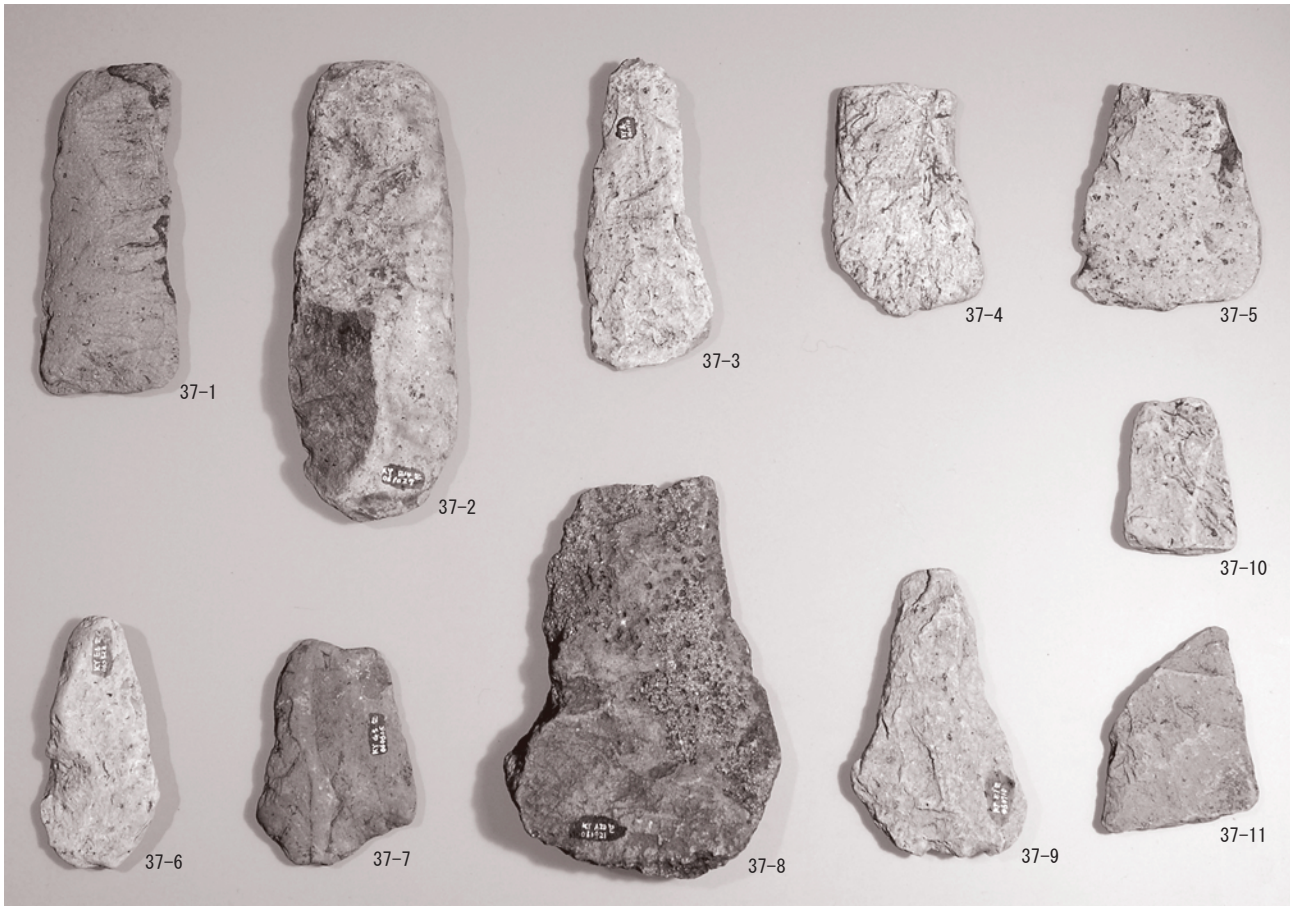
34-23(内)

図版第一四　上吉野法善田遺跡　遺物



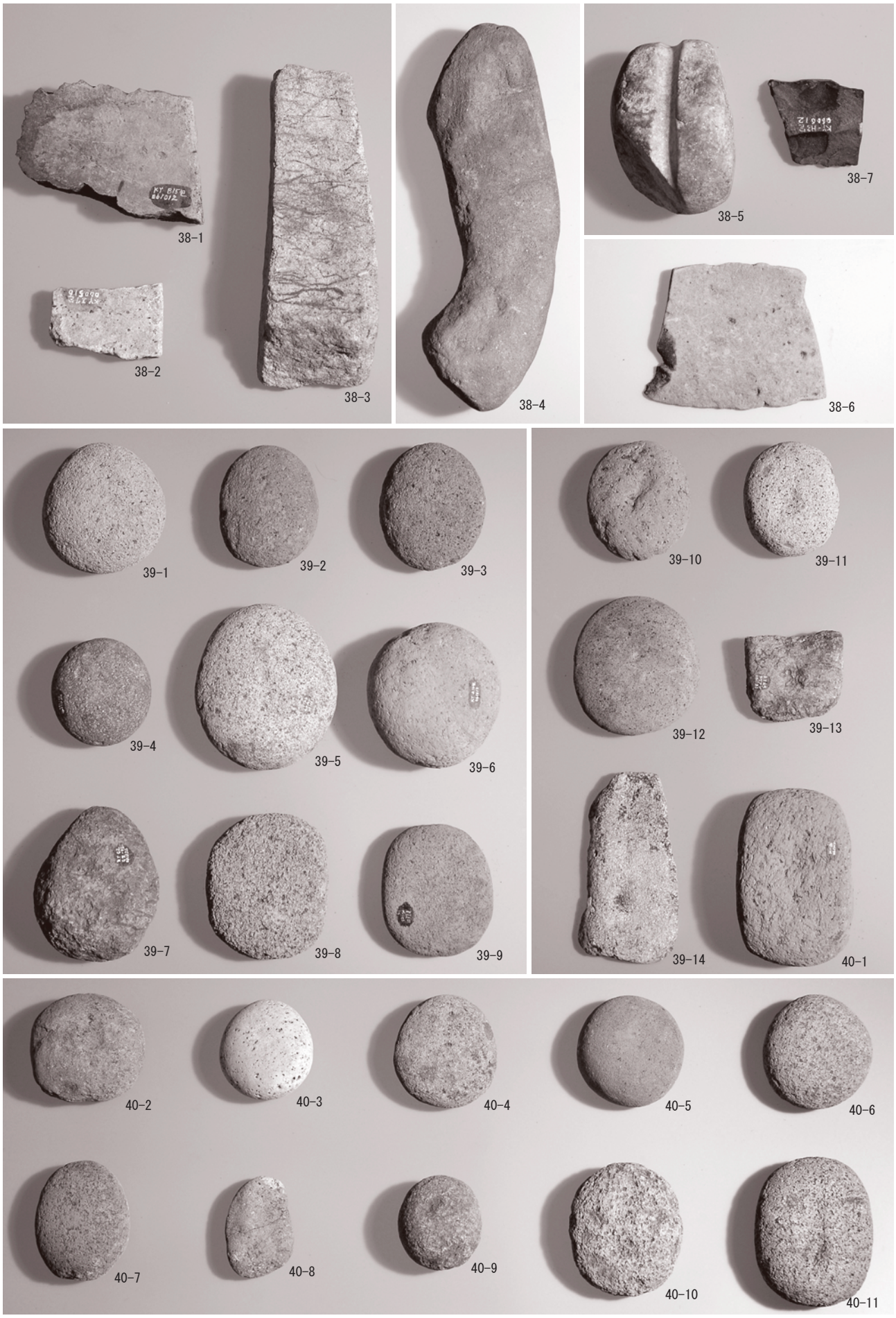






上段左上：石鏃、同左下：石匙、同右：石錘　中段：磨製石斧　下段：打製石斧

図版第一五　上吉野法善田遺跡　遺物



上段左：砥石、同中央・右：不明石器　中・下段：磨石類

図版第一六　湯谷砂田遺跡　遺構

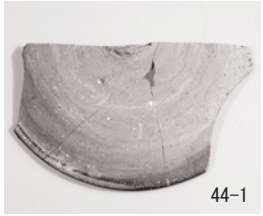
（1）　調査区全景（南より）

（2）　調査区全景（東より）

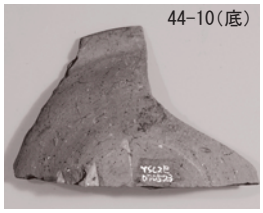
（1）　溝１・３（北西より）

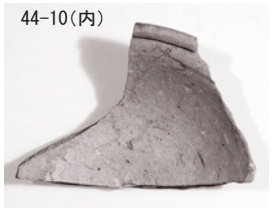
（2）　溝１・３（南東より）

図版第一八　湯谷砂田遺跡　遺物

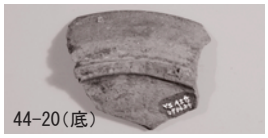

44-1

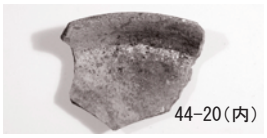
44-9

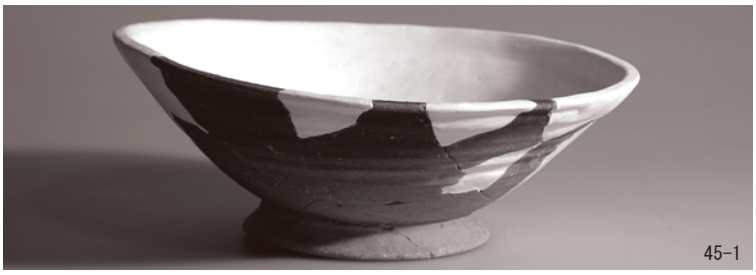

44-10(底)

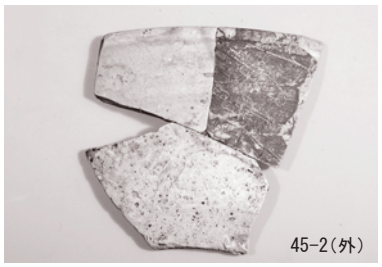

44-10(内)

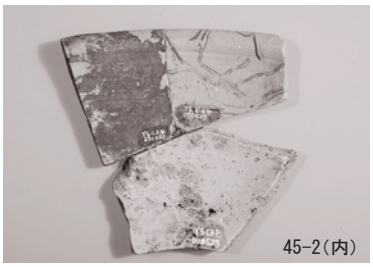
44-14


44-20(底)


44-20(内)


45-1

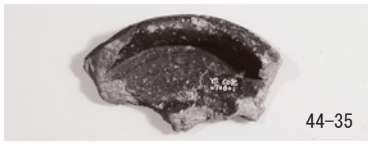

45-2(外)

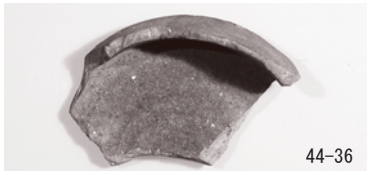

45-2(内)

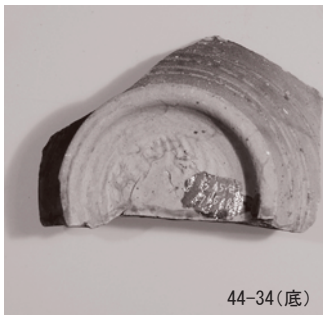
45-4

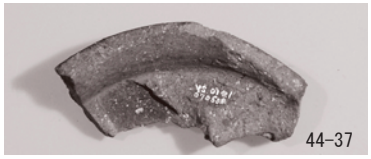
44-27

44-34

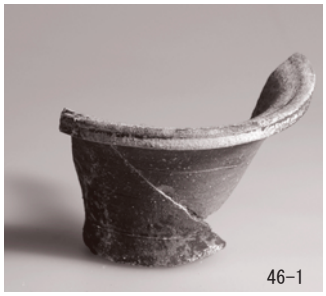

44-35


44-36

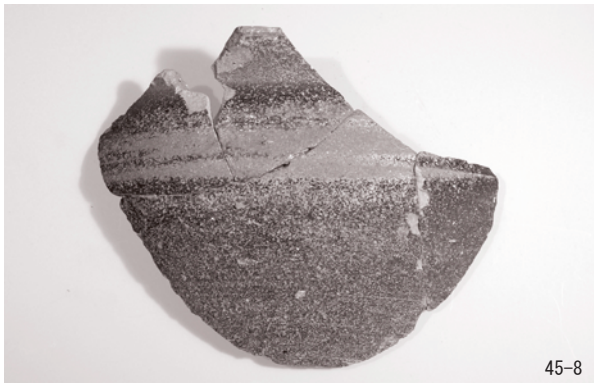

44-34(底)


44-37

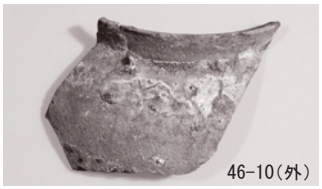
44-38

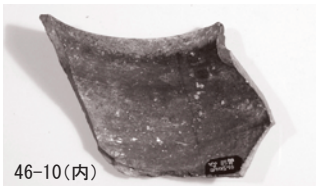

46-1

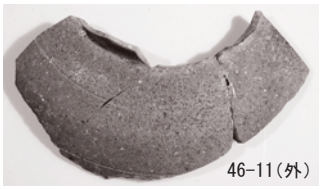
45-7

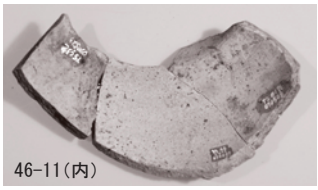

45-8

46-5


46-10(外)


46-10(内)


46-11(外)

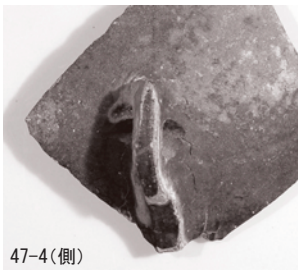

46-11(内)

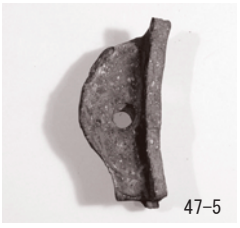
図版第一九　湯谷砂田遺跡　遺物

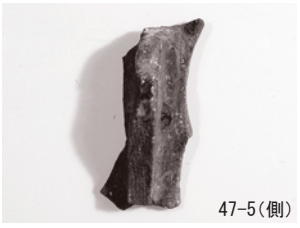
46-12

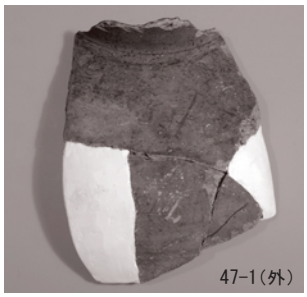
46-12(側)

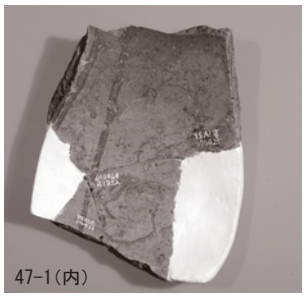
47-4

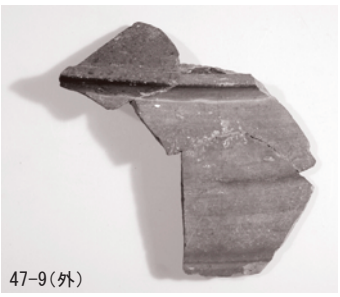

47-4(側)


47-5

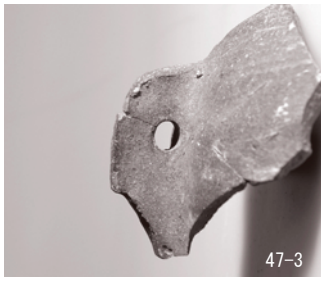

47-5(側)

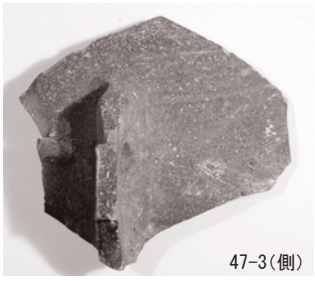

47-1(外)


47-1(内)

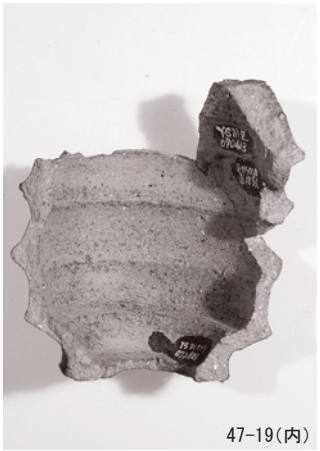

47-9(外)

47-9(内)


47-3

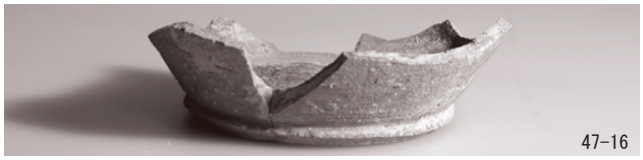

47-3(側)

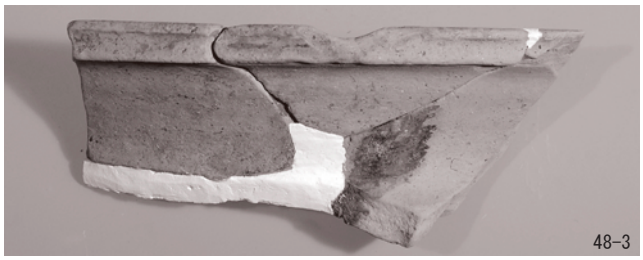
47-19(外)

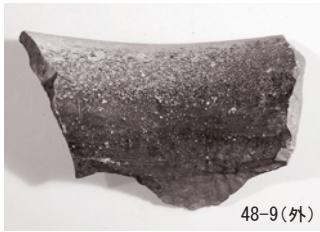

47-19(内)

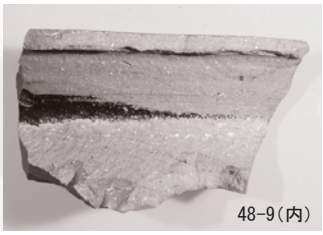
47-18

47-20


47-16


48-3


48-9(外)


48-9(内)

48-10

図版第二〇　湯谷砂田遺跡　遺物

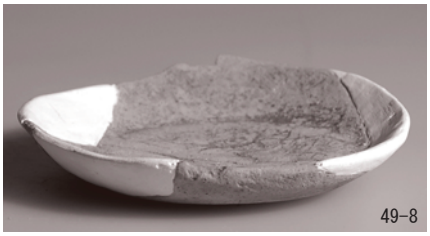
49-1

49-3

49-4

49-6

49-7


49-8

49-32

49-35

49-46

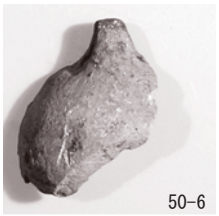
49-47

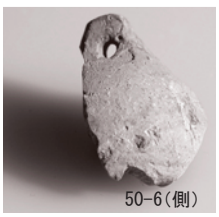
49-5

50-3

50-1（外）

50-1（内）


50-6


50-6（側）

50-11

50-11（側）

51-1（表）

51-1（裏）

51-2

51-3

報　告　書　抄　録

ふりがな	いだにたばたいせき　かみよしのほうぜんだいせき　ゆだにすなだいせき
書名	猪谷田畑遺跡　上吉野法善田遺跡　湯谷砂田遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第114集
編著者名	中森敏晴　赤澤徳明　白川綾　水谷圭吾
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所在地	〒910-2152　福井県福井市安波賀町４-10　　TEL　0776-41-3644
発行年月日	西暦2010年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いだにたばたいせき 猪谷田畑遺跡	よしだぐんえいへいじちょう 吉田郡永平寺町 まつおかゆだに 松岡湯谷	18322	14028	36°3′55″	136°17′55″	20051108～ 20060327	1,563㎡	松岡吉野地区県営経営体育成基盤整備事業
かみよしのほうぜんだいせき 上吉野法善田遺跡	よしだぐんえいへいじちょう 吉田郡永平寺町 まつおかかみよしの 松岡上吉野		14032	36°3′29″	136°17′54″	20060424～ 20070330	3,640㎡	
ゆだにすなだいせき 湯谷砂田遺跡	よしだぐんえいへいじちょう 吉田郡永平寺町 まつおかゆだに 松岡湯谷		14030	36°3′41″	136°17′56″	20070412～ 20070627	512㎡	

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
猪谷田畑遺跡	集落	中世 （13世紀代）	掘立柱建物 土坑・溝 井戸	土師器（かわらけ、甕、鍋、羽釜など） 中世陶器	土坑と溝の複合遺構を２基検出。
上吉野法善田遺跡	集落	古代 （９世紀代）	掘立柱建物 ピット列 土坑	縄文土器・土師器・須恵器 石器（石鏃・石匙・打製石斧など）	須恵器には墨書土器や転用硯が含まれる。
湯谷砂田遺跡	集落	古代 （９世紀後半代～10世紀前半代）	溝（水路） 土坑	土師器 須恵器 越前焼	遺物の大半は、客土からの混入と推測される。

要約

３遺跡とも松岡吉野地区の谷の中に所在する。同地区は吉野ヶ岳を中心とした山岳修行の場として古くから有名で、中世以前には寺院も存在したとされ、３遺跡との関連性が注目される。

猪谷田畑遺跡：基本的に居住域と推測されるが、何らかの作業場が設置されていた可能性がある。

上吉野法善田遺跡：墨書土器や転用硯など、かつて存在したとされる寺院の影響が推定される。

湯谷砂田遺跡：大量の流入遺物から、近隣に相応規模の集落本体が展開していた可能性は高い。

福井県埋蔵文化財調査報告　第114集

猪谷田畑遺跡
上吉野法善田遺跡
湯谷砂田遺跡

―松岡吉野地区　県営経営体育成基盤整備事業に伴う調査―

平成22年３月15日　印刷
平成22年３月31日　発行

発行　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒910-2152　福井市安波賀町４－10
印刷　白崎印刷株式会社
〒910-0843　福井市西開発３－715